
魔法少女リリカルなのはstrikers × Fate stay night ~ 剣の祈り ~

ロサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは `striker's Fate stay
night` 剣の祈り

【Nコード】

N3413Q

【作者名】

ロサ

【あらすじ】

クロノ・ハラウンに頼まれ機動六課に異動になった「衛宮 嗣音^{ぐね}」が織り成す物語。衛宮士郎にお姉さんがいたら、それがリリカルなのはの世界に来たらというIFストーリーです。駄文、IFがお嫌いな方は戻るを押してください。

プロローグ 衛宮 嗣音（つぐね）の心

・・・皆さんは、『正義の味方』というのを信じますか？
私は目指した。子供の頃から今もずっと追い続けている。
何度も何度も挫折した。心が折れたこともあった。

それでも、目指し続けた。

私のお父さんとの約束、弟との約束。そして、自分に仕えてくれた
人との約束。

この約束を裏切らないために、私は走り続けました。

子供が見る大好きな『正義の味方』。皆にバカにされることもあつ
たけど、

それでも、いっぱいの人に笑顔になってほしくて。幸せに過ごして
ほしくて。

ただ、昔の私みたいなことにはなってほしくなくて。

感情を、痛みを、幸せも全て無くした私みたいになってほしくなく
て。

弟も『正義の味方』になろうと努力していた。

なら、姉がもつと折れてはいけなと思うた。努力している弟の前
で、絶望しているところを見せたくなかったから。

さあ、はじめよう。『正義の味方』の物語を

第一話『異動』（前書き）

この小説は、Fateとリリカルなのはクロスにオリキャラが出てきます。あとボクはリリカルなのはを詳しく知りません。お嫌いな方は戻るを押ししてください。

読んでくださる方。本当にありがとうございます。一生懸命がんばりますのでよろしく願いします！

第一話『異動』

「実はツグネ。君に機動六課に行つて欲しいんだ」
「・・・は？」

ここはある次元航行部隊提督の一室。その部屋の主である私の親友であり上司であるクロノ・ハラウンに呼ばれ、現在にいたる理由を問うと

「だから、昔馴染みの友達が作り上げた部隊だから心配で・・・」
と言うが、長い付き合いだから私には本当の理由が分かっている！

「嘘つけ。本当は自分の妹が心配なだけだろう。このシスコン！」
「なっ！くう！否定、できない・・・！」

私の言葉のボディブローが見事に決まった。
悔しそうに唸るクロノ。それを見ていたエイミーがフォローに入つた。
うっん、いい嫁だ。

「ツグネ、そう言わないで行つてあげて。クロノも貴女だから任せ
るのよ？」

「だって、『陸』に行ったら三人で食べにいけないじゃないか」
「あ、それは嫌かも・・・」

エイミーが折れ始める。まあ、いいんだけどね。

「ま、クロノの頼みだしね。行くよ。で、いつ行けばいいの？」

「あ、ありがとう！・・・で、実は明日なんだ」

・・・は？このシスコン、今なんて言いやがりましたか？明日？

「この計画なし！妹がかかると一瞬で思考回路がショートしやがって！」

スリーパーホールド決めてやろうかこの野郎！

「う、ごめん・・・」

「まあいつでも出来るようにはしてあるけどさ。気をつけなよ？私じゃなかったら『無理』って断られてたかもしれないし」

「気をつけます・・・。というより、何で準備完了してるんだ？」

今頃突っ込んでくるクロノ。・・・理由は、ねえ？

「私の知り合いがね、『トランクーつで旅行できるようにはしときなさいよ』って言ってたからかなあ」

「・・・どんな知り合いだよ（なんですか）・・・」

まあそういう反応するよね、普通。

「じゃ、エイミィ、転送準備よろしく。あ、クロノ」

「なんだい？ツグネ？」

「定期的に通信させてよね。これでも寂しがりや何だよ？私」

親友と別れて寂しくならないほど、私はON・OFFが備わっていない。

「自分で言うか？普通。・・・ま、僕とエイミィも寂しくなるし。」

「良いよ」

「さっすがクロノ！・・・じゃ、行ってくるよ」

「ああ。・・・体につけるよ」

「そっちこそ。仕事のし過ぎで倒れんじゃねえぞ」

二人で皮肉を言い合って、別れを告げる。

「ツグネ。転送準備完了したよー！」

エイミイからお声がかかった。

・・・さって、行きますかね。

「おう！・・・じゃな、クロノ」

「ああ。頑張ってきてくれ」

そして、私は機動六課に異動になった。

第二話 『機動六課と思いきや転送ミス！？エイミィ〜(泣)』

はい。衛宮 嗣音です。

ただいまミッドチルダに転送されました。だけど・・・

「転送場所・・・間違えてるよ、エイミィ〜・・・」

そう。私がいるのは機動六課の玄関前ではなく、海の上にでっかいプレートが浮かんでるところに来た。

エイミィ〜・・・ここどこだよ〜・・・こんな何も無いところだと泣いちゃうぞ(ブオン)・・・

「へ？」

なんか機動音がしたと思ったら、途端に巨大なビル郡が姿を現した。つて、なぜだ！！

「もうわけわかんない〜！クローノ！エイミィー！助けてー！ー！ー！ー！」

叫んだ。そりゃあ叫びますよ。こんなわけ分らないところに転送させられて？、いきなりビル郡が現れたんですもん！

心の中で言い訳？愚痴？をしつつ、状況把握に取り組んでいると、私の目の前をピーナッツのような形のものが通り過ぎていった。

「あ？今の・・・あいつの所のガジェットじゃねえか。・・・ま、仕事だしな。やるか」

悪いけど、この恨みはこいつらで晴らすとするぜ！謝ったりしない

からな！

「スリープモード解除。デバイス『フェイルノート』起動」

私の右腕についていた白い腕輪が光り始める。

『了解しました、マスター。・・・起動完全完了』

腕輪がしゃべる。これが私のデバイスであり、相棒の『フェイルノート』。私は『フェイル』って呼んでるけど。

「フェイル、セットアップ」

『了解。セットアップ』

腕輪から光が溢れ、私を一瞬だけ包み込み、バリアジャケットを展開する。

黒い革のような鎧の上に赤い外套羽織る。

「さて、じゃあ肩慣らしにでも行きますか」

『油断大敵ですよ。マスター』

そして、私達はビル郡の中へと駆けていった。

第二話 『機動六課と思いきや転送ミス！？エイミー』（泣） 『（後書き）

ぐだぐだですね・・・

嗣音のバリアジャケットは、アーチャーのと同じ服装です。この理由もありますよ。それはどこかですが。

次からFATEの武器が登場してきます。

第三話 『訓練介入そして再開・・・あれ？私出番少くない？』

転送されたちよつと後。ツグネが機動六課の人と待ち合わせをした場所では、こんなことが起きていた。

なのは side

今日、クロノ君の推薦で異動してくる人がいると聞いて私とフェイトちゃんとはやてちゃんの三人で玄関の前で待っていた。来る、はずなんだけど・・・

「おかしいなあ、時間はとっくに過ぎてんねんけどなあ・・・」

「何かあったのかな・・・」

二人が心配そうに言う。クロノ君のことだから、ミスは無いと思うんだけど・・・

「なのは。先に新人達の訓練始めて。私達は兄さんに確認とつてくるから」

「うん。分かった。よろしくね、二人とも」

大丈夫かな・・・『エミヤ ツグネ』さん・・・

それから訓練を開始した海上のビル郡では・・・

ティアナside

私・スバル・エリオ・キャロで、ガジェットドローンを倒すために作戦を練っていた。

しかし、なのはさんからの通信がはいる。

《皆、気をつけて！誰かがその訓練場にいるから！》

その言葉と同時に爆発が起きた。

爆発したのは私達がいるビルの真下。そこには破壊されたガジェットドローンがあった。

「え・・・？何・・・これ・・・」

私は言葉を失った。

そして、恐怖した。

私達が苦労している敵をこんなあっさり倒した敵が・・・この訓練場にいるのがとても怖かった。

「ティア、とりあえず四人で固まって動こうよ・・・！」

「そ、そうね」

スバルの言葉にエリオとキャロも頷く。

《皆、聞こえる！？》

「な、なのはさん・・・！」

《良かった！今私も向かってるから！がんばって！！》

「！！！！はい！！！！」

なのはさんからの通信で、少し恐怖が消えた。

だけど、それも束の間。

ドゴオオオオ！ 離れたところで大きな爆発が起きた。

そして、私達の前に何か突き刺さった。

「これ・・・剣・・・？」

そこには、剣と言いつい難いほどに、刀身が『捻れていた』。

いづなれば螺旋剣。だが、私達はこの剣からあふれ出る魔力の量に驚き、怖かった。

魔力量で言えばAぐらい。そんな量を剣に込めれるということが私達の常識を覆したからだ。

ただ、この魔力には「守る」という意思が込められているように感じた。

「一体・・・誰が・・・？」

私は、それを知る由も無い。

嗣音 s i d e

「我が骨子は捻れ狂う・・・『カラド・ボルグ』！」

私の弓から放たれた螺旋の矢がガジェットに突き刺さり爆発する。
これで五体目。

「八体もいるとか・・・大丈夫かな。あの四人」

『生存反応あり。大丈夫ですよ、マスター』

よし。さっさと終わらせて迎えに行かないとね・・・！

『マスター。前方に二体、後方に一体ガジェットがいます』

「分かった。投影トレス開始オン」

イメージする武器は二つ。一つはヴァジュラと呼ばれる雷の槌。もう一つはフルンディングと呼ばれる剣。

どちらも狙った相手に必ず当たるとされる宝具。それを己の中から引き出してくる。

『工程完全終了。発射可能です。』

「よし。フルンディングは前方に、ヴァジュラは後方に発射」

『了解・・・発射します！』

そして、二つの武器が残りのガジェット全てを破壊した。

「よし。これで『マスター！魔力反応ー！前方からものすごいスピードで接近中！』タッチ！！こんなときに！」

そして、ピンク色の魔力光を放ち、白いバリアジャケットを着た女性^性があらわれた。

「貴女は誰？」

「おいおい、これはないんじゃない……？なんでここに高町なのは

「がいるんですか？」

「貴女は誰って聞いているの」

「私は衛宮 嗣音。わけあってここに転送されてきてガジェットドローンがこの場にいたので被害が大きくなる前に破壊していました。」

そういうと、高町さんは鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしていた。まあそうだよな〜・・・エイミー・・・うらむよ・・・！

「え、なな、なんで衛宮さんが・・・！と、とにかくフェイトちゃんに・・・」「おい、なのはー！」「フェイトちゃん！？」

「あ、ツグネさん。なのはと一緒にだったんですね！良かったです」

綺麗な金髪をしたクロノの妹、フェイトちゃんが飛んできた。

「助かったー！ー！ー！このままここで死ぬんじゃないかって思ってたよー！ー！ー！」

「良かったあ。さ、行きましよう？なのはも行くよ！」

「あ、ちよつと待って！皆ー！こつちだよー！ー！」

高町さんが呼ぶと、四人の子供が現れた。

「なのはさん！フェイトさん！と・・・どちら様ですか・・・？」

オレンジ髪をツインテールにした女の子が質問してくる。

「機動六課に異動になりました衛宮 嗣音といます」

「貴女がツグネさん！私はティアナ・ランスターといます！」

おお、丁寧に挨拶できる娘だなあ・・・

あれ・・・？あの隣にいる鉢巻の娘は・・・

「スバルちゃん？」

「は、はいっ！って・・・え？」

「やっぱりそうか！久しぶりだね！元気にしてた？」

スバルちゃんが驚いてる。まあ、おぼえてないかな？

「ほら、アメちゃんあげるから元気だしな」

「！！！」

スバルside

この人、あの火災の時に私を助けてくれた人に似てる気がする・・・
そんなとき、ツグネさんのこの言葉と、火災で助けてくれた人の言
葉がかさなった。

「『ほら、アメちゃんあげるから元気だしな。』」

「あ、あのときの・・・！正義の味方・・・さん？」

私は、あのときの憧れの人に再び出会った。

第三話 『訓練介入そして再開・・・あれ？私出番少くない？』 (後書き)

展開速すぎて自分でもついていけない気がする・・・！
なんてダメダメなんだ・・・

がんばりますのでよろしくお願いします！

第四話『正義の味方』（前書き）

今回はスバルと嗣音の出会いから

第四話 『正義の味方』

スバルと初めて出会った時のことを思い出す。

そう、あの時は冬木市で起きた大火災のように、空港が燃えているときだった。

燃え広がる空港。私はそんな中にいた。

クロノから、『陸』と呼ばれる部署を見て来いと言われ、ミッドチルダに来ていた。

「恨むぜ、クロノ・・・！全く、私はこういう鎮火系統の術式を組み込んでいないつつうのに・・・フェイル。この中にまだ生存者はいるか？」

『お待ちください・・・いました。右前方300メートルの位置に一つ生存反応が』

「了解。セットアップ」

『セットアップ』

バリアジャケットを展開する。いつもの赤い外套を羽織り、生きている人の所へ駆けていった。

魔力を持った一撃が、私を救った。
光が飛んできた方を見ると・・・炎のように赤い外套を羽織った、
炎の光で煌く、白い髪的女性が立っていた。

「・・・大丈夫か？」

「あの・・・貴女は・・・？」

「ん？ああ、『正義の味方』だ」

冗談のように、彼女は言った。

しかし、今の私には本当の正義の味方に見えた。

「ありがとうございます・・・！正義の味方さん・・・」

私はこのとき、この『正義の味方』に憧れた。
だけど、あまり詳しく覚えていなかった。

ただ、私を元氣付けるために言ってくれた言葉だけは覚えていた。

「もう少しで応援が来る。残念だけど、私は貴女をここから出す力が残ってないの・・・」

「・・・大丈夫です！結界も張ってもらったし、耐えて見せます！・・・」

正直に言うと不安だった。取り残される不安。

そんな時、正義の味方は私の手の平に手を重ね、

「『ほら、アメちゃんあげるから元気だしな』」

元気が出る・・・おまじないのような言葉を言った。

そして、その後助けに来てくれた『高町なのは』という管理局の人にも憧れ、管理局に入った。

正義の味方さんも、ここにいと信じて。

第四話『正義の味方』（後書き）

スバルとの出会い編終了・・・！

第五話 『今度こそ本当の機動六課!』

スバルちゃんが私を思い出して・・・なぜか涙目だった。

「ええ!? ちょよ、ちょっと待ちなさい! 何で泣くの! ほら、もう一個あげるから!」

「いえ、嬉しくてつい・・・ツグネさん・・・!!」

そういつて抱きついてくるスバルちゃん。

あのときより大きくなった為、抱きついてくる威力が大きかった。

「よく頑張ったね。えらいぞー!」

抱きついてきたスバルちゃんの頭をなでる。

「えへへへ／＼／＼」

・・・おっと、和んでる場合じゃない。

「スバルちゃん、今から挨拶に行くから後でね」

「あ、はい。また後で!」

スバルちゃんと別れ、高町さんとフェイトのところに向かった。

なのは s i d e

「お待たせしました。行きましょうか」

ツグネさんが私達の所まで着た。

「はい。シャーリー！訓練よろしくねー！」

「はーい！」

これでひとまず新人の訓練は出来るね。

「じゃ、行きましょうか」

「ツグネさん、お疲れ様です」

私とフェイトちゃんが先に歩く。

それに続いてツグネさんも歩き始める。

「お兄ちゃん元気でしたか？」

フェイトちゃんがツグネさんに質問する。

「ああ。元気元気。もう思考回路がショートするぐらい元気だよ、あんにゃろっ」

なぜかうんざりしたように言うツグネさん。

「・・・兄がご迷惑をかけてすみません」

「え！？それで分かっちゃうの！？フェイトちゃん！」

何だろう、二人から何かが滲み出てる気がする。

「にしても広いな・・・おお、庭園まである」

「局員のリラクゼーションにも向いてますから。こつこつ綺麗な草木などは」

ここは確かに落ち着くね。自然が身近にあるし。

いくらか歩いたところでツグネさんが口を開く。

「・・・ホントに広いね。ここ」

「にはは・・・後でマップ渡します」

「ありがとうございます・・・」

「ここです」

「・・・」

「ごうしました・・・ああ、なるほど・・・」

隊長室と書かれたプレートがついている扉から、なにかどす黒いものがあふれ出てるようだった。

「はやてちゃん！つれてきたよー！」

『ほんまか！！助かったわなのはちゃん！』

あ、オーラが消えた。

『どうぞ入ってください』

「あ、はい。失礼します」

嗣音 side

中に入ると、クロノの部屋より広かった。

「はじめまして。私がこの機動六課の部隊長、八神はやてです」

「はじめまして。次元航空部隊から異動になりました衛宮 嗣音です」

挨拶を済ませる。すると彼女は急に真剣な顔つきに変わった。

「回りくどいのは嫌いだから、単刀直入に聞かせてもらいます。貴女はスパイですか？」

は？クロノから聞いて・・・ああ、そういうことが仕方ない。悪乗りしてやろう

「そうだ」

「「なっ！！」」

フェイトとなのはが驚きの声を上げる。

「ばらしちゃったらスパイ活動できへんで？」
「それがどうした。ここにいる時点で私はもう勝っている。新人四人を見た。戦い方はわかっている。
加えてお前ら三人は聞かなくても有名な。後は守護騎士程度だが、アレぐらいならどうと言うことはない」
「・・・ほお、たいした自信やね」
「自信じゃない。確信だ」

緊張が走る。なのはとフェイトはいつでも戦闘が出来るようにデバイスを立ち上げていた。
遅い。遅すぎる。
無防備な背中から首に沿うように、白と黒の夫婦剣『干将・莫耶』
を当てた。

「・・・対応が遅いよ。お前等」
「い、いつのまに・・・！」

なのはが震える。・・・本当にだめだな、こいつら。

「剣を降ろしてもらおうか」
「あ？」

後ろから、機械で作られたような剣が私の首筋にあてがわれる。

「剣を降ろせ。さもなくば・・・」
「はあ、お前達は本当に駄目な奴等だ」
「・・・貴様、立場が分かっているのか？」
「お前こそ、分かっているのか？自分の将がどういう状況かを」
「何を言って・・・！！」

そう。私は背後をとられた瞬間に、部隊長の背中に10本ほど剣を浮遊させていた。

部隊長だけでなく、今私の首に剣を沿わせている女性の背中にも。ピンクの髪の女性は、自分の置かれている状況を理解したようだった。

「分かったか？お前が剣を降ろさなかったら、ここにいる全員を殺す」

「くっ……！分かった……！」

剣を降ろした。

……話しやすくなったな。

「部隊長。理解したか？私がスパイなら、今頃剣で切り殺しているぞ」

「……はあ、あんなところで乗ってくるとかホント悪い人やね」

皆が驚く。そりゃそうだ。テロリストに近いものが部隊長と親しげに話しているのだ。驚かないわけがない。

「クロノにどうせ言われたんでしょ？ 『あいつを試してやってくれ』
って」

「そりゃねん。『陸』の厳しさが分かるって言われてんけど、ここ
までやとは思ってなかったわ」

「私はこうするってだけ。準備も覚悟も足りずに乗り込むバカは命
を落とす」

「心に刻んでおきます。お疲れさんでした。そして、ようこそ！機
動六課に！」

こうして、機動六課での日々が始まった。

「「「待つて！／待ちなさい！／待つてください！」「」」

話しについていけてなかった三人が

「「ん？何？」「」

「『ん？何？』じゃなくて！はやてちゃん！どういうことなの！？」

「そうです我が主！こやつはスパイでは！？」

「ああ、あらへんよ。全然」

『あつさり！？』

「だってなあ、クロノ君からの推薦やねんで？スパイなわけないや
ん」

「どうしてそんなことがいえるんですか！」

「フェイトちゃん」

八神隊長がフェイトの名前を出す。

「……あんなるほど」

いつせいに理解しましたよこの人たち！
当事者のフェイトちゃんは？マークを浮かべてるけど
ここでもあいつのシスコンは有名だな！

「ま、うちも乗ってたし。ノリで
」「乗らないでほしいの！／乗らないでください！」「」

始まったったら始まったんだい！

第五話 『今度こそ本当の機動六課!』 (後書き)

シリアスかと思いきやいきなりギャグ路線に・・・!

どこかで本当にシリアスにするかもしれせん。

クロノアウエーですね。シスコンパワー全開でしたWWW

第六話『ファーストアライト』

さて、私が機動六課に異動になってから何日かが過ぎた。

特筆すべきことはとくにない。はやて隊長がセクハラをしてくる以外はデスクワーク。

時には新人の訓練を手伝うぐらいだ。

訓練のとき、なのはさんの教導を見て思ったことがある。

なぜ『基本』しか教えないのだろう、と。体術は専門外だとしても、魔力障壁から砲術は教えてやれるのにと思った。

・・・まあ、あの人の教導だし。フォワードから不満があれば、私の訓練時に応用を叩き込もうと考えている。

エリオは槍術。スバルは格闘術。ティアナは射撃術。キャロは召喚術かな。

楽しみだ・・・

そういえば、『魔術教会』から来てみないかとお誘いをいただいたが、場所が『地球』だったのでやめた。

・・・もしかすると、知り合いに出会ってしまいそうだったから。

「・・・それでも、会いたくなるのはどうしようもないなあ・・・」

思い出す皆の顔。弟、後輩、同級生・・・そして・・・

「・・・！駄目だ駄目だ！こっちに集中しないと・・・！」

頭をぶんぶんと振って邪念を追い払う。

甘えを捨てる。そうしなければ、私は・・・

「ツグネさーん！シャワー浴びに行きませんか？」

スバルが私の部屋の前で声をかけてくれる。

「うん。今行くよ！」

扉を開けて、スバルたちと並ぶ。

「・・・ツグネさん、もしかして疲れてませんか？」

「えっ？そ、そうかな？」

「ええっと、少し暗かったので心配になって・・・」

ティアナが私を気遣う。それに続いて、残りの三人が私を心配そうな目で見つめていた。

「・・・しまったなあ、後輩を支えないといけないのに。」

「大丈夫よ。ちょっと昔を思い出して、おセンチになってただけだから」

「そう、ですか？何かあったらいつてくださいな？私達のほうが多いでしょうが・・・」

「それを聞いてアドバイスするのが先輩だよ？ティアナ。皆もね」

「・・・ありがとうございます！」「」「」

本当に、いい子達だ。

シャワールームでは、スバルとティアナが私の腰やら足やらを触ってきた。

キヤロは、私に頭を洗ってほしいと懇願してきた。

・・・妹が出来た気分だ。

その後、私はまた自室に入り、デスクワークをこなしているとアラートが鳴った。

これは・・・第一級警戒態勢!?

《あ、ツグネさん！今レリックが山岳地帯で発見されたんやけど、ガジェットの数が多すぎるねん。なのはちゃん、フェイトちゃんとフォワード達で行ってくれへんか？》

「了解。出ます」

《ありがとう！上のへりに乗って出て！》

そうして、機動六課の初任務が開始された。

第七話『ファーストアラート2』（前書き）

「博士」

「なんだね？ウーノ」

研究室のような部屋に、金色の目をした白衣の男とウーノと呼ばれた女性がいた。

「衛宮 嗣音が機動六課に異動になったようです」

『エミヤ ツグネ』という名前が白衣の男を驚かせた。

「なんと！・・・さて、計画に彼女を含む気はなかったのだが・・・これも運命かな？」

「・・・彼女は私達の敵・・・になってしまおうのでしょうか・・・？」

悲しそうに告げるウーノ。

「大丈夫だよ。ツグネと私は約束をしている。・・・今回は彼女に頼るしかないが・・・それが悔しいねえ・・・」

「博士・・・」

二人が悔しそうに呟く。

「・・・頼むよ『正義の味方』、僕の友よ・・・。僕の娘達を、世界から守ってくれ・・・」

博士と呼ばれた男、ジェイル・スカリエッティは祈るように、ツグ

ネに助けを求めた。

第七話 『ファーストアライト2』

さて、ヘリに乗り込んで高町さんから作戦の説明をされた。私は『ヘリからガジェットを殲滅』だそうだ。

「これで皆いいかな？」

『はい！』

フォワード陣はこれが初めての作戦だ。皆の顔を確認する。

キャラが震えていた。いや、キャラだけじゃない。多分皆不安なんだろう。

「おねえ・・・ちゃん・・・」

キャラが震える声で話しかけてきた。

「どうしたの？」

「私・・・自分の力が・・・怖いんです・・・！誰かを・・・傷つけてしまうのが・・・怖くて・・・！」

・・・なるほど。キャラは過去にそういうことがあったのか・・・

「大丈夫だよ、キャラ」

「・・・え？」

「キャラが使うのは守る力だ」

「守る・・・力」

キャラが自分の手を見つめる。

「そう。大切な人や、居場所を守る力」

「・・・！」

「傷つけるんじゃない。守るための力なんだ」

「おねえちゃんも・・・そうなの？」

「うん。私は、皆の笑顔を守るために力を使う」

キャラはそれを聞くと、笑った。

「お姉ちゃんはやっぱり、『正義の味方』なんだね」

嬉しそうに、そう言った。

そして、皆が出発した。

「さて、ヴァイス君。安全運転よろしく！」

「了解しました！ツグネさん。よろしくお願いします！」

「おっけー！フェイル、セットアップ」

『了解。セットアップ』

いつものバリアジャケットに服が変わる。

「ツグネさん！ガジェット数前方に200！」

「嘘……多すぎ」

まあ、大丈夫なんだけどね

「ヴァイス君。スピード緩めて。で、ハッチをガジェットの方向に向けて」

「は、はい！」

ハッチから外を見ると、ガジェットの軍勢が見えた。

「よくもまあこんなに作りやがって……。ちよつと本気で行くかな。フェイル、真名解放」

『了解。無駄なしの弓展開』

フェイルの形が変わる。黒い洋弓が嗣音の手に握られていた。そして、私の目の色も黒から燃えるような紅色に変化した。

「トレース
投影 開始」

今回イメージするのは3つ。

『宝具 『ナインライプス射殺す百頭』 『カラドボルグ偽・螺旋剣』 『エクスカリバー約束された勝利の剣』 展開開始。……初弾 『ナインライプス射殺す百頭』 いけます。』

「オツケー。フェイル、開放！」

フェイルノートに九つの矢を番え、放つ！

「『ナインライプス射殺す百頭！』」

放たれた九つの矢は、一本一本がなのはのディバインバスターのよ

うなレーザー状になり、生きているかのようにガジェットを破壊し始めた。

「すげえ……」

『150体のガジェットを破壊。次弾装填。完了』
「開放」

捻れた剣を矢のように番え、放った。

「『偽・螺旋剣！』』」
カラドボルグ

捻れた剣は、ガジェットに当たっても威力が落ちることなく貫通し、ガジェット達の中心に来たところである呪文を唱えた。

『ブローケンファンタズム』
「壊れた幻想」

瞬間、巨大な爆発が起こる。

「これで大方かたづいたかな？」

『……マスター！前方にガジェットドローン？号機が10体！』
「なんですと！……念のためっていいことなんだなあ」

3つ目作つといてと良かったあ……！

『次弾、装填完了しています』

「OK。一発で粉碎してやる！」

作り出されるは黄金の輝きを持つ剣。かのアーサー王が使っていたとされる星々の聖剣。

それを矢に番えると、光が溢れだした。

「開放。」「^{エクスカリバー}約束された勝利の剣！……！！」

放ったそれは、弓から放たれた瞬間に、全てを無に帰す黄金の光と
なって、全てのガジェットを粉碎した。

ふう、終わった『マスター！ミサイル反応2！こちらに高速で迫っ
てきます！』

「なんだと！？……間に合え……！」

・・・I am the bone of my sword(体は
剣で出来ている)・・・

なのはside

「すごい・・・」

私はこの言葉しか頭に思いつかなかった。

ツグネさんが200体ものガジェットをたった2発で粉碎し、最新型のガジェットも綺麗な黄金の光で破壊した。

『マスター。へりに高速で迫る物体が2つ。距離300』
「なっ！アッって・・・ミサイル!？」

質量兵器がへりに迫る。こっちも魔法を展開するが

「間に・・・合わない・・・！」

そして、ミサイルが着弾し、爆発した。

「そんな・・・！ツグネ・・・さん・・・！ヴァイス君！！」

『マスター、生存反応あり。へりも無事です』

「え？」

レイジングハートがへりのほうを示してくれた。

爆発の煙が少しずつ晴れていく。

そこには、ピンク色の光を放つ七つの花弁がへりを守っていた。

第七話『ファーストアラート2』（後書き）

ロサです！

今回は宝具がたくさん出たのでその紹介です！
前回のもまとめて行きますよ！

射殺す百頭

ナインライフズ

ランク：？

種別：敵にあわせ変化

レンジ：？

最大補足：？

ヘラクレスの持つ万能攻撃宝具。生前の偉業「ヒュドラ殺し」で使った弓を元に、彼の持つ武技を流派の域にまで昇華させたもの。状況・対象に応じて様々な攻撃方法に変化する上、様々な武器で使用可能。

偽・螺旋剣？（カラドボルグIEI）

ランク：不明

種別：不明

レンジ：

最大補足：

アルスター伝説の名剣カラドボルグ

名前通り、螺旋を描く刀身を持つ剣。「偽」や「IEI」が示す通り、本来のカラドボルグとは異なり、アーチャーのアレンジが施されている。

矢として放つ場面も、手に持って使う場面も両方あり、どちらとしても使える武器。

約束された勝利の剣

エクスカリバー

ランク：A++

種別：対城宝具

レンジ：1～99

最大補足：1000人

由来：アーサー王の聖剣エクスカリバー

アーサー王が生前一時的に精霊から授かった聖剣。人ではなく星に鍛えられた神造兵装であり、人々の「こうあつて欲しい」という願いが地上に蓄えられ、星の内部で結晶・精製された「最強の幻想」ラスト・ファンタズム。あまりに有名であるため、普段セイバーは「風王結界」で覆って隠している。

神霊レベルの魔術行使を可能とし、所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、光の断層による“究極の斬撃”として放つ。攻撃判定があるのは光の斬撃の先端のみだが、その莫大な魔力の斬撃が通り過ぎた後には膨大な熱が発生するため、結果的に光の帯のように見える。

聖剣というカテゴリーの中で頂点に位置し、「空想の身でありながら最強」とも称される。

こんなものですかね？

第八話『ファーストアライト3』（前書き）

彼女は言う。

「守りたいものがある」と

彼は言う。

「守りたいものがある」と

二人は願う

「『正義の味方』になって人々の笑顔を守ってみせる」と

科学者は言う

「娘達を守りたいと」

二人は言う

「『親友を守りたい』と

命は絆を結び、居場所を作る。

しかし、一人の願いはかなえられなかった。

その代わりに、彼女は手に入れた。

『星々の力』を。

『全ての人の願い』を。

その人の身には収まりきらない苦痛を。

たった一人の器に収める。

彼女は常に独り。星々の丘で、世界のために祈り続ける。

魔法少女リリカルなのは 剣の祈り

すべてがここからはじまります。

第八話 『ファーストアラート3』

防いだ。私の今持つ最高の盾『熾天覆う七つの円環』ロ・ファイアスで。だが、構成が甘かったために花弁のうち4枚が破壊され、私の右腕にミサイルの破片が突き刺さり使えなくなった。

「ツグネさん！それ・・・！」

ヴァイス君が私の右腕を見て泣きそうな声で言う。

「だ、大丈夫・・・！フェイル、いける？」

『はい！今すぐ回復させます！』

黄金の魔力光が私の右腕を包む。・・・けっこう深く入ったか。

「フェイル、もう質量兵器は来てない？」

『・・・はい。確認されていません』

「そう・・・」

ひとまず安心する。

《ツグネさん！無事ですか！？》

なのはちゃんから念話が入る。

《なんとか。へりも無事だよ》

《そうですね・・・。良かったです・・・！》

《そっちは？》

《はい。レリックも回収しました！今からへりに帰還します！》

《了解》

念話を切る。

・・・回復に時間がかかるかなあ・・・？

「ツグネさん・・・大丈夫なんですか・・・？」

「うん。帰るまでには治ると思う」

『治してみせます』

フェイルが気合を入れた。

「そういえば、ツグネさんのデバイスってアームドデバイスなんですか？」

ヴァリス君が皆が帰ってくる間、私の気を紛らわそうと話題を作ってくれた。

「うん。こっちの方が使いやすくて」

「でも、魔力どれくらいあるんですか？はやて隊長はSSですし、なのは隊長とフェイト隊長でも空戦S+。管理局のEースですからね・・・」

「あ、私10年ほど試験受けてないや。今もってるのは・・・SSかな？」

『はい、マスター。今ならばSSSは確実に受かるかと』
「・・・えーーーーー!!!」

ヴァイス君が私とフェイルの言葉に驚いて声を上げる。

「そ、そ、そんな人がクロノ提督のところからこっちに来るわけ・・・あ、フェイト隊長ですね」

「うん、まあ……」

シスコン伝説はもう止まる勢いを見せない。大丈夫か？あいつ。

「ただいま戻り……！つ、ツグネさん！その右腕……！」

あ、なのはちゃんが戻ってきた。

「あ、これ？ミサイルの破片が突き刺さっちゃって……」

「そんな……！すいません！私が周りをもっと確認しなければいけなかったのに……！」

「い、いやいやいや！戦場で気を抜いた私が悪いんだから！気にしない！」

「で、でも……！」

「それに、帰るまでには治るから。安心なさい」

「……はい」

それから、帰ってきたほかのメンバーに滅茶苦茶心配され、心身ともに疲れきってしまったのは言うまでもない。

でも、クロノのところみたいで安心した。優しい人ばかりだなあ……

《（ザザッ）……けて……！》

「？（なんだ？今の……）」

《おね……い、た……けて……！》

「……まさか……！」

《おねがい、たすけて……！》

「ツグネさん？」

なのはちゃんたちが私を見ている。

「ただ、そんなことを考えている場合じゃない……！」

「フェイル！今の聞こえたか！？」

『はい、マスター！場所は北西2000メートル』

「ヴァイス君！ハッチを開けてくれ！」

「ど、どうしたんですか！？一体！？」

「私宛に救援信号が届いた。今すぐに向かう！」

「待ってください！その怪我で行かせるわけにはいきません！」

「フェイトちゃんが私を引き止める。……時間がないんだ！」

「……仕方ない、強硬手段だ……！フェイル！」

『了解！時空転送開始します！』

「「なっ！」」

「フェイルに組み込んだ一つのアビリティ、簡単に言うとワープだ。」

「すみません！すぐに戻ります！」

「そして、私はSOSが出たところに向かった。」

「これが運命の歯車を加速させていると知らずに……」

第八話『ファーストアライト3』（後書き）

熾天覆う七つの円環^{ロー・アイアス}

ランク：不明（B+の投擲武器をほぼ防ぐ）

種別：不明

レンジ：

最大補足：

ギリシヤの英雄アイアスの盾。

アーチャーが唯一得意とする防御用装備。投擲武器や、使い手から離れた武器に対して無敵という概念を持った概念武装。

光で出来た七枚の花弁が展開、一枚一枚が城壁と同等の防御力を持つ。投擲武器に対しては非常に頑強である一方、通常武器に対しての防御力は示されていない（七枚中四枚しか無かった場合、真名解放した「約束された勝利の剣」を短時間防ぐ）。

第九話『悪夢』（前書き）

男は恨んだ。

「なんで俺がこんな目に遭うんだ」と

村人は祈った

「一人が犠牲になればこの村が救われると」

男は奪われた。

片目を。指の全てを。しゃべる必要のない舌を。

そして、命を。

「こんな世界・・・殺してやる・・・！」

第九話『悪夢』

SOSコールが出た場所に到着した。
そこは一つの村だった。
・・・だけど

「誰も・・・いない・・・？」

そう。この村には人が誰もいなかった。

『いえ、家の中に生命反応が多数あります』
「そう。・・・！」

突如、背中に悪寒が走った。

悪意の塊をぶつけられたような感覚。明確な殺意の塊。
それには慣れている。だが、これは大勢の殺意と恨みのような負の感情だった。

そして、私はこれを知っている。

『マスター！後ろです！！』
「！！！」

フェイルが叫んだ。思わず前に転がり、さっきまでいたところを見ると、巨大な斧剣をもった巨大な男がいた。
この威圧感、そして、真っ黒になった体。
・・・私は、こいつを知っている。

「バーサー・・・カー・・・？」

「トレース
投影 開始!!!」

今度は、かつて湖の騎士が使っていたたったの一度も刃こぼれをしなかった剣を投影する。

「アロンダイト
無毀なる湖光」!!!」

「-----!!!」

同じように斧剣が振り下ろされた。だが、今度は砕けずに防いだ。

「-----!!!」

距離をとるバーサーカー。だが、逃がしはしない!!

「フェイル！開放!!!弾丸は九つ！それを一撃に集中させる！」

「はい!!!」

「トレース
投影 開始・・・
トリガー
装填・・・」

「アロンダイト
無毀なる湖光」を消し、取り出したのは、バーサーカーが持っている巨大な斧剣と全く一緒の斧剣。

「セッ
ト
・・・
全工程完了」

私とフェイルの声が重なる。

バーサーカーが私に音速に達するような勢いで斧剣を振り下ろす。
・・・だが、今はそれすらも些細な問題。音速の攻撃なら・・・
『神速』をもって凌駕するまで。

「『是、
ナインライフズ・ブレイドワークス
射殺す百頭』」

・・・瞬間、九つの斬撃がバーサーカーの体に放たれた。大量の鮮血が、雨のように私を濡らす。斧剣は、たった一回の宝具の発動で碎け散り、私の右腕に激痛が走った。

「・・・・・・・・！！」

『マスター！今すぐ回復します！』

右腕の筋肉、筋が完全に断ち切れた。右腕が垂れ下がる。

体を九つに切られたバーサーカーは、息絶えるはずだった。そう、『だった』

「・・・・・・・・！！」

「う・・・そ・・・！！」

体を九回切り裂かれたバーサーカーは、生きていた。少しずつ、私に詰め寄ってくる。

「くそっ・・・・・・・・！！……………ごめん、皆……………！！」

「・・・すまない。嗣音」

「え・・・？バー・・・サー・・・カー・・・？」
『正気に・・・戻ったのですか・・・？』

そこには、真っ黒のバーサーカーではなく、いつもの鋼を連想させる岩のような色をしたバーサーカーが立っていた。

「ああ。よく私を救ってくれた……。これで、冬木に帰れる」
「待って。どうして……。あんな風になったの？」
「……この世界に、『この世全ての悪』があった」
「『……！』」

『この世全ての悪』。それは私の故郷、冬木市に存在した悪意の塊で、その正体は、昔村で生贄にされた一人の少年だった。

『そんな……！』
「事実、私は見た。……嗣音、あの時は、本当にすまなかった……。私達がお前の行動の真意を知っていれば……」
「……大丈夫。士郎に、『お姉ちゃんは頑張ってる』って伝えて……。今は、嫌われてるだろうけど、ね」
「……心得た。嗣音、ついに私達の世界にまで来たことを、友人として、誇らしく思う」

サラサラと砂のような光の粒になって消えていくバーサーカー。

「……頑張るのだぞ。『正義の味方』。辛い時は、冬木に戻って来い」

「……そうするよ。ありがとう、バーサーカー」
『アンリマユのことは任せてください。解決して、貴方達のところ
に笑顔でマスターを向かわせてみせます』
「……そうか。頼んだ……」

そして、バーサーカーはこの世界から消滅した。

「……村人は、出てこないね」
『そうですね』

きつと、私を怖がっているのだろう。あの巨人と対等に戦っているように見えた私には。

「村の皆さん。私が、全てを解決してきますので、今までみたいに笑って過ごしててください」

そう告げて、私は村を去ろうとした瞬間、大きな声が聞こえてきた。

『頑張ってください！！正義の味方さん！！』

私は、皆に背中を向け、手を振ってその場を去った。

で、帰ってくると

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」
「」

部長となのはちゃん、フェイトちゃんにヴィータちゃん、シグナ
ムにめちやくちや怒られた。

・・・疲れました

第十話『休日。そう呼べるのかなあ・・・？』(前書き)

願う。祈る。

一人の白髪の女性は泣きながら、祈る。

黄金の丘で、星々を見上げ、懇願する。

「皆を・・・皆の笑顔を守れる力がほしい・・・！笑って、幸せに過ごせる時間を守るだけの力が・・・！」

彼女は願う。弟を、後輩を、友達を、仲間を守れる力がほしいと。

そのせいで、彼女は一生報われない。

第十話 『休日。そう呼べるのかなあ・・・?』

なのはside

最近、変な夢を見る。一人の女性のお話。願い、救われず、それでも全ての人々の幸せのために走り続ける人。悲しい悲しい白髪の女性のお話。

「・・・疲れてるのかなあ・・・」

忘れようとした。ただ、その夢で出てきた女性は、とてもツグネさんに似ているのが気になった。

嗣音side

「「「ツグネさん!!訓練お願いします!!」「」「」
「・・・へ?」

久々に蕎麦をチユルルと食べていた私に、フォワード四人からいつせいに訓練を頼まれた。

「えっと、どうしたの?」

「あの、・・・私、上達している気が・・・しなくて・・・」

ティアナがしょんぼりした顔で告げた。・・・もう来たか。

「他の皆も？」

「・・・はい・・・」

こいつは重症だ・・・。とりあえず、前に考えていたカリキュラムでもさせるか。

「わかった。皆、1020に訓練場に集まって。アップは済ませてね」

「・・・はい!!」「・・・」

さて、私も準備を始めるか・・・

10時20分

「よし。皆集まったね!今から、個別教導を開始します」

「・・・はい!!」「・・・」

整理している四人が元気のいい返事をする。

「よし。じゃあ、まずティアナ!私と打ち合いますよ」

「は、はい!!」

「残りの三人は、スバルとエリオが組み手。キャロは二人の拳と足を強化して、それを私が教導から戻ってくるまで持続させなさい」
「はい!!」

そして、私の本格的な教導が始まった。

森に移動。

「ではまず、ティアナ。魔力弾を作って、それを・・・残り2個にしないようにしながら射撃。多くて5個は置いておきなさい」
「はい!!」

ティアナが魔力弾を生成し始める。こっちもスタンバイするか。

「出来ました!」

彼女の周りに浮かぶ魔力弾の数は13個。まずまずかな。

「よし。じゃあ、私が矢を飛ばすからそれを打ち落としなさい」
「え?それだけ、ですか・・・?」
「ふふふ、甘く考えちゃだめだよ?貴女を中心に全角度から狙うから、それを全て叩き落しなさい」
「!・・・はい!!」

「じゃ、行きます。フェイル、まずは10本」
『了解』

紅色の矢が十本生成される。それを、全て放つ。

「！まずは右！」

矢が落とされていく。・・・あらら、だめだね。

「残念。ティアナ、魔力弾の数」

「あ！・・・しまった・・・！」

そう、矢を落とすのに夢中で魔力弾の数が最低ラインに達した。

「ね？難しいでしょ」

「はい・・・あの、ツグネさんは弓を使いますけどどうしてなんですか？」

「えっと、自分に最適な遠距離武器だったからかなあ。まあ、私は弓なら誰にも負けない自信があるし」

「へ〜・・・」

「ま、この教導はね、実は貴女のお兄さん。ティードにもしてたんだ」

「！！」

ティアナが驚く。そりゃそうだね。

「兄さんも・・・」

「アイツは、この訓練で執務官まで上り詰めた。アイツが殉職したって聞いて、お墓まで行くとあいつのこと馬鹿にした上司がいてさ」

「・・・知ってます。私もその場にいましたから」

「そう。で、そのバカを殴り飛ばしてやった！そしたら他の皆も一緒になって殴ったり蹴ったりしてさ。アイツ、皆に好かれてんだなって、居なくなっただけから実感した」

「はい！兄さんは、私の目標ですから！」

やっぱり、ティエダの妹だ。目が同じ力強さを持っている・・・ティエダ以上に育ててみせる、必ず。

「ランスターの弾は全てを貫く弾、それを目指しなさい。仲間を守り通せる弾丸を、作り上げなさい」

「・・・はい！」

それから、ティアナの射撃訓練は続き、なんと1時間で5個を残せるようになった。

ティアナは、やっぱりアイツの妹だ。理解力と状況把握能力が以上に高い。

そして、ティアナの教導は今回で終了した。

「で、次。スバルとキャロ！キャロはエリオのときも居てもらったよ」

「は、はい！」

「ティアナは・・・そうだね、全方位にすぐに照準を合わせれるように訓練しておいて。で、エリオは・・・魔力を足と手に集中させて、それを維持し続けること」

「はい！！！」

さて、スバルの場合は・・・

同じくティアナと練習していた森。

「さて、スバルは私と組み手をします。ただし、キャロ！」

「は、はい！」

「さっきのエリオとスバルの組み手で強化の感覚はだいぶつかめたはずだ。スバルを強化しなさい！」

「はい！」

スバルの拳と足が、光に包まれる。・・・よし。

「トレス強化 オン開始」

私も強化をする。

「さて、スバル。危なくなったらプロテクションを使いなさい。これは絶対です」

「は、はい！」

・・・一撃で決める気はないけど、本気で打ち込む。

「・・・いくよ」

「は・・・！！！！っっ！！！」

「は、はい・・・」

拳を、スバルの肩に打ち込んだ。だけど、うまく防がれたね・・・
ヴィータ曹長の教導のおかげかな？

「はい・・・！行きます！！！」

「・・・甘い。左の重心が乗り切れてない。・・・キャロ。ここでスバルを更に強化するんだ」

「は、はい・・・！」

スバルの左の拳の威力が上がる。・・・キャロ、上手いな・・・

「そう。スバルはこの感覚を忘れないように。キャロは私がスバルに指摘したところを強化。これをエリオオの時にもします」
「はい！」「」

そして、ティアナと同じように1時間打ち合った。

「ただいまー！」

「あ、おかえりなさい！」
「た、ただいま・・・」

スバルが疲れた声で言う。

「さ、エリオもこんな感じになるから」

「ええっ！？」

「いくよ」

「あー！・・・！」

「二人ともー！組み手してなさいねー！ティアナは格闘も鍛えなさい」

「はい！」「」

「ご愁傷様・・・」

二人の合掌が見えた気がした。

「さて、エリオ。自分の魔力を腕と足に集中させなさい」
「はい!!」

エリオの足元に魔方陣が展開され、魔力が足と腕を包む。

「さて、キャロ。ちょっとテストするね。エリオの魔力にムラがあるところを強化しなさい」

「は、はい……!!」

……キャロには脱帽だね。一発で当てるなんて。外すと思ってたのになあ……

「あ、動きやすくなった……」

「その感覚を忘れないように。じゃあ、デバイスを展開しなさい」

「はい! ストラダー!」

『了解』

エリオのデバイスが展開される。槍は……ある意味専門外なんだからだなあ……

「トレース 投影 オン 開始」

……とりあえず、ゲイボルグかな

紅い槍を投影する。その槍を見たエリオは

「うわあ……! かつこいいー!」

目をキラキラさせていた。

「エリオ、まずは私と切りあってもらいます」

「は、はい・・・！行きます！！」

そして、いきなり突いてくるエリオ。

・・・単調すぎる。必殺の一撃ならまだしも、まだ火力不足だ。

「甘い！！」

その突きを弾く。

そして、エリオの顔先に剣先を突きつけた。

「槍の突きは一撃必殺を心がけるんだ。まあ、今ぐらいならガジエツトは破壊できるが、それ以上のものは倒せない」

「は、はい！！」

「槍は長いから特に速さが必要だ。それを私の訓練で覚えていつてもらう」

「はい！！！！」

一時間、槍の扱い方について教え込んだ。

結論。このメンバーは全員が光る原石だ。必ず輝かしてみせる。

まあ、皆が疲れきったのは言うまでもない。

第十一話 『嗣音の魔術強化』オリジナルスペルを考えよう』

・・・最近、魔術の使い勝手が悪くなってきた気がする。

私のこの『トレース』という言葉は、もともとあの弓兵のものだったのでそこまで不満はなかったのだが、少し扱いづらくなってきた。やっぱり他人のオリジナルスペルを使っているからだと推測する。

「・・・なんにするか・・・」

『トレース』以外のオリジナルスペル。それによって魔術行使も少し変わる。魔力が今までのように上手く練れるかとか、オリジナルの武器を中心に考えていかなくはならなくなりそうだ。

「・・・うん・・・私の場合は何がいいのだろうか・・・」

最近まで考えてなかったので難しい。・・・ここまで悩むとは・・・！

「・・・私はアイツを追いかけてたしなあ・・・」

思い出される赤い弓兵の後姿。アイツを目指して私はこの魔術を使い続けてたわけだし・・・おっと、脱線してた。

「むう、・・・なあフェイル。良いのいかな？こう核心を突くよ
うな」

『・・・マスターの核心を突くようなスペルですか・・・』

「『うん・・・』」

私とフェイルは悩んだまま数分が過ぎていた。

そういえば……

「……よくフェイルって『装填』って言うよね？」

『はい。マスターの剣を弾丸のように考えていますから』

そこで私はひらめいたのだ！

「それだ！オリジナルスペルは『ロード・オン』でいく！」

『……なるほど、』装填』もあります。』読み込み』ですか。確かにそれは貴女らしい』

「刀剣のデータをあの書庫バンクから読み込むっていつのでも私らしいと思ってる」

『そうですね。それならいけます』

よっし！これなら私の魔術行使も上手くいくはずだ！

「必ずアンタに追いついてやるからな！弓兵アーチャー！！」

私は、そう決心するのだった。

第十一話 『嗣音の魔術強化〜オリジナルスペルを考えよう〜』（後書き）

ロサです！

感想をいただいたので見てみると、『オリジナルスペルは個人によつて違う』というのを忘れてしまっていたので、ここで変えてみようと思ひ、この回を作ってみました。

次からまた復活します！

主人公設定

衛宮 エミヤ 嗣音 ツグネ

性別：女

性格：温厚、お人よし、色々言われるが悪いことは言われたことがない。

髪の色：白

目の色：黒 だが 紅色になることも。過去になんらかあったと思われる。

年齢：23歳。

役職：XV級戦艦副官長／執務官

魔力光：紅色。だが、黄金の色も存在する。（クロノ、ヴァイス、なのは談）

出身：第九十七管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区 日本・冬木市

魔力：SS 空戦：AAA+ 陸戦：SS+ 総合：SS

魔力変換資質：剣（クロノの決定）

魔法術式：ミッドチルダ式。だが、謎の魔法を使用する。説明は困

難。

「・・・何者や？ツグネさん」
「です〜・・・」

ウチとリインはクロノ君から送られてきた（頼み込んだ）ツグネさんのプロフィールを見ている。
まあ、このプロフィールはほとんどエイミーさんが書いたものらしいねんけどやな・・・

「詳しく書かれてると思つたら、謎が多いし・・・。クロノ君に聞いてみても・・・」僕もツグネについては詳しく知らない。・・・ほんと、何者なんだろうね？アイツは『ってな感じやったし。エイミーさんも知らへんみたいやしなあ」
「謎の女性です〜」

・・・分らん・・・

「はあ〜・・・」

ウチらは、ただ同時にため息をつくしかできなかった。

主人公設定（後書き）

ロサです！

ツグネの紹介編ということにしました。

前回続きを書くと言っておいて申し訳ありません・・・

今度こそ再開させてみせます！

第十二話 『ホテル・アグスタ』（前書き）

「祈れ。さすれば与えん。」

「願え。さすれば与えん。」

彼女は祈り、願う。世界の中心、黄金の草原のある丘の上で。

ただ、全てを守りたいと。

人の幸せにしている姿が見たいんだ、と。

そして、彼女は誓った。

「この身は剣、この身は盾、この身は器。」

そう思わないと、生きていけないほどの苦痛を背負っているから。

星々は力を授けた。

・・・後に後悔する。

なんて愚かなことをしてしまったのだろうか。

なんて残酷なことをしてしまったのだろうか。

一番救うべき人間を、世界のために犠牲にってしまったのだから。

第十二話 『ホテル・アグスタ』

テイアナside

最初の出勤の時も、それなりに上手くやれたけど、それだけで毎日の訓練も、そんなに強くなってる実感が無い。でも、スバルやエリオ、キャロみたいな優秀すぎる仲間が居て。あたしの周りには、天才と歴戦の勇者しかない。

だから、どうしても疑問に思う。何で自分がここにいるのか。あの人は何で、あたしを部下に選んだのか。

だけど、一人だけ根本から違う。ツグネさん。あの人だけが、私とぶつかり合ってくれる。

ガジェットとの戦い方。悪いところを容赦なく指摘してくれる。

兄さんの戦い方。それを応用した射撃方法。私に合った戦闘スタイルの提示。

的確な説明、対応、判断。それを教えてくれた。

・・・だけど、難しくて、うまくいなくて。

改めて、兄さんが遠く感じた。

分からない。

分からないから、焦る。

でも、どうしたらいいかも分からなくて。

そんな風に悩んでいる時に、新しい任務が届いた。オークション会場、ホテル・アグスタの警備任務。

オークションと言っても、勿論骨董品だけが取り引きされるだけならば、あかし達が出る幕じゃない。

本命は、取引許可が出ているロスト・ロギアなどに反応して出てくる可能性があるガジェット。

レリックが関わっている可能性は低いみたいだけど、ガジェットが出てくる可能性は高いらしい。

頑張ろう。

今度こそ、あたしの実力を示すんだ。

ティアナside 終

・・・どうも、最近フォワード4人の訓練を見て少し疲れている嗣音です。

体力の回復が常人より早い新人達は、私のカリキュラムをどんどんこなしていきます。

・・・ただ、ティアナが少し伸びづらいです。いや、周りが良すぎるからそう見えるだけですが、彼女も他の人よりかは数倍早く伸びています。

・・・だけど、周りが凄すぎるせいか、焦っているように感じます。

「ツグネさーん！聞いてるかー？」

部隊長の声で思考の海から戻ってくる。

「す、すいません。聞いてませんでした。もう一度お願いします」
「はい。これまで謎やったガジェットドローンの制作者。及びレリックの収集者は現状ではこの男。違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者、ジェル・スカリエツィの線を中心に捜査を進めてる」

八神部隊長の言葉と共に、モニタに白衣を着た男が映される。
うん、いかにもな悪役面だ。高笑いとか超似合いそう。

「こっちの捜査は私が中心になって進めるけど、一応みんなも覚えておいてね」

「「「「はい！」「」」」

この男、偽者じゃないだろうな。

あのジェルが犯罪者って時点でおかしいんだよ。いつつも「娘ラブー！世界？娘さえ居てくれればどうでもいい」って叫んでそうな奴が犯罪者になるなんて、なんかあるんだろうな。

「で、今回の任務の会場はここ。ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

理由は、取り引きされるロストロギアに反応して、襲撃してくる可能性があるガジェットに対してって事らしい。

シグナムとウィータが、昨夜からずっと警備してくれているとの事だが、だったら私いらなくね？

隊長達が全員で出張ってるなら、新人どころか私なんて行く意味がないんじゃない？

「私達は内部の警備に回るから、皆は副隊長達の指示に従ってね」

「……はい！」「」「」

なるほど、部隊長達が内部警備なら、外側は副隊長達だけじゃ手が足りないか。把握。

そうして最後の確認をしながら、私達はホテル・アグスタへと向かった。

「……あ、ツグネさんは私達と来てもらうで」

「……は？いやいや、何で私も？」

「外は副隊長が守ってくれとるし。中の防衛ラインを強化したいねん」

「いや……でも……そうだ！ドレス！私ドレス持って「ちゃん」と用意してますよ」……シャル……」

てへっ　と笑う医務官さんは意外と侮れなかった。

「あきらめて、一緒に入ってもらおうで〜！」

「なんでそんなに笑顔なんですか……？」

ジーザス、神は死んだ。

「・・・もう嫌だ」

「にははは・・・ツグネさん大人気でしたね・・・」

なのはの言うとおり、私に声をかけてくる金持ちは多かった。見たことのない人があの美女3人の中に居たからだろう。無論、その見たことのない人は私だが。

しかもシャマルが用意したこのドレスが目立つのなんの。紅と黒でコーディネートされているのだから目立ってしまう。

・・・あの封印指定執行者みたくスーツで出たほうが良かったのか？

そんなアホなことを考えている間に、オークションが始まった。

第十三話 『ホテル・アグスタ2』 (前書き)

何を願う？

守る力

何を願う？

人々の幸せ

何を願う？

皆の笑顔を、守りたい

私は守る者。ただ人々の笑顔のために。

皆が望むのならば、

私は常世全ての善にもなるう。

皆が望むのならば、

私は常世全ての悪にもなるう。

人々が望むのならば、全てを背負って命を差し出そう。

私の生に、意味などいらないのだから・・・

第十三話 『ホテル・アグスタ2』

どうも、嗣音です。今ホテルアグスタでオークションが開催されました。

私は興味がないので会場の外に居ます。もう金持ちの目が凄い何の、司会者そつちのけで私を見てくるもんだから気持ちが悪い。

さて、何をしよう「そのレディ？お茶でも一緒にいかが？」・・・

「おあいにく様。これでも勤務中ですので」

「つれないねえ・・・」

帽子をかぶった男が肩を落とした。まあ、あのボンボン共に比べるとそこまで気持ち悪い雰囲気醸し出してないのは好印象だな。

「全く、管理局の人間は固いのが多すぎる。仕事熱心なのは良いことだが、体を労わるということを知らない」

「それに関しては同意見ですね。私の上司も働きっぱなしで見ているこつちが心配しますよ」

「君だつてそうだろうに。『人事部泣かせ』の衛宮嗣音君？」

「・・・名前は有名なのは分かりますが、『人事部泣かせ』はどこから聞いた？」

緊張が走った。そこまで調べられているということは、敵と判断しようか。

だが、男はあせつたように手をブンブンと左右に振った。

「か、勘違いしないでくれ！知り合いが管理局の人事部に居てそこから聞いたんだ！」

「・・・まあ良いでしょう。お茶のお誘い、まだ有効ですか？」

「ぜひとも。君のような美しい女性が相手なら僕は断れないよ」

「では、エスコートを頼んでも？」

「・・・フフツ」

「どうしました？」

「いや、何でも。頼まりましたとも」

私が差し出した右手に、男が左手を重ねてくる。

そして、私と男は歩き出した。

ホテルの中の喫茶店。私と男は向かい合って座った。

「・・・さて、何から話しましょうか？」

「では、管理局について」

・・・話の内容によるな。

「どつという議題でしょうか？」

「議題、というものでもないがね。まあ、君は管理局についてどう思っ？」

「はつきり言って嫌いですね。ロストロギアのことになると強盗のように盗んでいきますし、上層部は権力争い。正義が聞いてあきれます」

言い切ると男は驚いた顔で、私を見てきた。

「・・・そこまで言うとは思わなかったよ、管理局の者が」

「私はこういうときはハッキリ言うことにしています」

「そうか。・・・でも僕は君が言うよりもっと酷いことを思っているなあ」

「貴方は政治家か何かで？」

「いや、ただの金持ちのボンボンだよ。まあ、管理局は娘を盾に僕を脅してきたから嫌いかなあ」

男が悲しそうな目で私を見つめてくる。

・・・管理局の上層部はとっとと排除すべきかもしれない。

「なるほど、確かに私より恨みはありますね。・・・まあ、この話を選択しなければそんな悲しいことを思い出さずにすみましたのに」

「・・・手厳しいねえ。まあ、そうだね。愚痴を聞いてほしかったのかもしいないなあ」

「そうですか。」

「……さて、こんな茶番はやめにしようじゃないか」

私が言うと、男は真剣な顔になる。……ここからが本番だ。

「なんだ、気づいていたのか？ツグネ」

男の目に敵意が籠もる。分からないわけがないだろう、この科学者め。

「当たり前だ。お前を忘れるわけがないだろう。なあ？『ジェイル・スカリエツティ』」

男の名前を言った。そう、部隊長から聞いた次元犯罪者の名前を。すると、男は急に笑い出し、帽子を取った。

紫色の髪、そして、全てを見通すような黄金色の目が現れる。ただ、その目に先ほどのような敵意がない。

「なんだ、もう少しいけると思っていたのに。君はやはり優秀だな、ツグネ」

「抜かせ、お前のほうがよっぽど優秀だろうが、なあ？ ジェイル」
「私はそれでも君が欲しいのだがね。ウーノも君を気に入っているし、そろそろこちらに来て欲しいのだが？ 何、昔からの縁というやつもある」

「阿呆。お前の言った通り上層部のカスはやってやるが、それ以外は話が別だ」

バツサリ切り捨てた。そう、『カス』以外は。

「・・・君はいつもそうだ。似合わないのに悪ぶって、いつも一人で抱え込んでしまう。ティーダも君のそういうところをいっつも心配していたよ」

「そんなわけあるか。・・・さて、お前何時動く？」

「聖王の器が手に入ってからだ。そこからあの上層部を叩く。ティーダや娘のためにも、そして、君のためにも」

ジェイルの目が覚悟の火を灯す。黄金の瞳がキラキラと輝いている。

「・・・そうか。まあ、お前なら大丈夫だろう」

「信頼してくれるとは、嬉しいね。・・・さて」

ジェイルは帽子をかぶりなおした。

「ここいらで失礼するよ。目的は達した」

「・・・そうか」

ジェイルはそういつて私に背を向けて歩き出す。

「・・・こいつは、絶対無茶をする。だから、言っておかないとな！

「安心しなさい！ 私は貴方達の味方だから！」

「！」

私の投げかけた言葉に反応して、驚いたような、嬉しそうな顔を
して私を見てくるジェイル。

そして、また私に背を向けククツとのどを鳴らして片手を振り歩き
出した。

《ツグネさん？今どこに居ますか？》

なのはちゃんから念話が入る。

《今、喫茶店。断りきれなくて》

《あはは・・・任務完了です。帰りましょう》

《了解》

私は喫茶店からでて、皆の居るところに向かった。

帰り際、スバルやキャロに私のドレス姿を見てキャーキャー言われ
た。

ティアナは到着するまでずっと暗かった。

なんでも防衛線でスバルに砲撃が当たりそうになったそうだ。

・・・ここで焦りと疲れが出てきたな・・・さて、どうなること
やら・・・？

私の悩みの種はそう簡単に尽きないようだ。

『この世^{アンリマユ}全ての悪』、 『時空管理局上層部』、そして『ティアナとなのは』

歯車は狂いだす。ツグネの歯車は止まらない。

彼女の悪夢は、更に加速する

第十四話 『悪意の加速、裏切られる絆』（前書き）

絆。

それは見えるものか？ 否。

信頼。

それは優しい言葉か？ 否。

全ては甘く、残酷な言葉に過ぎない。

それは知らない間になくなるものだから・・・

第十四話 『悪意の加速、裏切られる絆』

・・・ホテル・アグスタの一件が終わり、私はあることに悩んでいた。

『ティアナ』と『なのは』の関係についてだ。

あの二人はギクシャクしている。誰が見てもそう思うほどに。

だから、お互いに理解するよう話し合いをなさいと二人に言うておいた。

言ったのだが、あの二人は話し合いをしなかったようだ。

そして、スバルに言われてしまった。

「正義の味方なら、何でもっと早く来てくれないんですか・・・！」

話は、模擬戦前に遡る。

なのはVSスバル、ティアナの2on1の模擬戦。

私とヴィータちゃん、エリオとキャロは戦闘区域を離れるため、近くの廃ビルの屋上へ向かった。

ティアナとスバルはバリアジャケットを展開し、戦闘準備をする。

「やるわよ！スバル！」

ティアナは目で作戦を伝え、

「うん!!!」

スバルはそれを元氣な返事で返す。

二人は早朝自主練の成果をなのはに見せるためお互い気合をいれる。

ちょうど模擬戦が始まるうとする時、フェイトは空間シミュレータへ向かい走っていた。

そして、擬似空間の廃ビルの屋上へたどり着き、扉を開けると、そこにはヴィータ、エリオ、キャロがいた。

「ああ、もう模擬戦始まっちゃってる?」

「フェイトさん!」

ビルの屋上に着いたフェイトに挨拶をするエリオとキャロ。

「今はスターズの番だぜ」

ヴィータはフェイトを見て、現在の進捗状況を伝える。

「・・・ホントはスターズの模擬戦も引き受けようと思ってたんだけどね」

フェイトは模擬戦を行おうとしているのはを心配そうに見る。

「ああ。なのはもココ最近は訓練密度が高いからな。・・・少し休ませねーと」

ヴィータも最近のなのはのオーバーワークは気になっていたようだ。険しい顔でなのはを見ている。

「なのは、部屋に戻ってからずっとモニタに向かいっぱなしなんだよ。」

訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形見たり」

「なのはさん・・・訓練中も、いつも僕達のこと見ていてくれてるんですよね・・・」

エリオは普段の訓練でのなのはの心配りを感慨深げに語る。

「ほんとに・・・ずっと・・・」

キャロもエリオに賛同するように嬉しそうになのはを見る。
ヴィータはそんな二人を微笑みながら見つめる。

・・・なのはのことは理解した。

それではティアナは？ティアナのことは考えているのか？

あれだけ悩んで、あれだけ努力し続けて、寝る間も惜しんで努力している彼女のことは？

どれだけなのはが努力しているかが周りはティアナのことを考えているのか？

・・・もし、これを分かっている、『なのは』のことしか考えていないのなら、スターズは終わりに近い。

悩み苦しみ、ティアナはもっと大きなミスをするだろう。

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータがティアナの戦闘陣形を見てつぶやいた。

ティアナは周囲に10個程の魔法弾を展開している。

「(うーん、前にティアナに言ったことはあまり守っていないな。

これじゃあ攻撃方法もわかりやすすぎてカウンターされそうだ)」

「クロスファイア・・・シュート！」

ティアナは魔法弾をなのはに向けて発射する。

だが、その魔法弾はスピードが遅い。

「・・・？なんかキレがねーな？」

ヴィータはティアナのクロスファイアにいつもの勢いが無いことに疑問を抱く。

「コントロールはいいみたいだけど？」

フェイトは正確なコントロールに目をやるが、それでもヴィータは釈然としないようだ。

「いや、それにしたって・・・」

「フェイントでしょ。次の一手への布石としての」

私の言葉に、フェイトとヴィータがこっちを見る。

「でも、フェイントも本気でやらいと、なのは隊長くらいの人ならすぐにバレますよ」

クロスファイアは、飛んで回避するのは後ろを追尾し続ける。すると、なのはの前にスバルのウイングロードが展開しその上にはスバルがなのはに向けて近づいていた。なのはは迫り来るスバルを確認する。

「!? フェイクじゃない、本物!？」

なのはは即座に魔法弾を展開し前方のスバルに向けて発射する。スバルは飛んでくる魔法弾をシールドで防御し突進をやめない。何個かのスファイアはスバルのシールドを突破し、スバルの体をかすっていく。危険だな。

そして、全ての魔法弾を捌ききると、スバルはなのは目掛けてリボルバーナックルを振り下ろす。

「うおりゃああああっ!!」

なのはは咄嗟にレイジングハートでシールドを展開しスバルのリボルバーナックルを防御する。

スバルは力押しでなのはのシールドを破ろうとしているのか、回避するそぶりを見せない。

リボルバーナックルのナックルスピナーが回転数をあげ唸る。

なのははスバルの無茶な突進に顔を顰める。

すると、なのははレイジングハートを振り、スバルを弾き飛ばす。

「きゃああああっ!?!」

吹き飛ばされたスバルはなんとかウィングロードの上に着地する。

「こらスバル!ダメだよ、そんな危ない軌道!」

なのははスバルを叱りながら、ティアナのクロスファイアをよけ続ける。

「すみません!でも、ちゃんと防ぎますから!」

なのはは怪訝な顔をする。

何を防ぐんだ?

そういえばティアナは?

最初のクロスファイアからどこに行った?

なのはは周囲を見渡す。

すると、別の廃ビルの屋上で光の反射を確認した。

そこには、ティアナが砲撃準備し、しっかりなのはをロックしていた。

「砲撃?ティアナが!?!」

フェイトは驚いている。

当然だ、ティアナは普段の訓練では砲撃などしていないし、教えていない。

なのはは普段の練習と違う動きに不快感をあらわす。

「（特訓成果、クロスシフトC！行くわよ！スバル！！）」
「おう！！」

ティアナの合図と同時にリボルバーナツクルがカートリッジをロードし、マツハキヤリバーがうねりを上げる。

そして、マツハキヤリバーの突進力で一気になのはとの距離を詰めるスバルは、リボルバーナツクルを振り上げなのは目掛けて体ごと突撃する。

なのはは魔法弾を展開するが、スバルはそれ等を全て避け、拳の届く距離まで近づき、リボルバーナツクルを振り下ろした。

だが、なのはもレイジングハートでシールドを展開しリボルバーナツクルの攻撃を防ぐ。

両者の魔法がぶつかり合い、火花を散らせる。

ナツクルスピナーの回転が上がるが、シールドが突破できない。

スバルは必死になのはに喰らいつき、なのはの隙を作る。

なのははスバルの攻撃を防御しつつ、ティアナの方を見る。

すると、砲撃準備をしていたティアナはその場から消えてしまった。

「あつちのティアさんは幻影！？」

「本物は！？」

キャロとエリオが慌てている。

隊長陣は冷静に見守っている。

ティアナはなのはの頭上に展開されたウィングロードを走っていた。

（バリアを切り裂いて、フィールドを突き抜ける！）

ティアナの持つクロスミラージュの銃口部分から魔力の刃ダガーが現れた。

そして、その刃をなのはに向けて飛び込む。

「一撃必殺！でえええいつ！！」

自分を省みない危険行動と、慣れない魔法、自分のポジションを無視した戦略、どれをとってもダメだ。

そんなティアナにとうとうなのはがキレた。

「レイジングハート、モードリリース」

《 all right . 》

レイジングハートはマスターの言葉に従い、待機モードへ移行した。レイジングハートが無くなったことで、なのはの右手は空いた。

「だあああつ！！」

ティアナの掛け声と共になのは達のいた場所は爆発し爆煙に包まれた。

衝撃波が、離れて見ていた嗣音たちにも襲い掛かる。

「な、なのは！？」

フェイトはなのはの安否を心配する。

おそらく、まともに喰らっていたらただでは済まないだろう。そう、まともに喰らっていれば、だが。

しばらくして、煙が晴れ、現場の状態が見え始めた時、フェイトたちは驚いた。

「・・・おかしいな・・・二人とも・・・どうしちゃったのかな？」

なのはに対峙しているスバルやティアナも驚いた。

左手でスバルのリボルバーナックルを受け止め、
右手でティアナのクロスミラージユのダガー部分を掴んでいる。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ」

なのはは静かに語りだす。

しかし、二人とは目を合わせず淡々と怒りを表す。

「練習の時だけ言うこと聞いている振りで、本番でこんな危険な無茶するんじゃない？あ、練習の意味……ないじゃない？」

クロスミラージユのダガー部分を素手で掴んでいるため、なのはの手からは血があふれ出ている。

ティアナはその血を見て恐怖する。

傷つけてしまった。訓練とはいえ、仲間を、傷つけてしまった。

「ちゃんとさ……練習どおりやろうよ。ねえ？」

スバルはなのはの怒りに震え、まともに喋れない。

「私の言ってること……私の訓練……そんなに間違ってる……？」

なのははティアナを見上げる。

しかし、ティアナはなのはと目を合わせることが出来ず、クロスミラージユのダガーを解除し、なのはと距離をとる。

そして、体制を立て直し、クロスミラージユをツーハンドで構え、カートリッジをロードする。

すると、ティアナの前に魔方陣が展開し、砲撃準備を行う。

「私は！もう・・・誰も傷つけないから！！無くしたくないから！！！」

ティアナは涙を流し自分の思いをぶつける。

そんな独白にスバルはただ見ているしかなく、立ち尽くしていた。

「だから・・・だから！強くなりたいんです！！！」

ティアナの叫びが嗣音達のところにも届く。

皆、ティアナがこんなな思いつめていたとは思ってもいなかったよ
うだった。

エリオとキャロはショックが隠せないようで、呆然としている。

ヴィータとフェイトはまっすぐ事の成り行きを見ている。

怒っていた。

なのははティアナの独白を聞くと、ゆっくりと左腕をあげ、人差し指をティアナに向ける。

そしてゆっくりと、こう言った。

「少し・・・頭、冷やそ・・・」

なのはの足元に魔方陣が展開し指先に魔力が集まりだす。

「クロスファイア」

なのはは静かに魔法を唱え、

「うわあああああ！！ファントムブレ・・・」

ティアナが必殺の砲撃魔法を言い終わる前に、

「シュート。」

なのははクロスファイアをティアナ目掛けて発射した。

そして、クロスファイアはティアナに被弾し、爆発した。

「ティアア・・・！？バインド！？」

スバルはティアナの所へ駆け寄ろうとしたが、いつの間にかバインドで拘束されていた。

スバルはなのはを見るが、なのははティアナから視線を離さない。そして、なのはが無常の言葉を告げる。

「じつとして・・・よく見てなさい」

煙の晴れた中に、フラフラのティアナがいた。

今にも倒れそうだ。

そして、なのはは二発目のクロスファイアをティアナに向けた。

「！？なのはさん！？」

「この、バカ共が・・・！」

「え？・・・あれ？ツグネさんは？」

フェイトがツグネの方に振り向いたが、そこにツグネは居なかった。

そして、スバルの悲痛な叫びも空しくなのはの指先からクロスファ
イアが発射された。
そして、ティアナに被弾し爆発。

かに、思われた。

煙が晴れると、そこにはあのピンク色の七枚の花弁がティアナを守
っていた。

「ツグネ・・・さ・・・ん・・・？」

「話は後だバカ者。今は休め」

そう言うと、ティアナはゆっくりと意識を手放した。

「・・・スバル、医務室へ」

「・・・」

スバルはなのはを睨んでいた。射殺すような目で・・・
このバカが。仲間の状態を確認しろ。

「スバル!!!!!!!!!!!!!!」

「は、はい!!--」

私はスバルを怒鳴った。

スバルは普段怒らない私を見て驚いている。

「ティアナを早く医務室へ連れて行きなさい」

「は、はい……」

私からティアナを受け取る瞬間に、スバルは私を睨みながらこういつた。

「正義の味方なら、何でもっと早く来てくれないんですか……！」

「……そうか」

「……あ……!」

スバルは言ってしまった。悪いのは無茶をした自分たちなのに、練習を見ていただけの第三者に。
しかも、一番私達のことを心配してしてくれた人に。

「あ……!あ……の……!」

「今は良いから、早く連れて行きなさい。フェイル、頼んだ」
『了解。転送します』

そして、二人は訓練場から居なくなった。

「……どうして、庇ったのかな……?」

「……あ?」

今こいつ、なに言いやがった?『どうして』……だと?

「……そうか。お前バカだったのか?」

「……どうしてって聞いているの」

「お前、ティアナのことをなぜ理解しようとしなかった?話し合いは?ああなるって分かかってて今回の模擬戦をしたんだろ?」

「……て」

こいつは、何を考えている。

「アイツの置かれている状況分かってるのか？自分に自信がなくな
って」

「・・・ま・・・て」

「練習量を人の二、三倍まで増やして」

「・・・まつて」

「それなのに自分のやりたいことは、言葉に出さずに分かってもら
えると信じて。阿呆。そんな肉体言語でお前等は伝わるのか？」

「黙って!!!」

なのはが叫ぶ。

「何も、何も知らないくせに・・・!!」

「知るかバカ。お前等の仲間はどうか知らないが、私はこのような
状況になったお前の駄目さに怒っている。いや、怒りを通り越して
呆れている。過去？そんなこと言わないほうが悪い。そして、ちゃ
んと話し合えといったはずだな？それをなぜしなかった。お前がど
れだけ努力しようが部下の気持ちも考えていないとは呆れたよ」

この言葉に反応してか、ヴィータとフェイトがバリアジャケット姿
で飛んできた。

「お前・・・!」

「あ？何怒ってんの？」

「何も知らないくせに・・・!!」

・・・駄目だな、こいつら。本当に駄目だ。

クロノ、お前の見る目もおかしくなっただんじやないのか？

「・・・じゃあ逆に聞くが、私をどのくらい知っている？お前等が
庇っているそいつの言うことが正しいなら、お前達は私の過去を全

「知っているのか？」

「……！」

「理解？お前達は何も言わなくても考えていることが分かってもらえているのか？自分の望みを、何も知らない人間に分かってもらえると信じているのか？いくらなのはが有名だとしても本当にその内容を知っている人間はごくわずかだ。新人ならなおさらその確立は低いだろう」

「……もういい。行きましょう、なのは」

「ツグネ、お前にはがっかりした……」

フェイトとヴィータがなのはの肩を抱いて、帰っていった。

……機動六課の人間全員が、こうして私の敵となった。

絆とは、信用とは、信頼とは、脆い。

裏切られ、そして孤独になって行く。

第十五話『・・・孤立。そして・・・』(前書き)

硝子のハートとはよく言ったものだ。

人の心は弱く、脆い。

かくいう私も、弱い。

酷く脆く、酷く弱い。

そして、皆を守ってやれる力もない。

やはり、私は常に独りだ。

理解されたいなんて思わない。

・・・私は・・・

第十五話『・・・孤立。そして・・・』

あの模擬戦が終わると、皆が私を睨むようになり、数日が過ぎた。

「・・・はあ・・・」

スバルとティアナも、私とはかかわらなくなった。
・・・最近、それでいいと思うようになってる。

「・・・すまん、ティード、ジェイル。私は道を間違えたよ。それでも、裏切られるたとしても、私は守り続ける・・・」

思い出されるはあのときの光景。

まだ救えるはずだったのに、救えたはずだったのに・・・
村人達から「殺して・・・！殺して・・・！」と言われた。

「お願い・・・殺して・・・！人のまま・・・死なせて・・・」

「化け物に・・・なりたくない・・・」

「人の・・・血をすいたくない・・・！」

『お願い・・・私達を殺してくれ・・・正義の味方・・・！』

そして、私は泣きながら村に火を放ち、そこに居た人を全て殺した。

・・・それなのに、なぜ私はこんなにのうのうと生きているのだろ
う・・・！

「……ツグネさん……」
「ティアナ……？スバル……」

私の部屋に、二人が入っていた。

「……ここに来るな。そういわれただろう」
「……それでも……すみませんでした！！ツグネさん！」
「私達が無茶をしなければ……！こんな……事には……！」

二人は泣いていた。頭を何度も下げ、泣いていた。

「……もういいさ、二人とも。もう遅い、部屋に帰り、ゆっくりと体を休めなさい」

「そんな……」

「ツグネ……さん……」

「明日も、訓練があるんだろう？ゆっくりと、寝なさい」

「……はい……」

二人は、静かに出て行った。

・・・これでいい。これで・・・

なのはside

「・・・ツグネさん・・・怒ってるかな・・・？」

なんで、あんなこといったんだろう・・・

彼女は、やりすぎた私達を止めに来てくれただけなのに・・・

なのに・・・私は・・・

「なのは」

「フェイトちゃん・・・」

「気にすんな。なのは」

「・・・ヴィータちゃん」

・・・私が、悪いのに。なんで・・・皆何も言わないだろう・・・

「・・・なのは」

「シグナム・・・」

シグナムが私に近寄ってきた。

「・・・いいのか？ツグネの奴、もう何日もなににも食べてないぞ」

「そ・・・れは・・・」

「なんで、あの人の心配をしてるの？シグナム」

フェイトちゃんが、怒ったような言い方をした。

「・・・そうか、それがお前達の答えか・・・」

シグナムは、フェイトちゃんの質問を聞いて怒っていた。

「・・・お前達は、アイツのことを何も知らずとしていないくせに、自分達は分かってもらおうとは・・・とんだお門違いだ」

・・・え？

「どういう・・・こと・・・？」

「あいつがどれだけ辛いか知っているのか？あいつがどれだけ人に裏切られたか知っているのか？あいつがいつも独りで自分の無力さに泣いているのを知っているのか？お前達は？」

何を・・・言ってるの・・・？

「今回のことでアイツとなのはのどっちを擁護するかと聞かれたら、私は迷いなくツグネと言う」

「・・・なんで・・・そんなこと・・・！」

ヴィータちゃんが、シグナムに聞いた。

「・・・お前達は本当にツグネが悪いと思っているのか？模擬戦を見ていただけの第三者が、全て悪いのか？」

「それは・・・」

「貴様等は大きな間違いをしている。お前達は都合が悪くなったか

ら、^{アイツ}嗣音を悪にしたらだけだ」
「……あ……」

そう、私はあるとき……ただの八つ当たりでツグネさんを悪と決め付けた。

何も悪くないのに、やりすぎたのを止めに來ただけなのに……
自分勝手に、あの人を悪くしてしまった。

なんて……愚かなのだろうか……。そして、なんて子供なのだろうか……。

「……あいつは、もう精神病のような状態だ。……何時自殺を試みてもおかしくないほどに弱りきっている」

それを聞いた瞬間、私はツグネさんの部屋に走り出していた。

「「なのは!?!」」

二人が呼び止めようとするが、そんなの聞こえない。

……謝らないと……!

「……ツグネさん!」

ツグネさんの部屋のドアを思いっきり開けた。

部屋の中には、床に倒れているツグネさんが居た。

第十六話 『衛宮 嗣音』 (前書き)

「祈れ。さすれば与えん。

願え。さすれば与えん。

何を願う？ 守る力

何を祈る？ 人々の幸せ

この体は剣、この体は盾、この体は器

私は常に独り。世界の中心で祈り続ける。

皆が望むのならば、私は常世全ての善となろう

皆が望むのならば、私は常世全ての悪となろう

ならば、私の生に意味をなくし、

『エターナル・オブ・ワールド』
『星降る黄金の草原』で、私は笑顔を守り続ける」

第十六話 『衛宮 嗣音』

なのはside

ツグネさんが医務室に運ばれた。

栄養失調だけではなく、かなりの精神疲労から過呼吸にもなっていた。

それを知ったスバルとティアナはずっと、泣きながら謝り続けていた。

無論、私も泣いて、謝り続けた。

「……ツグネさん、もう何日も何も食べたり飲んだりしていないの。それに……この疲労。今まで持っていたのがおかしいくらいよ……」

シヤマルから診断結果が言い渡された。……私のせいだ……！
あのときに私が……！

「……あとね、ツグネさん、なのはちゃんの過去を知っていたわ」
『……』

知っていた？私の過去を……？

「ずっと壓されていたわよ。『私がしつかりしていれば』って……
。それでも、彼女は止めた。ティアナちゃんがどれだけ辛いかを知っていたから。そして、なのはちゃんに傷つけて欲しくなかったから」

「あ……！ああ……！」

知っていたのだ。ツグネさんは、私がこの教導をしている意味を。そして、間違ってるのに気づいてくれたのに・・・忠告してくれたのに・・・私は・・・！

「・・・そして、彼女の過去も分かったわ。・・・正直、ここまでだとは思ってなかった」

「どういう・・・こと・・・？」

「彼女の今までは、私達からしたら・・・いいえ、彼女にとっても地獄よ。それも・・・なのはちゃんあのときがまだましと思えるほどに・・・」

「そ・・・んな・・・」

ティアナとスバルが絶句する。

「見たくなったら、私に言いに来て。・・・ただし、それ相應の覚悟をしなさい」

シャマルは、私達にそういつてツグネさんの病室を後にした。

その後、すぐにシグナムが入ってきた。

「・・・どうだ？ツグネの様子は？」

「安静にしていれば、大丈夫だって・・・」

「・・・そうか。・・・なのは、どうする気だ？ツグネの過去を見るのか？」

「・・・見るよ。誰がなんと言おうと、私はツグネさんのことを、

知りたいと思う」

「知ってどうする?」

「・・・シグナムがいつてくれた通り、私はツグネさんのことを何も知らない。・・・だから、それを知って、ツグネさんの悲しみを軽くしてあげたい」

「・・・そうか」

シグナムは満足そうにうなずくと、今度は二人を見た。

「お前達は?」

「「見ます」」

「・・・そうか。・・・お前達はどうする?」

シグナムが扉に向かって言う。

そこには、はやて、フェイト、ヴィータ、エリオにキャロがいた。

「・・・私は・・・見る」

「ウチは、見る」

「アタシも見る。こいつのことを、もつと知りたいから」

「ぼ、ボクも!」

「私も!」

・・・皆・・・

シグナムは、それを聞くと皆をロビーに移動させた。シャマルちゃんと一緒にあるデータディスクを持って。クロノくんから借りたそ
うだ。

「・・・最終確認です。これは衛宮嗣音の希望であり絶望です。そ

れでも・・・見ますか？」

『はい!!』

「・・・分かりました」

そして、シグナムは映像を再生し始めた。

最初に映し出されたのは、人が焼け死んでいく映像だった・・・

第十七話 『衛宮 嗣音2』 (前書き)

始まりは炎の海。

人々の叫び声が始まる。

その前のことは思い出せない。

私は、この大火災から始まった。

一人の少女の声が、ロビーに響き渡る。

《忘れるな！人々の無念を。この怨嗟の声を。この災禍の中、一人だけ生き残ったお前にはその義務がある……！》

誰かの声が聞こえた。

サバイバーズ・ギルト。

彼女は一人、この火災で生き残った。だからこそ、全ての人を救わなければならない。

そんな強迫観念に突き動かされていた。

生き残ってしまった。あの火災の中で、生き残ってしまった。

だから、全ての人を救って、償わなければいけない。

「……そ、そんなの……間違ってる……！」

「……ああ。あいつは間違っている。本当なら、『生き残ってしまっただけ』ではなく、『助かった』のだ。それに感謝しこそすれ、償う必要はどこにもない」

「なら・・・」そう、思うことが出来なかったんだ。そうしなければ、アイツはとづくに自殺していた「・・・！」
「そう思わないと生きていけなかった。・・・そして、もう一つ理由がある」

場面が変わる。美しい月夜だった。

武家屋敷を思わせる家に、ツグネともう一人の少年が男の人を囲っていた。

「この人は・・・？」

「あの火災の中、ツグネを助けてくれた人だ。名前は、衛宮 切嗣。そして、この少年は同じく、キリツグに助けられた少年だ。初めて会ったとき、この少年はツグネの弟となった」

男が、口を開く。

『・・・嗣音、士郎。僕はね、『正義の味方』に憧れていたんだ』
『なんだよ、憧れてたって、諦めたのかよ』

シロウが不満そうに言う。
キリツグは苦笑する。

『うん、『正義の味方』は、子供のときしかなれないんだ』
『・・・そっか。それなら仕方ないな』

今度は、白い髪の少女、ツグネが言った。
そして、シロウとツグネは顔を見合わせて

『『だったら、私（俺）達になる！！』』

『・・・え？』

『だって、子供のときにしかなれないいでしょ？』

『俺達ならなれるじゃん！』

たぶん、二人は大好きな父親の夢を、叶えられなかった夢を叶えてあげようとしただけなのだろう。

『そうか・・・それなら、安心だ・・・』

そういつて、男は一筋の涙を流し、亡くなった。

それから、何年か経ち、姉弟は高校生になった。

そして、ある事件に巻き込まれる。

夜の放課後、二人は何故か、草むらに隠れるようにして前を見ている。

学校の校庭、そこで剣戟の音がする。

視線を向けると、真紅の槍を持つ蒼い騎士と、二刀を構えるツグネのバリアジャケットと同じ服装の紅の騎士が戦っていた。

「なに・・・これ？」

「……ツグネが言うには、『聖杯戦争』というものだ」
「聖杯……？」

フェイトちゃん言葉に、はやてちゃんが説明をする。

「聖杯つてのはな？新約聖書の中で、主の晩餐の際イエスは杯を指し「人のために流される私の血、契約の血である」と十二使徒に向かつて言い、またその後ゲツセマネでは怖れに苦しみながら「この杯をわたしから取りのけてください」と神に祈っているとかもあるねん。そして実在するかどうかもわからない杯自体はな、その後様々な聖性を加えられていき、復活、再生、不死、豊饒などの奇跡をおこすとされるようになっていったそうや」

「へえ……」

「流石は我が主。……そしてこれは、その願望器『聖杯』を巡って争われる殺し合いです」

「……なん……だって……」

ヴィータちゃんが絶句する。いや、私達も言葉を失った。

「『^{メイガス}魔術師』……私達の世界では魔導師と呼ばれる七人のマスターが、英霊と呼ばれる七人のサーヴァントを呼び出し、殺しあう。最後に生き残った一組だけが願いを叶えることが出来ます」

「そんな……なんでツグネさんはそんなこと……！」

フェイトちゃんが激昂する。

「巻き込まれてしまったのだよ。何も知らず、ただ学校に遅くまで残っていたという理由で」

「そんな……！」

『よお、どうした？こんなところで』

真紅の槍を持つ蒼い騎士がツグネに話しかける。

弟のシロウはいない。おそらく、彼女が逃がしたのだろう。

『・・・いい女だ。だが、運がなかったな。見られたからには殺すのがルールなんだな。』

『悪いけど、死んでくれや』

ツグネの左胸に、ズプリといやな音がした。
朱い槍が、彼女に突き刺さっていた。

第十八話 『衛宮 嗣音』 (前書き)

裏切り、悪意

全てを人は背負うことが出来るのだろうか？

答えは否だ。

だが、私は器だ。

それを収めるぐらいは出来る。

こぼれないように、溢れないように、それを器に入れていく。

許容量が越えてるのを知らずに

第十八話 『衛宮 嗣音3』

「・・・だが、結果的にツグネは生きていた。傷も治り、後遺症もなく、奇跡的に生きていた。そして、彼女は聖杯戦争に参加する。イレギュラーとして」

「イレギュラー？」

「ツグネは8人目のマスターだった。そして、犠牲者を出さないように聖杯戦争は進んで行き、ある男が、こういったんです」

『衛宮嗣音。深い傷だ、これでは、癒されぬままでは苦しかり。』

お前はそのまままで一生を終えるべきではない』

傷をつけ、殺そうとした張本人、神父のような格好をした男がツグネに言葉を投げかける。

『お前は聖杯など要らぬといったな？・・・だがどうだ。十年前の出来事をやり直せるとしたら？あの事故を無くし、衛宮切嗣などに関わらず、本来の自分に戻れる。それこそが・・・おまえ自身を救う唯一の方法ではないのかな？』

男の顔は慈愛に満ちた笑みを浮かべている。

『卑怯な・・・！』

ツグネの傍に要る騎士甲冑を身に纏った男が神父を睨む。映像を見ている皆はなぜ男が怒っているのか分からなかった。こんなにも、彼女が救われる方法があるというのに。

『さあ応えよ。お前が望むのならば、聖杯を与えよう！』

ツグネの身の上を考えれば、神父の言葉はどれほど甘く聞こえただろうか？

『ツグネ……！……貴女の事を考えれば……この望み……叶えて……いらぬ、そんな事は、望めない……！』！ツグネ……！』

『……そうだ。やり直しなんか、できない。死者は蘇らない、起きた事は戻せない。そんなおかしな望みなんて、持てない』
『それを可能とするのが聖杯だ。万物すべてがお前の望むままとなる』

『その道が、今までの自分が、間違っていないか……信じている。それに……』

ツグネは、自分の騎士を見た。

『こんな……最高の……パートナーと出会えなかったなんて……許さない』

『ツグネ……』

そのときに、シグナムが口を開いた。

「……あの大火災は、この『聖杯』が起こしたのだ。そして、もしツグネが望んでいたら、この神父はツグネを殺していた。甘く、優しい言葉で彼女を心ごと殺そうとした」

「なっ……！」

シグナムの言葉に皆が驚愕する。

あの言葉の真意は殺すためにあった。だから、騎士は激昂していた

のだ。

『・・・自らの救いではなく、自らの願いを取ったか』

『我が騎士、サー・ランスロットよ！最後の舞台だ・・・我が令呪全てにおいて命じる・・・！言峰綺礼を切り伏せ、聖杯を破壊するんだ！！その為の剣を、私も用意する』

『かしこまりました、マスター！この剣、貴女のために！！』

そして、場面が変わる。

そこは、山の稜線に光が走り、黄金の朝日が昇ってきている。

その中に、ランスロットがいた。

朝日に背を向けて、こちらに向かって微笑んでいる。

穏やかに・・・満たされた笑み、聖杯を手に入れることが出来なかったというのに・・・幸せそうな笑みを浮かべたツグネの最高のパートナー。

二人の雰囲気・・・そして笑みが全てを物語っている。

これは別離の・・・最後の場面なのだ。

ツグネはよほどの記憶を大事に胸に抱いていたのだろう。

この光景は、黄金の光は何処までもまぶしく輝いている。

『貴方の剣として、最後まで戦えたことを誇りに思う』

騎士として、一本の剣として戦いぬけた、それゆえの満足の笑み・・・

・だからこそ、別れの時に臨みながら・・・こんなに穏やかに微笑
む事が出来る・・・。

『嗣音・・・貴女を愛している』

自分の思いを伝えた騎士は・・・ツグネの見ている前で、消えてい
った。

まるで、朝日の中に溶けていくかのように・・・後に残る物は何も
ない。

幻のように、愛の言葉を送りながら、騎士は消えた。

だが、安らいだ気持ちでいられたのはそこまでだった。

「うー」

次の光景は・・・再び地獄だった。

あの火事の場所に似て・・・燃え上がる炎と黒煙、累々と横たわる
死体の群・・・ここは戦場だと瞬時に気がついた。

そして、地獄の中心には・・・ツグネがいた。

「これは・・・なんで・・・!!」

ツグネは泣いていた。

ツグネが両手で抱えている物を・・・それは、少年だった物だ。

おそらくさつきまで生きていた少年は、ツグネの手の中で事切れて
いた。

「救え・・・なかったのか・・・？」

そして、皆は気づく。

「まさか・・・聖杯戦争の後も追い求め続けたの・・・？お父さんと約束した・・・正義の味方になるという夢を？」

そう、ツグネは・・・ずっと追い求めていたのだ。

切嗣に託された正義の味方になるという思いを・・・忘れていない。忘れず、諦めず、折れず、自分が幾ら傷つこうが血に濡れようが、助けた人の笑顔を糧に、父親との約束のために、泣いてる人を笑顔にするために、走り続けている。

「・・・弟が・・・頑張っているのに、お姉ちゃんが折れるわけには・・・いかない・・・」

そして、彼女の心が完全に壊れる事件がやってくる。

そこは、一つの村だった。

ごく最近まで、みんなが平和に過ごしていた村だった。

だが、ある一人の『死徒』と呼ばれる吸血鬼が侵入し、村人達の生き血をすすり始めた。

そこに、依頼を受けたツグネが向かった。

そして、彼女はまだ死徒となっていない村人から、『殺してくれ』と頼まれた。

彼女は断った。何度も何度も首を横に振った。だが、村人はそれを許さなかった。

『頼む……！人間のままで……死にたいんだ……！！』

そして、彼女は唇から血が出るほど噛み締めながら、涙を流しながら、……首を縦に振った。

一人、また一人とツグネの手で殺されていく。

そして、殺す瞬間に村人達から『ありがとう』と言われるたび、彼女は泣いていた。

『私は……！こんな……！守るために……ここに来たのに……
……なんで殺さなくてはいけない！』

そして、死徒を全て殲滅するため、村に火を放った。

涙を流し、きつく握り締めたせいで、血が出て、自分のふがいなさ
と絶望に震える手で。

やがて、同じく依頼を受けた士郎と、聖杯戦争時の戦友と、サーヴ
アントがこの村に来た。

『ねえ……さん……？何をしている……！』

『……』

士郎は嗣音を睨んだ。ツグネがこの村の人をなんの理由もなく殺した
たと思ったからだ。

『せんぱい……貴女が……殺したんですか……？この村の人
を……全員……』

『……そつだ。私が殺した』

『!!!』

ここにいる全員が、彼女を驚いた目で見る。

『……私が、この村の人々を全て、殺した』

『……依頼内容に従い、あなたをここで……抹殺します』

そして、元仲間達との殺し合いが始まった。

この依頼内容は、仕組まれていた。

ただ、衛宮嗣音を殺すために、嗣音に依頼した人が、士郎たちに依頼したのだ。

その依頼主というのは、昔ツグネに麻薬の密売を暴かれた魔術師の男だった。

結果、彼女は死ぬ寸前だった。切り裂かれ、何本もの槍に貫かれ、大量の血を流し、彼女は立っていた。

両手に白と黒の剣が血にまみれ手から滑り落ち、目には光など宿っていない、虚空を見つめるかのように。

『……これで、終わりだ』

士郎が、白い短剣を首筋にあてがう。

『……し……るっ』

『……なんだ?』

死者の様な目をしながら、彼女は遺言のように、弟に言った。

『・・・がんばれ』

そして、短剣が振り下ろされた。

だが、突如現れた男により、彼女は救われる。

その男の名を、キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ。

世界で五人しかいないとされる魔法使いの一人で、士郎と遠坂凜の師匠が、ツグネを救った。

『だ、大師父！！なぜ、庇うのですか！？』

『……説明してる暇はない。ツグネ、今からお前を異世界に飛ばす。必ず生き延びる。全てが終わり次第、お前を迎えに行く』

『……ゼル……レッチ……駄目……だ。私は……ここで……！……！……！……！……！……！』

『聞く耳持たん！』

そして、私は虹色の光に包まれ、この世界に来た。

そして、重症を負った私を救ってくれたのは、執務官の『ティード・ランスター』と同じく執務官の『ジェイル・スカリエツティ』だった。

第十九話 『衛宮 嗣音4』 (前書き)

・・・どうして生きているのだろうか・・・

どうして、殺してくれなかったのだろうか・・・

どうして

衛宮 嗣音4 (前書き) ...

なんで、あそこで殺してくれなかったのだろう・・・

そうすれば、私は救われたのに・・・

第十九話 『衛宮 嗣音4』

皆が驚く。

そこに映っている男、次元犯罪者の『ジェイル・スカリエッティ』が執務官の『ティーダ・ランスター』と一緒にいるからだ。

『ティーダ、この娘を連れて傷を癒そう。これは危険すぎる』

『ああ。ジェイル、転送頼んだ』

・・・どういうことだ？何故あの二人はあんなに親しげなのだ・・・？

そして、ツグネが病室のベッドで目を覚ますと、さっきの二人がいた。

『あ、起きたね』

ティーダが嬉しそうに言う。

『・・・ここは・・・？』

『ここは、ミッドチルダの病院。君はこの付近の森で瀕死の重症を負っていた。それを私達が助けたから、ここにいるんだ』

『・・・そう、ありがとう。それで、貴方達の名前は？』

『ああ。時空管理局、執務官のティーダ・ランスター』

『同じくジェイル・スカリエッティ』

・・・これでなぜこの二人が仲が良いのが判明された。

同僚だったのだ。そして、ジェイル・スカリエッティは元管理局の執務官。

『・・・衛宮 嗣音。助けに来てくれてありがとう』

『気にすることは無い。助けたかったから助けた。それだけだ』

『・・・ところで、ツグネは何故あそこに？』

ジェルが問う。彼女は少し困った顔をしながら、話した。

今までのことを、自分がしてきたことを。

『・・・そうか。だが、これだけは言っておく』

ジェルが真剣な顔をした。

『ツグネ、君は悪ではない。君は村人を救い、世界を救ったんだ。・
・確かに、悔やむのは分かる。ならば、それを踏み台に『そうならないよう』に努力するのはどうだ？』

『・・・どうすればいいの・・・？』

『俺（私）達と一緒に仕事しようぜ！（じゃないか）』

ティータ、ジェルが声を重ねて言った。

そして、彼女は時空管理局に入り、執務官となった。

彼女は休むことなく、己を鍛え上げた。さながら、一本の剣のように。皆を守る盾のように。

そして、彼女はクロノに引き抜かれ、クロノの部隊に配属された。ティータやジェルとも定期的に連絡を取り合い、そんな幸せがずっと続くと思われた。

だが、ある作戦でティータが殉職した。

彼は増援を求めたが、上層部の権力争いのせいで、死んだ。

嗣音はそれを聞きつけて、彼の墓標まで走った。そこで、聞いた。

『ふん。犯罪者をみすみす逃がしおって……管理局の恥さらしだな！』

自分達の権力争いで増援部隊を送らなかつたくせに、部下が死んだのを自分のせいではないと棚に上げて言った男がいた。

・・・殺す。だが、周りの元同僚が止めた。

『殴つてはいけない』

『殺しては駄目だ』

そういつていた。・・・なんで、なんで！こいつのせいでティータは死んだのに！

だから、殺意を押し殺して、一発だけ殴つた。

『誰のせいで、死んだと思っている！お前達のくだらない権力争いでティータは死んだんだ！！』

『き、貴様！！誰を殴つて（ゴキヤツ）グボツ！！』

私が殴つたことが火種に、周りの同僚が殴り始めた。

私は一人、墓標を見て座り込んでいた。

『ティー……ダ……ティーダあ……!』

涙がこぼれ始めた。ジェイルは私の肩に手を置いて慰めてくれた。

誓おう。

「この体は剣」

守りたい者のための剣となることを。

「この体は盾」

ティーダの夢でもある『皆の笑顔を守る』。それだけのために。

「この体は器」

人々の願いを、悪意を、全て受け入れる器となろう。

「その願い、聞き届けよう」

天から、声が聞こえた。

瞬間、墓地から黄金の草原へと変わる。
誰もが心奪われるほど美しい丘の上に。

「そなたの『救いたい』という願い、確かに聞き届けた。我ら星々は、そなたに力を授けよう」

「・・・だが、一番救わなければいけなかった、そなたを救えなかった我らの不甲斐なさを、許してくれ」

私は、力を手に入れた。守る為の力を。

だが、私は本当に救えているのだろうか・・・？

自己満足なのではないか・・・？

・・・ならせめて、

皆が望むのならば、私は常世全ての善となり、
皆が望むのならば、私は常世全ての悪となる。

今にも折れて、泣きそうで、助けてと悲鳴を上げている自分の心に蓋をして。

ただ、ただ純粹に世界の皆が笑顔で、幸せに、それだけを願って、
私はこの人生を捧げよう。
それが、私があの人たちに来ることであり、父親との約束を
守り、正義の味方となるんだ。

第二十話 『彼女の行方』 (前書き)

聖書では、

「自分が望むことを相手にもしなさい」
と書いてある。

私が望むこと・・・

『皆の笑顔を守りたい』・・・ただそれだけだ。

いや、もしかすると、

『私も幸せになりたい』

の裏返しなのだろうか？

第二十話 『彼女の行方』

「・・・知らない天井だ」

いや、マジで分からない。どこだ？ここ・・・なんか凄い量の花やお菓子が置いてあるし・・・

「・・・あれ？何時の間にベッドに入ったのかな・・・？」

整理しよう。私はさっきまで親父が持っていたエミヤの魔術に関する資料をみて、新たに魔術を覚えようとしていた。

そこにティアナとスバルがやってきてそこから・・・そこから・・・

「・・・思い出せない・・・なんか体も重いし・・・風邪？いやいやいや、私は『人事部泣かせ』の異名を持つほど健康体で仕事が恋人のはずだ。疲れて寝る、というのは仕事が全て片付いてからだし・・・」

『何一人でブツブツ言っているのですか？マスター』

「あ、フェイル。あのさ、ここどこ？」

『ここは医務室ですよ、マスター』

「・・・は？何故そんなところに・・・」

まるで記憶がない。医務室に送られるようなことはしていないはずだ。

『覚えていらつしやらないのですか？二日前に疲れと精神磨耗による過呼吸で、マスターは倒れたんです』

「・・・え？倒れた？私が？」

『映像データがありますが、見ますか？』

「いや、いらぬ」

フェイルがこういうときに冗談や嘘は言わないのはよく分かっている。

でも・・・倒れるほどだったか？

『精神疲労や疲れ、というのは御自分では分からないものですよ、マスター』

「そんなもんか。・・・あのさ、この花やお菓子は一体・・・」

これだけ多いのははっきり言っておかしい。一体・・・

『人事部の皆様からです。マスターが倒れたと聞いて「あのツグネさんが倒れた！？明日は槍が降るんじゃないだろうな・・・？」と言っております』

「・・・まあ、そうだろうな」

『人事部泣かせ』の異名は伊達じゃないって事がまた証明された。ジエイルにまたからかわれてしまう・・・！！

「お見舞いのお返しをしないと。手作りのお菓子でいいかな」

『そうですね。クッキーがいいかと』

「オツケー。さて、早く出るか」

ベッドから起き上がり、自分の部屋に向かおうとしたとき、医務室のドアが開いた。

「・・・ツグネさん！！動いちゃ駄目です！！」「」

「うお！？・・・ってなのはにティアナにスバル・・・どうしてここにっ。」

「シグナムさんから『アイツは起きたらすぐ部屋を出ようとする。阻止するんだ』って」

「・・・読まれていたか・・・」

あの騎士、なかなか勘が鋭いじゃないか・・・！なのはに私の行動パターンを伝えるなんて・・・！これじゃあお菓子作りが出来ない・

「それに、シヤマル先生から後二日は安静にって言われてるんです！寝てください！」

「大丈夫だよスバル。これぐらいなんとも「いいから寝てろ（スパアアアアアーン！！）」」

あ、なんていい音が頭から・・・

「ひ、皮膚が・・・！裂かれるような痛みが・・・！」

「ふむ、もうそこまで動けるほど回復したか」

シグナムが私の背後でハリセンを振りぬいていた。
つて・・・！

「・・・シグナム（さん）！？何時の間に入ってたんだ（ですか）！？」「」

「ツグネが部屋から出ようとしたときだ」

「なんであの状態から入ってこれるんだよ！？どこの忍者ですか貴女は！？」

「忍者じゃない、騎士だ」

「そこは論点じゃねえよ！」

この騎士は侮れない・・・！ひよっとしたらアサシンより気配消す

のが上手いんじゃないか・・・？

「まあ、それは置いていて」

「置いとくなよ！」

「ツグネ、お前の過去を皆に見せた」

・・・は？

「わ、ワンモアプリーズ」

「なんだ、聞き取れなかったのか？お前の過去を皆に見せた」

「・・・ジーザス、神は死んだ・・・！」

「現実逃避をするな。それで、だ」

言葉を区切るシグナム。それを合図になのはたちが頭を下げた。

「「ごめんなさい！私達、何も知らずにあんな酷いことを・・・

！」「

「・・・ああ、なるほど。謝罪より、大丈夫か？アレを見て大丈夫だったか・・・？」

謝罪より、あの大火災を見たことのほうが心配だ。

心は折れてないか？挫折しそうではないか？

そんなことしか私の頭は考えてなかった。

「・・・正直に言うと、あの火災はもう二度と見たくありません・・・

。。でも、ツグネさんは生き残ってしまったなんて考えなくていいんですよ・・・？」

「・・・なるほど。そこまで分かったのか」

「どうして自分を犠牲にしてまで他の人を助けようとするんですか・・・？」

「・・・私の親父を見たかな？」

「はい。キリツグさんですよね？」

「うん。私はあのときに親父に救われたんだ。そのときの嬉しそうな笑顔が、とても綺麗で・・・そして、親父の正義の味方っていう夢がとても美しくて、憧れたんだ」

そう、忘れもしない。あのときの笑顔はとても幸せそうだった。そして、あの月明かりの夜に親父の夢を継いだ。

美しく、飽くことなくあがき続け、皆にあの笑顔をさせるといふ夢に、憧れた。

「・・・ただ、私はあの時、逆の立場になったがね」

「吸血鬼・・・ですか？」

「・・・ああ。あの時、私は村人を救える手段があった。だが、殺してしまった・・・！殺すことで救われるなんて思いたくなくかつた！守るために正義の味方になったのに、殺してしまった・・・！守るべき人を・・・！！！」

「・・・それでも！！！」

大声で、なのはが叫んだ。

「貴女は、あの村人達が人間のままでという願いを叶えたんでしょ！人を襲う化け物になりたくないという願いを・・・貴女は・・・！」

「・・・でもね、救えたんだ。守る力はあつたんだ。それを殺す力に使ってしまったのは・・・悪なんだよ」

「・・・！！それでも・・・！貴女は村人の思いを守つたんです！それを過ちなんで言わせない！」

「・・・ツグネ」

「シグナム・・・？」

「お前に、お前に罪はない。お前は世界を守ったんだ。あの村人達も、それを望んでお前に託したんだ。世界を、笑顔を守ってくれると信じて」

「そう・・・だといいな・・・」

あれ・・・？

体が揺れる。視界が霞む・・・
フェイルの言っていた通り、今まで溜まった疲労のせいで体が悲鳴を上げている・・・。

だけど、まだ倒れるわけには行かない。ここで倒れたら、また心配をかける、かけてしまう・・・

「・・・皆、ありがとね。あと、・・・ちょっと疲れたから、もう少し・・・眠・・・る」

体が言うことをきかない。もうちょっとだけ・・・あと少し・・・もってくれ・・・

「・・・分かった。いくぞ、三人とも」

「あ・・・」

シグナムが三人を出してくれた。

・・・助かった・・・また、心配をかけてしまつところだった。フラフラしながら、ベッドまでたどり着いた。

「・・・」

そして、私はまた意識を手放した。

第二十一話 『もう一人の正義の味方』 (前書き)

私の心は変わる。

人の願いによってその風景をころころと変える。

だが、これが変わらなくなったとき、

私は全てを失い、手に入れるのだろう。

第二十一話 『もう一人の正義の味方』

・・・また目が覚めた。

そして、誰かがいる事に気づいた。

だが、私の病室にいたのは、シグナムやなのはやティアナ達じゃなかった。

「・・・何故ここにいる？アーチャー」

「なに、呼ばれてきてみれば君が倒れているのでな。これは好機と思っただけだ」

そこには、私が目標にした男が立っていた。

・・・なぜか果物ナイフで林檎をむいて。

「嘘をつくな。林檎をむいている奴が私を殺すと思えないぞ？」

「林檎がいい具合に熟していてな。好機だと思っただよ」

「・・・あつそう。で？貴方も私を殺しに来たの？」

「・・・契約上は、な。だが、先に一つ聞きたい。あの村人、君が殺したのか？」

「・・・ああ。殺した」

「何故だ」

「・・・あの村は、死徒に襲われていた」

「！・・・そうだったのか」

「そして、村人に頼まれたよ・・・『人のまま、他人の生き血を啜る化け物になる前に殺してくれ』って」

「・・・嗣音」

「あはは・・・バカだよ・・・救えたはずの命を守るのが正義の味方なのに・・・その命を自らの手で殺すなんて」

「・・・もついい」

「ずっと、守りたいと思ってたのに……殺すことでしか救えないな」「もういい……!」「……!」

アーチャーが、私を抱きしめた。力強く、守るように、温かく包み込むように……

「もう……いい……!君は間違っただけだ。君は、彼等の願いを、人としての思いを守ったんだ。君に、他の人が幸せに笑ってくれる世界を守ってくれると信じて、君に全てを託したんだ。だから……一人で抱え込むな」

「アー……チャー……、アーチャー……!」

涙がこぼれた。今まで溜め込んでいたものが全て流れ出るくらいまで、泣いた。

子供のように、ただ、泣いた。

「……ありがとう、アーチャー……」

「ああ……それでだが、私は確かにアンリマユに召喚された。

だが、私はお前を守る。たとえ、何が来ようとも、守り抜くと誓おう」

「アーチャー……」

「だから嗣音、『契約破り』を」

「……ああ。投影ロード開始オン」

契約破り。それはあの『裏切りの魔女』が持つ短剣。それをイメージする。

「『破戒ルールブレイカーすべき全ての符』」

歪な形の短剣が私の右手に現れ、それを、アーチャーの胸に軽く突き刺した。

突如、紫色の光があふれ出す。

「・・・よし。確かにアンリマユとのつながりは切れた。では嗣音、契約を」

「うん。・・・ 告げる！」

汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に！ 聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら ”

「 我に従え！ ならばこの命運、汝が剣に預けよう……！」
「アーチャーの名に懸け誓いを受ける！ 君を我が主と認めよう！」

ここに、契約が完了した。

私の右手の甲から肘にかけて、十字架を二つ重ねたような模様が現れた。

令呪。それはマスターがサーヴァントに対し三回だけ使える絶対命令権。これを使うと、魔法のようなことも可能とする。

例えば、『遠く離れた場所から一瞬でサーヴァントを自分の下に移動させる』等だ。

「・・・ふう」

「お疲れだな、嗣音」

「うん。・・・あのさ、アーチャーの真名って何？」

「・・・君は想像できているだろう？」

変な間が空く。私は確かに、このアーチャーの真名だと思われるものは想像ついている。

いや、『姉』として言うなら確実だ。

「……シロウ？」

「正解だマスター。そういえば何時ごろから分かっていたのだ？」

何時ごろ……ねえ……

「出会ったときから。確証はなかったけど」

「何！？……どうして分かった……？」

「……だって、私が大事な弟を間違えるわけないでしょ。見た目が変わると、絶対に間違えない」

「そうか……ククツ、いい事を聞いた」

アーチャーは嬉しそうに笑った。いつもの乾いた笑いじゃなく、本当に嬉しそうに。

「ちょっと疲れたな……まだ完全に体調が戻りきっていないとは……」

「契約にも魔力を使う。ゆっくり休め」

「うん……お休み、シロウ」

私は眠りに落ちた。だけど、そのときに聞こえたアーチャーの声は頭の中で響いていた。

「……お休み、姉さん」

第二十一話『もう一人の正義の味方』（後書き）

破戒すべき全ての符 ルルブレイカー

ランク：C

種別：対魔術宝具

レンジ：1

最大補足：1人

魔術効果の一切を初期化する短剣。

キャスターの「裏切りの魔女」としての伝説の象徴が具現化した最強の対魔術宝具。しかし、どれほど低いランクであっても宝具の初期化は出来ない。尚、物理的な殺傷力は普通のナイフと同じ程度。

第二十二話 『この世全ての悪』 (前書き)

人は求める。

全てを救う正義の味方を。

人は求める

全てを背負う悪を。

人は望む。

どうか、どうか私達の全ての苦しみを背負ってくれと。

第二十二話 『この世全ての悪』

「嗣音、そろそろ目を覚ませ」

「……ん……？ああ、シロウ、おはよう」

体を軽くゆすぶられ、懐かしい声を聞き目を覚ました。本当に、懐かしい私の弟の声。少し渋いが。

「ああ、おはよう。さて、朝食だが何がいい？」

「ん……和食。いや……洋食で。シロウがどこまで成長したか見てみたい」

「了解だ。自慢の一品を出してみせよう」

そういつと、病室を出て食堂へと向かっていくシロウ。……楽しみだ。

……あれ？皆にシロウのこと説明したっけ……？

『あ、貴方は誰ですか！？』

『曲者！！』

『な、なんでさー！！』

……あ、しまった。遅かった。

そして、凄い音と共に病室のドアが開いた。

「……ツグネ（さん）！！誰ですか！？あの人！！」

「あ、うん。私の……サーヴァント」

「……何だと？」

「弟のシロウというものだ」

「……貴様……どういつつもりでここに潜入した？理由によつては……」

「ああ。彼女にあの事件の説明をして欲しくてね。そして、私は嗣音を守るものだ」

「な……に？」

「過去の私は知らぬが私は姉さんが何の理由もなく大量殺人あんなことをするわけがない。そんなことはわかりきっている。だから、その理由が知りたかった」

「……そうか。理解したのか？」

「ああ。しつかりと、そして、それが正しいことを理解した」

「……それならいい」

シグナムとシロウの問答が終わる。……とりあえず、一段落着いたかな？

「さて、ツグネ」

「ん？」

「この大馬鹿者が（スパアアアアアン！！）」

あ、なんか既視感。

「ひ、皮膚が……！裂けるような痛みが……！！」

「先に報告せんか、馬鹿者」

り、理不尽だ……！！

「とりあえず、オレは洋食を作ってくるよ」

あ、シロウ逃げるな！！

「……さて、ツグネ。お前に悪い情報だ」

「……なに？」

「二日前、ジェイル・スカリエツティが最高評議委員会を潰した」
「!?!」

あの……バカ……!

それは私の仕事だろうが……!

「そして、『ゆりかご』が今空中に漂っている」

「……聖王の……」

「ああ。そこに、更に謎の魔力反応が確認された」

謎の……?まさか……

「そしてそれは、ジェイルたちの精神をのっとり、『この世全ての悪』と名乗った」

「……ついに……来たか……」

……これが、私の最後の闘いとなるだろう。命を懸けて、世界を駆けて、私は

「……言っておくが、一人で背負うなよ。今回、クロノ提督も出る」

「そうか。わかつ（ドクン!）……あ？」

胸が脈打つ。そして、悪意が私の魔力を犯し始める。

「ま……ず……!回路^{マジックサーキョウ}切断!?!」

シロウとのパスを強制的に切った。これでシロウは汚染されずにす

む。

だが・・・私の体がものすごいスピードで悪意に犯されていく。そして、体に何度も激痛が走る。

「ぐううう!!」

「ツグネ!? どうした、何が・・・!?」

私の目が、右目は紅色、左目は金色に変化する。

「・・・イシキガ・・・トブ・・・アクイニ・・・ノマレル・・・!!」

「ツグネ!!」

シグナムの声が聞こえる。・・・皆は・・・傷つけさせない・・・! ここでのマレルワケニハイカナイ・・・!

「嗣音! 何が・・・! まさか・・・アンリマユか・・・!!」

「シ・・・ロウ・・・」

「姉さん! 待つてる! 今契約破りを・・・!」

「ダメダ・・・! シロウ、皆ヲ・・・頼ンダ・・・!

・フェイル!!」

『了解。空間転移開始します』

『座標・・・ゆりかご・・・!!』

『・・・座標設定完了。飛びます』

「待て! 姉さん!! 待ってくれ!!」

シロウの・・・泣キソウナ声ガ聞コエル・・・

「ゴメン……ネ、皆……シロ……ウ」

第二十三話『救うべきもの』(前書き)

・・・彼女の命は美しい。

彼女の魂は美しい。

彼女の器は美しい。

彼女に勝るモノは無い。

だから、俺が頂く。

その悪意にまみれた顔を見るときが楽しみだ。

「ウルサイ!!!ドケ!!!」

黒い魔力が奔放する。体の中で暴れまわる。
敵を殺せと命令してくる。
目の前の敵を殺せと。

「……仕方ありません。貴女には理由を聞かなければいけないんです。貴女の腕と足の骨を全て砕いて連れ帰ります」
「……そうか。なら死ネ」

ライダーに投影した何十本という剣が襲いかかる。ライダーは全てを防いだ。

「……嗣音、どうして貴女は「五月蠅い」と言っている!!!聞こえんのか!!!」……嗣音

「今、このゆりかごにある悪意を全て私が手に入れる!皆を救うためなら私は、過去の同胞であろうと容赦はしない!」
「!!!」

いままで、嗣音はそんなことをいったことが無かった。どんなときでも、皆を守ると、笑顔を守るといつていた嗣音とは考えられない。どんな理由があろうとも、殺しはしなれないと思っていた。だけど、あの事件から嗣音は変わってしまった。そう思うほどに、嗣音は悪意に飲まれている。

「ランスロットが見たら泣きますよ……?」

「ソレガドウシタ?私はどうせ皆から疎まれている。それこそイマゴロだろ?」

「……!!!嗣音……!士郎が泣いているのもわからないんですか!?!」

またそれか・・・

「それがどうかしたか？急いでるんだ。理由はお前の好きなように考えとけ」

「・・・そうかよ。坊主はどうする気だ？」

「お前等に任せる。モウ二度と会うことは無い」

「・・・どう言うことだ？」

「そのままの意味だ。私は器なんてな。ここにある悪意を全て背負って死ぬのさ」

「・・・なんで、そんなことをする」

「救いたいからだよ。この世界の皆を、友達を」

「悪に魂を売ったテメエがか？」

「ああ。悪になった私という命を代価に世界が救われる。どうだ？安い買い物じゃないか。天秤にかけることでもない」

「・・・させねえ」

「あ？」

「させねえって言うてんだよ！！お前を死なせるわけにはいかねえんだ！死なせたくなえんだよ！！」

「・・・これは世界の決定事項だ。そして、人々の望みだ。私がアンリマユになる。私は皆が望む正義となり、皆が望む悪となり、世界を救う。」

「させねえんだよ・・・！俺だつてなあ、お前を守りてえんだよ！！」

「・・・そう、ならシロウを・・・私の、命よりも大切な弟を・・・頼みます。『ルールブレイカー破戒すべき全ての符』」

「そんなこと聞けるわけ（トスツ）ツグ・・・ネ・・・！！まって・・・くれ・・・！！」

「・・・頼んだよ？ランサー」

気を抜いたところで刺す。こうしなければ戦闘は避けられない。

・・・そう、モウ私は見守るしか出来ない。だから・・・頼んだ。
私は死ぬ。たぶん、世界を守って。だから・・・

進むしかないんだ。この道を。世界を救う道を。

親友を、友人を、家族を守るためには・・・これしかないんだ・・・

そして、次の部屋の扉を開いた。

「・・・待っていましたよ、ツグネ」

「・・・なんだ、ランスロットか」

そこには、私にとって最強さいあいのひとの敵が立ち塞がった。

「貴女を死なせません。だから、ここで引き下がってください」

第二十四話『憎しみの矛先』（前書き）

ついに、ついについについについについについについについについに……！

彼女の堕ちた姿が見れる！！

ああ、その美しい剣が折れる瞬間を

その美しい盾が崩れる瞬間を

その美しい杯コップが穢こぼれていく瞬間を

ついに見る事が出来る！！

これほどの幸福はない

これほどに嬉しいと思っただことはない！！

さあ、その男を倒し、悪意にまみれた顔を俺に見せてくれ！！

第二十四話 『憎しみの矛先』

・・・サー・ランスロット。かの『アーサー王』こと土郎のサーヴァント、セイバーも認めた完璧なる騎士。そして・・・私のサーヴァントであり、この生きている世界で最も愛している人。

無論、彼には愛する女性がいた。そう、『アーサー王物語』の中では。

このランスロットには、それがいない。つまり、同じ騎士でも平行世界のランスロットだ。

ただ最高の騎士の誉れだけを胸に宿し、王のために戦場を駆けた、一人の男だった。

そして、その男が立ち塞がっている。

「・・・嗣音。貴女を通すわけにはいきません」

「・・・どきなさい、ランスロット。これは命令です」

「従えません。貴女を、死なせたくない」

「・・・いいから、どきなさい。再度言います、これは命令です」

「・・・従えません!!」

・・・ああ、なんでわかってくれない・・・!これが親友を、周りの皆を・・・救える唯一の方法だというのに。

「お願い・・・どいて。私は・・・それを浄化する義務があるの」

「・・・どんな理由だとしても・・・ここを通したくありません・・・

」

「ランスロット・・・時間が・・・無いの。最後の通告です、そこを、どきなさい。サー・ランスロット・・・!」

「嫌だ!!貴女を、貴女が死んでしまおうとわかっていて・・・それを見てみぬ振りなどしたくない!!」

・・・ならば・・・仕方が無い。

「・・・ならば、力づくでどかせるまで」

「嗣音・・・!!」

・・・わかっている。彼が私を行かせたくないことぐらい、わかっている。

本当なら、私だって・・・彼と死ぬまで一緒にいたい。

・・・だけど、あの村人は私に世界を託した。彼等が命を賭してでも守ろうとした世界を。

それが平行世界だろうがなんだろうが変わらない。

親友が今救いを待ってるんだ。

皆が救いを待ってるんだ。

正義の味方が、ここで世界を助けなくてどうする!!

「ランスロット、時間はかけていられない。最初から貴方を殺すつもりでいく」

「嗣・・・音・・・」

私が挑むはこの世で最強の騎士。

・・・私は星の作りし剣として、この騎士を打ち倒そう。

「・・・祈れ。さすれば与えん。

・・・願え。さすれば与えん。」

詠唱を開始する。私の心に語りかけるように、心を言葉にするように。
あれと同じ世界こそが、私の心象風景。私の唯一の最高到達地点。
それを世界に展開する。

「……何を願う？ 守る力。」

「……何を祈る？ 人々の幸せ。」

心に映すはあのとときの火災。守れなかった自分を悔やみ、嘆いたあの瞬間。そして、心に刻み込んだ想いを言葉にする。

182

「……この体は剣、この体は盾、この体は器」

「……私は常に独り。世界の中心で祈り続ける。」

星の丘で祈り、誓った。全てを守る剣となり、盾となり、全てを包み込める器になることを。

丘の上でただ一人、そのためだけに私は存在する。

「……皆が望むのならば、私は常世全ての善となるう
……皆が望むのならば、私は常世全ての悪となるう」

人の望みこそが私の生きる理由。正義の味方ならば、世界を守り、
悪の味方ならば、全ての悪意を背負って死のう。

「……ならば、私の生に意味をなくし、」

私は、自分のために生きるのをやめた。泣き叫ぶ心に蓋をし、私欲
を殺した。

生きている意味など……捨て去った。

「……『エターナル・オブ・ワールド星降る黄金の草原』で、私は笑顔を守り続ける」

詠唱が、完成した。

私の体を、黄金の光が包み始める。

そして、光は私を中心に広がっていき、次の部屋をも飲み込み、世
界を塗り替えた。

全てがあり、全てが無い黄金の草原へと世界が変わった。

「これが……嗣音の心……」

「……さあ、始めようかランスロット。観客はただ一人のみ」

「観客・・・？」

「そら、お前の後ろだ」

「！！！」

黒い人型の何かがそこにいた。

しかし、それは苦しんでいるように見えた。

『き、貴様・・・！何をした・・・！！』

言葉のようなものを発するアンリマユ。

「この世界は星の世界とつながっている。つまり、お前の悪意を全て浄化する。私の世界と引き換えに」

『貴様・・・！そんなことをすれば器であるお前ごと・・・！！』

「ああ、死ぬだろうな。で？それがどうした？」

『狂ってやがる・・・！！』

「さあ、あと少しだ。この世界はもうすぐ夜となる」

ファイナル
終焉まで、あと少し

第二十五話 『星降る丘に捧ぐ鎮魂歌（レクイエム）』（前書き）

彼女は折れなかった。

彼女は崩れなかった。

彼女は穢れなかった。

・・・なぜ？なぜ堕ちない・・・！

そうすれば・・・星の呪縛から解き放てるのに・・・！！

なぜわからない・・・！お前が進む先には絶望しかないというのに・

・・・！

なんで、わかってくれない・・・！！

第二十五話 『星降る丘に捧ぐ鎮魂歌（レクイエム）』

「……さあ、始めよう最強の騎士よ。日が傾き月が姿を見せる前に」

嗣音の目は、戦意を無くしていない。彼女が倒れれば、この世界を消すことが出来る。

そうすれば……きつと彼女は死なずにすむ。

『ランスロット！アイツを倒せ！！』

「……御意」

『この世全ての悪』に従うのも癪だが、嗣音を救うためだ。

『まずい……力を全て奪われる前に……！』

アンリマユが何かをし始めた。それが何かに嗣音は気づき、こちらに向かい走り出してくる。

「させるかああああ！！」

右手に投影した『絶世の名剣』デュランタルを振り下ろしてくるが、それを私の持つ剣で止めた。

キーンという金属同士がぶつかり合う音が丘に響き渡る。

『時間を稼げランスロット！』

「……ああ」

「くそっ！ランスロット！どけ！！」

「……従えない」

アンリマユは安心したかのように何かを呟き続ける。

嗣音はその呟きを止めようと剣に力を込めるが、私はつばぜり合いを続けている剣を嗣音の体ごと弾き飛ばした。

徐々に、太陽が傾き、彼女の背中から美しい星が見え始めた。

時間が無い……！早く気絶させなければ……！

『よくやったランスロット。これで、アイツを倒すことができる』
「な……に……!？」

背後から強烈な魔力を感じ取り、振り向くと、そこには魔法陣が書かれていた。

そして、その中心には

「……ここは……?」

私が生前仕えていた王の姿があった。

「あ……ア・サー王……」

「ランスロット!? 貴方、今までどこに!？」

「……その話は後でいたします。それより……」

嗣音のいるほうを向いた。そこで見た彼女は……

胸を押さえ、蹲り、悲鳴を上げていた。

「嗣音!！」

「なっ……なぜここに彼女がいる!！」
『……ツチ、始まったか』

アンリマユが舌打ちをし呟いた。

始まった?何が……?

「貴様、答える。さもなくば殺す」

『おおっと、コワイコワイ。始まったのは、浄化だ』
「浄化……?」

『ああ。俺から奪った悪意のな』

「ま、待ちなさい!ランスロット!先に嗣音が村人を殺したかの説明を……」
『ああ、それが』
「知ってるも何も、アイツはそれのせいでこんなことしてるんだ。」

わかるに決まってるんだろ』

「どういうことだ……!」

王がからかわれていると判断したのか、言葉に怒気が籠もる。

『あ?知らない?マジで?……ククッ、こいつは傑作だ』

『……どういう意味だ』
『だってよお、お前等、何も知らないであの女を死ぬ寸前にまで追い込んだんだろう?』

「なっ!!!王よ!どういことですか!!!」

「・・・彼女は、ある村の人間を全て殺したのだ。依頼でな」

「そ・・・そんな・・・馬鹿な・・・！！嗣音がそんなことするわけが無い・・・！！！」

「彼女は言った。『私が殺した』と。彼女が村に火をつけているのも見た」

嗣音が・・・村人を殺した？

人が死ぬのをあれだけ嫌う彼女が？

皆の笑顔を守るために戦った彼女が？

『・・・なるほど、そこから誤解が生まれているのか。こいつは・・・本当に喜劇・・・いや、彼女にしたら悲劇・・・か？』

「どういう意味だ、貴様」

『清廉潔白なアーサー王様、本当の本当に、彼女が何のためらいもなく『依頼』という理由で何の罪も無い村人全員を殺したと思ってるのか？』

「な・・・に・・・？」

『だってよお、アイツはこの『この世全ての悪』を救うって考えで動いてるみたいだからさあ？その言葉は信用できないのさ』

「この世全ての悪を・・・救う？」

『ああ。あの女は今も激痛に耐えながら、この世界に悪意が溜まるのを待って、俺の持つ悪意を全て浄化しようとしてるのさ』

「なぜ貴様はそんなことがわかる」

『あいつの中に俺の悪意が入り込んでるんだぜ？いわば感覚共有どころか心伝心だってできるっつうの』

「もういい、黙れ・・・！」

もう・・・嫌だ・・・！

なぜ彼女がこんな苦しみを背負っている・・・！

なぜ彼女は恨まれている・・・！
あのときから、いったいなにがあったというだ・・・！

「・・・ああ、そうだ。もういい。サー・ランスロット」

痛みを堪えるかのように、押し殺した声が聞こえてきた。
振り向いた瞬間に、黄金の目が見え、胸に何かが浅く突き刺さる痛みが走った。

「嗣・・・音・・・？」

「・・・さようなら・・・私の愛した従者」

突き刺さったナイフのようなものから、紫色の光が溢れる。
そして、私にもたれかかるかのようにツグネがナイフを持って、私を刺していた。

「まさか『契約破り』・・・！」

王が驚愕した声で、私達を見る。

「嗣音・・・待ってくれ・・・！私は・・・君を・・・！貴女を・・・！！！」

「・・・ゴメンね、ランスロット・・・愛してる・・・けど、さよ

うならだ」

「待つて……く……れ……!」

私は、保たなければいけなかった意識を、闇に落としてしまった。

ランスロットside 終了

嗣音side

「……さようなら、ランスロット」

ランスロットが消えた。その瞬間、夜空に月が輝き始めた。

「嗣音……貴女は『黙れ』……貴様に指図されるいわれは無い
!!!」

『黙れよ、勘違いの王様。今からこいつが何をするか、それを見て
あの勘違いヤロー共に伝えるんだ』

「な……何を言うか!!」

セイバーが激怒したように言葉を荒げる。

しかし、今はどうでもいい。

「……アンリマユ」

『……お前……今ならまだ間に合う、やめる』

「そんなことをしたら……お前が、救われないだろう……?」

『だが、確実に死ぬぜ?お前』

「それでも……なぜわからない……!お前が進む先には絶望
しかないというのに……!なんで、わかってくれない……!!」

「アンリ……?」

『……お前が背負う必要がねえじゃねえか……!なんでお前は・

・ ・ ・自分をそんなにも傷つけられる！！どうして誰も恨まない！！
何でお前は・・・泣き叫ぶ心に蓋をする・・・！なんでお前は、死
にかけても笑顔を守ろうとするんだよ！？」
『いいじゃねえか！自分の幸せを望んだって！何も悪いことは無い
！！それこそ、あの騎士と幸せに生きていけばいい！！悪意が溜ま
るうが、俺が生きている限り悪意は漏れ出さないようにすることを
保障する！だから、死のうとなんてしてんじゃねえよ！！』
「ああ、でもな、私は・・・」

お前にも・・・幸せになつて欲しいんだ」

だから、止まらない。

泣いているこの男を救うために、私はここにいる。

彼は、泣いていた。自分が村の人間に意味も無く、ただ『悪であれ』という願いのためだけに殺されたことを恨み続けた。

だが、彼の姉は唯一弟を愛し、共に死ぬことを決意した。

それが、彼の何よりも悔やみ続けたこと。

彼を救う理由はこれだけで十分だ。

幸せになりたいと涙ながらに心の中で呟く少年を、救わずして何が正義の味方だ。

『聖王はどうする？この上の階で戦っているあいつ等を、どうやって救うつもりだ・・・？』

「・・・そこは、私の親友を信じるさ。・・・始めるか、術式、展開」

夜空に浮かぶ月を中心に、この世界の空を埋め尽くすほどの魔法陣が描かれる。

星の魔力が、私とアンリマユを包み始める。

「・・・セイバー」

「なんですか？嗣音……」

……これが、最後の言葉になる。

なんて言おうか……やっぱり、ランスロットへの言葉かな……？
考えるよりも先に、口が開き言葉を紡いでいた。

「……『頑張れ、そしてゴメン、先に逝くね』って士郎に」

……やっぱり、士郎のことを言っちゃったか……

はは、クロノのこと、シスコンなんて偉そうに言えないな。

「なにを……言っているのですか！！必ず戻ってきなさい！！そ
して……ランスロットに……！シロウに……！」

「……うまくいったら、ね」

体が徐々に月へと向かう。

「……術式、『キリエ・エレイン浄化する星々と命の光』……発動」

魔術式が発動した。その瞬間、まるで歌うような声が世界に響く。

そして、私という器は、『この世全ての悪』と共に星の光によって
この世から完全に消滅した。

第二十五話 『星降る丘に捧ぐ鎮魂歌（レクイエム）』 （後書き）

『術式「キリエ・エレイン浄化する星々と命の光」』

嗣音が編み出した、心象世界の月を中心に星を結び、固有結界ごと浄化する魔法の域に達する魔術。

『この世全ての悪』を浄化するためにのみ星の世界が作りだしたもので、それ以外にはあまり効果が無い。

だが、太陽が昇っているときに使くと、太陽を中心に目に見えない星を結び、星を墮とす魔法とかす。これは固有結界は消えることは無い。

第二十六話『ジェイルの願い』（前書き）

悪意の本流は消えた。

これで、彼女の役目は終わった。

第二十六話『ジェイルの願い』

ジェイルside

「……私は……？」

「目が、覚めましたか？」

目の前に、金髪の女性がいた。

「……ああ、フェイト君か。私は……何をしていた……？」

「……最高評議会を潰し、聖王を覚醒させました」

「……そうか」

「……すまない、ツグネ。君の望みはやはり叶え「アンリマユ」の
つとられていた貴方がね」……なに？

「今、なんと言った……？」

「アンリマユに乗っ取られていたのですよ、貴方たちは」

……マズイ!!

「フェイト君!!すぐにツグネと連絡を!!」

「えっ？」

「止めるんだ!彼女を!早く!!」

「は、はい!!」

フェイト君が通信をし始めた。
その間に、思い出される記憶。

私は・・・管理局に復讐を誓った。

娘達の解剖をたくらみ、ティータを殺し、ツグネを縛ったあの管理局に復讐しよう。

その思いに、何かが入ってきた。

『へえ、じゃあ俺が手伝ってやるよ』

そこから、私は狂ったように悪意に飲まれた。

管理局員を何人も殺した。

危険とわかっていたゆりかごを使用した。

それだけじゃない。私は多くの罪を重ねた。

特に、聖王、ヴィヴィオに無理やりレリックを入れたことが鮮明に思い出される。

『痛い、痛いよぉ・・・!』

何度もそう叫ぶヴィヴィオの言葉を無視して、聖王にした。

・・・私は・・・!

「ジエイルさん!」

「あ、ああ。どうだった!？」

記憶の海から引き戻される。

「駄目です・・・全く通信が入りません・・・!!」

・・・なん・・・だって・・・?

まさか・・・もう・・・発動したのか・・・?

「そんな……！ツグネ……！」

「ツグネさん、一体どうしたんですか！？」

……この子達には知らせていないのか。不安を与えないために……

「……彼女は……自分のことをなんていつているか知っているか？」

「……『剣であり、盾であり、器』だって……」

「では、何故そういう風に言うか知っているか？」

「いえ……シグナムに聞いてもわかりませんでした……」

……やはりか。

「それはな、彼女自身が笑顔を守るための『力』と『盾』であり、全てを包み込む『器』、という意味なんだ」

「……！それって……！」

「ああ、彼女は『この世全ての悪』を背負うつもりなんだ……！」

「そんな……！ツグネさんは、何も悪いことをしていないじゃないですか……！」

「それでも……守りたかったのだろう……。世界の皆を、泣いているアンリマユを」

彼女は、そういう奴だ……

「……もし、もしですよ……。？ツグネさんがアンリマユを背負ったとしたら、どうなるんですか……？」

「……彼女は、自分自身に『死』という形で浄化をするだろう」

「そんな……！」

「……アイツは、そういう奴だ……。似合いもしないのに悪ぶ

って、いい人過ぎて断れなくて、目の前で誰かが泣いていたら、自分のことを省みないで助けに行く・・・そんなやつだ」

「そんなの・・・ツグネさんが・・・報われないじゃないですか・・・！」

そのとうりだ。アイツは絶対に報われない道を歩んでいる。それでも・・・。

「それでも・・・あいつは言うんだろうな・・・『私は、自分の生きてきた道に後悔なんてしていない』と」

「・・・おかしいですよ・・・自分が一番傷ついて、泣いて、それでも・・・幸せだったなんて・・・」

「・・・だから、アイツが帰ってきたとき、思いっきり叱ってやってくれ」

「・・・何を言ってるんですか、貴方も一緒に怒ってもらわないといけないんですよ」

「は・・・？いや、しかしだね・・・」

「精神を乗っ取る魔法をかけられ、管理局崩壊をやらされた・・・そうでしょう？」

「・・・ククク、君達は、本当にツグネそっくりだ。では、私はゆりかご破壊し、ツグネの帰りを待つとしよう」

・・・ツグネ、生きて帰ってくるんだぞ・・・！

第二十七話『皆の願い』（前書き）

・・・そうか、私は・・・死ぬのか・・・

ならば、せめて最後に・・・皆に・・・伝えないと・・・

『あり

がよし』

第二十七話 『皆の願い』

なのは side

・・・ヴィヴィオを包んでいた黒い影のようなものが消えた。

「なのは、ママ……？」

「ヴィヴィオ!？」

喘ぐように、眼前で自分の魔力を受け止めている女性　なのは
を呼ぶ。

その声になのはが驚きの声を上げ、ヴィヴィオの所へと駆け寄る。

「駄目！　ママ、逃げて！」

瞬間、ヴィヴィオが鋭く叫ぶ。

その声になのはが驚き、再びレイジングハートを構えた途端、ヴィヴィオの魔力を乗せた拳が彼女を襲った。

襲ってきた拳を咄嗟にシールドで受け、衝撃で吹き飛ばされるなのは。

「……駄目、なの」

拳を振りぬいた格好で、小さく身体を震わせ、ヴィヴィオが呟く。
その言葉を呟いた途端に、ヴィヴィオの足元に灰色の空間が広がる。
それは瞬く間に玉座の間に広がり、その空間を灰色に染め上げていく。

「ヴィヴィオ……もう、帰れないの」

言葉を続ける彼女の頬を、涙が伝う。
その涙を見て、なのはが口を開く。だが、その口から言葉が放たれる事は無かった。
なのはが何かを言う前に、玉座の間に いや、揺り籠全体に警報のアラームと、緊急放送が鳴り響く。

『駆動炉破損 管理者不在 聖王陛下、戦意喪失。
これより、自動防衛モードに入ります』

「……っ!？」

・・・聖王の鎧・・・!

だけど、あきらめるわけには・・・いかないんだ・・・!
ツグネさんが、折れなかったように、私も折れるわけにはいかない
!!

なのはside終了

ヴィータside

「ちっ、次から次へと!アイゼン!!」

Gigantform.

いらつきながらヴィータはグラーファイゼンにカートリッジをロードしガジェット目掛けて振り下ろす。

「ギガントハンマー!!!うるあああぁっ!!!」

ヴィータがグラーファイゼンを遠心力を利用して振り回し、群がるガジェットを軒並み破壊していく。

ある程度一掃して、ヴィータは息を切らしながら悪態をつく。

「キリがねーな。・・・先に進めねーよ」

高濃度のAMFが充満するゆりかごの中では、ひとつの動作でも大変である。

そんな場所で大量のガジェットを処理していくのは並の魔力、体力、集中力では成しえない。

だから、ヴィータの注意力が散漫になる事は仕方のないことなのだ。

ふいに

ドンと

背中から何か当たったような感覚を覚えた。

なんだ？

そう思ったとき、急に吐き気を催した。

胃から込み上げる不快感。

ヴィータは自分のお腹を見た。

そこには、鋭利な刃物が腹から生えていた。

ヴィータは一瞬何かわからなかったが、即座に自分の置かれた状況

を把握し、持っていたグラブファイゼンを無理矢理背後に振り回した。

ドガンツと打撃の感触を確認すると、そこには新たなガジェットが大量にいた。

そして、そのガジェットを見てヴィータは顔を青ざめさせる。

いたのは忌まわしい『8年前の事件』に遭遇した『アンノウン』、ガジェットEIV型であった。

破壊されたガジェットは吹き飛び、ヴィータの腹に刺さっていた刃も無くなる。

そして強烈な吐き気が込み上げ、ヴィータはひざまづき、逆流してくるものを吐き出した。

赤黒い液体が床を汚す。

口から出てくるのは大量の血。

切られた腹からも夥しい血が流れる。

床は赤の面積をますます拡げていく。

滴り落ちる血液は止まることなく、ヴィータの体温を奪っていく。

ヴィータは意識が遠のいていくのを感じた。

ああ・・・やべーな、これ・・・

このまま死ぬのか・・・？

不意に、頭の中を赤い外套を着た女性がちらついた。

そして、その女性は言った。

『ありがとう』と。

・・・泣きそうな声で、嬉しそうな声で、震える声で、言った。
・・・あほか・・・

「折れるわけには・・・いかねんだよ・・・！だから、お前も諦めてんじゃねえよ・・・！」

あたしは、まだ戦える・・・！！

ヴィータ side 終了

なのは side

玉座の間に、桃色と虹色の光が奔り、轟音と共にぶつかり合う。
その衝突は1度ではなく、2度、3度と繰り返されながら、更に加速していく。

「くっ！！！」

「うっ！！！」

何回目かの衝突で、2つの光が一度距離を取る。

だが、それも一瞬の事。直後になのはとヴィヴィオは中空で距離を詰め、互いの魔力をぶつけ合う。

「「……っ！！！！」」

ぶつかり合う2つの魔力は、衝撃と火花を飛び散らせる。

凄まじい衝撃の中、なのはが涙を流すヴィヴィオへと叫ぶ。

「ヴィヴィオ！ 今、助けるから！」

けれど、ヴィヴィオは涙を流しながら首を振る。

「駄目なの！ 止められない……っ！！」
「駄目じゃ、ないっ！！」

そんなヴィヴィオの言葉を、大声で否定し返す。

なのはの声に呼応してレイジングハートから葉莢が吐き出され、宙に舞う。

途端に彼女の砲撃が威力を増し、拮抗していた虹色の魔力を吹き飛ばす。

「 ああっ！」

「！？」

だが、ヴィヴィオは止まらずになのはの後ろへと回り込む。

その気配を察したなのはが、咄嗟に身体を捻じらせて、振るわれた虹色の拳の一撃を避ける。

けれど拳の連撃は止まず、続く拳をなのははシールドで受け止めた。

「くっ……っうっ！」

「っ！ っっ！！」

拳は重く、鋭くなのはに襲い掛かる。

受け止めるシールドは決してもろい物ではなかったが、それさえも
撃目で碎かれ、なのはは床に叩きつけられた。

「もう……来ないで……」

床に叩きつけられたなのはを追い、ヴィヴィオも地面へと降り立つ。
そして頬を濡らす涙を拭おうともせず、拒絶の言葉を告げる。
対するなのはは、ダメージに震える膝に力を入れ、レイジングハー
トを支えに立ち上がり、彼女を見る。

「分かったの……私は、もうずっと昔の人のコピーで。
なのは……なのはさんも、フェイトさんも、本当のママじゃ、ない
んだよね」

訥々と、まるで自分に言い聞かせるようにヴィヴィオが語る。

「この舟を飛ばす為の、ただの鍵で……玉座を護る為の、生きてる
兵器」

「違つよ……」

涙を流す娘の言葉を、否定する。

けれど、ヴィヴィオの口から漏れる否定は止まらない。

「本当のママなんて……元からないの。護ってくれて、魔法のデ

「夕収集をさせてくれる人を、探してただけ」

「違うよ!」

「違うないよっ!!!」

なのはの否定の声を、さらに大きな否定の声でヴィヴィオが遮る。

「優しいのも、痛いのも……全部偽者の、紛い物、つくりもの!私
は、この世界にいちやいけな子なんだよっ!!!」

「そんなことない!!」

否定する。そんなことは無い!!

あの、赤い背中が私達に教えてくれたんだ!!

『……生きている、それだけで、私達は幸せにもなれるんだ。機
械だろうと、何であろうと』

「そんなこと……ないよ。ヴィヴィオ」

「なのは……ママ……」

「だって、私は……ヴィヴィオがいてくれて、すっごく幸せだっ
た。お菓子を作ったり、遊んだり、とても楽しかったんだよ?」

「……」

「この時間を、作り物だなんて言わせない……!」

「私は、ヴィヴィオの本当のママじゃないけど……本当のママにな
れるように、努力するから」

言いながら、なのはが一步前に進む。

その歩みに怯えるように、ヴィヴィオは一步後ろに下がる。

また一步、足を進める。

つられるように、ヴィヴィオもまた一步下がる。

そんな彼女を見て、なのはが眉尻を下げた。

「だから　いちゃいけない子だなんて、言わないで」

悲痛な声で、懇願するように呟く。

優しく告げられた言葉が、ヴィヴィオの罅割れた心を埋めていく。

そして

「ヴィヴィオのホントの気持ち、ママに教えて？」

その言葉に、心の奥底に閉じ込めた気持ちが、溢れた。

「私は……なのはママの事も、機動六課の皆の事も、大好き……
！！ずっと、一緒にいたいよ……！」

涙で滲む視界の向こうに居る、愛しい母に、助けを求める。

「ママ……助けて……っ……！」

「……………助けるよ」

その声に力強く頷き、魔方陣を展開する。

溢れる魔力に反応して、ヴィヴィオの身体は彼女の意志とは関係なしに戦いの構えを取った。

けれど、なのはの決意は揺るがない。ツグネのように、折れない心を胸に宿し、不屈のツバサを広げる。

ヴィヴィオを　娘を助けると決めたから。

助けてと請われたから。

だから　。

「いつだって……………どんな時だって!!」

彼女は疾走る。

全速力で、持てる力の全てを使って。

ヴィヴィオの身体もそれに反応し、全く同じタイミングで駆け、なのは目掛けて拳を突き出す。

「ぐ……………うっ！」

「っっ!!」

その拳を、なのはは避ける事無く右手で受け止めた。

《 Restrict Lock . 》

驚きに目を開くヴィヴィオ。

その耳にレイジングハートの音声が聞こえ、同時に彼女の身体を無数の魔力の糸が縛りつける。

ヴィヴィオをバインドで拘束したことを確認し、なのはが空中に飛びレイジングハートの切っ先を構えた。狙うのは、桃色の魔力に縛られた、ヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ」

呼びかけるなのはの前と周辺4箇所に、魔力が集束していく。

それは彼女が使う最強にして最高の砲撃、スターライトブレイカー。ヴィヴィオが無意識に使ってしまう、最硬の防衛 『聖王の鎧』を貫く事のできる、唯一の魔法。

「ちょっとだけ、痛い我慢できる？」

撃とうとしている攻撃を前に怯えるヴィヴィオに向けて、彼女は優しく尋ねる。

尋ねられたヴィヴィオは、彼女の目を見て、安心したように小さく頷いた。

「……いい子」

頷くヴィヴィオに笑いかけから、なのはは表情を引き締める。

「防御を抜いて、魔力ダメージでノックダウン。いけるよね？」

《Clear to go.》

相棒から返ってきた力強い返答を聞き、なのはがレイジングハートを振り上げる。

「全力、全開!!」

狙いを定め、限界まで魔力を引き上げる。

桃色の魔力の塊が一際輝きを増し、凶悪な程に膨れ上がっていく。バインドに縛られたヴィヴィオはそれを見て、襲い来るだろう衝撃に目を瞑る。

「スターライト……」

そして、なのはは振り上げたレイジングハートを振り下ろし

「ブレイカーーーーーッッッ!!!」

玉座の間に五条の閃光が迸る。

それらは寸分違わずヴィヴィオへと到来し、
聖王の鎧さえ撃ち抜いて炸裂する。

かに思われた。

しかし、魔力が底をつきかけていたせいか、威力が少しだけ、たりない。

「後ちょっと……!もう少し……!」

ダメだ……!たりない……!誰でもいい……!私に、魔力を……!

『……がんばれ』

ツグネ……さん……?

そのこえが聞こえた瞬間、魔力に黄金の色が混じる。まるで、星の

光を宿したかのように、桃色の魔力に黄金の光が輝く。
そして、威力が上がった。

聖王の鎧を撃ち抜いて炸裂する。

その衝撃に苦しそうな悲鳴を上げるヴィヴィオの胸から、赤いレリックの結晶が浮かび上がった

「ブレイク……シューーートツッ!!」

更に魔力を集め、レリックを砕こうと持てる魔力の全てを砲撃に込めて撃ち出す。

反動の凄まじさにレイジングハートの本体に罅が入り、なのはの手から血が溢れる。

けれど、なのはは歯を食いしばって、砲撃の行方を見つめた。

「あ……あああああああつっつ!!!!」

浮かぶレリックに罅が入り、ヴィヴィオの悲鳴と共に砕け散る。

そして、全ての終結を告げるように、玉座の間に桃色と、黄金の光が爆発した。

……あのとき、ツグネさんの魔力が混じらなかったら、助けることが出来なかった。

そして、また声が聞こえた。

『ありがとう』

嬉しそうに、泣いてしまいそうな声が、聞こえた。

「ツグネさん……帰ってこなかったら、お話ですからね……」

彼女が帰ってくると、信じたい。

そして、「ゆりかご」は休眠モードに入り、この事件は、幕を閉じた。

だけど、ツグネさんだけ……帰ってくることは無かった。

第二十八話 『家族の願い』（前書き）

星が煌く黄金の草原を彼女は歩く。

太陽に向かって、月に向かって、星に向かって歩く。

彼女は一体どこを目指して歩いているのだろうか？

ただ、夢を忘れ去って、向かう場所を忘れてしまったのだろうか？

誰もいない、美しい草原にただ一人、

夢に向かって歩いているのだろうか

第二十八話 『家族の願い』

士郎 side

イリヤから、バーサーカーが帰ってきたと聞いたとき、とても安心した。

いきなり消えて、2日ほど戻ってこなかったそうだ。

「あのね、シロウ。バーサーカーが貴方に何か伝えたいみたいなんだけど、わからないの……」

そこから、俺たちのサーヴァントに異変が起き始めた。

次に、遠坂のアーチャーが消えた。

なぜかはわからない。だけど、バーサーカーと同じように一晩で消えたらしい。

「士郎……アーチャーが……いなくなった……」

声を震わせ、泣きそうな遠坂の声が忘れられない。

あの未来の自分^{アーチャー}は、どこに行ったのだろうか？

次の日、桜のライダーとバゼットのランサーが消えた。

二人が家にやってきて、桜は泣いていて、バゼットは落ち込んだ様子だった。

「先輩……ライダーが……」

「士郎君、ランサーが……」

サーヴァントが一晩にしていなくなる。それは俺たちの心に傷を負わせて行った。

そして、何日か過ぎると、ライダーが帰ってきた。
悲しそうな、不甲斐なさそうな顔をして。

「……シロウ、貴方達にお話が……」

「ライダー……?」

「……ツグネに……会いました」

『!?!』

姉さんに……会った……?

「どういうことだ……?ライダー……?」

「……すみません、シロウ……嗣音は……アンリマユに……
吞まれていました……!」

「なっ……!」

姉さんが……アンリマユに……?

「私は……助けられなかった……!苦しんでいる嗣音を……
救えなかった……!」

「……あの姉さんが……?」

あの姉さんが、あの事件を除いても悪意に吞まれるはずは無いと信じていた。

でも……

「……よう、坊主」

「ら、ランサー……!」

考え事をしてしていると、ランサーが急に現れた。嬉しそうなバゼットだが、それと対照にランサーは沈んだ面影だった。

「どこに行つてたんだ・・・？」

「・・・嗣音と会った」

「お前も・・・か・・・？」

「・・・ああ。それと、お前のことを頼まれたよ、あいつに」

「・・・どういうことだ？」

「言われたよ、『シロウを・・・私の、命よりも大切な弟を・・・頼みます』って・・・悪意に吞まれながら、俺と別れる前に、そう頼まれた」

「・・・土郎・・・あのさ・・・」

遠坂が、暗い表情で俺に話しかけてくる。

「もしかして・・・私達あの事件のこと・・・やっぱり勘違いしてるんじゃない・・・？」

「・・・」

「大師父が言つてたじゃない・・・『あれは仕方が無かつた』って・・・」

「仕方がなく人を殺していい理由にならないだろ・・・!!」

「でも先輩・・・嗣音さんですよ・・・？何か理由が・・・」

・・・わかつてる。姉さんはあの大火災から人が死ぬのを極端に嫌うことを。

わかつてる・・・けど・・・!

「坊主・・・それともう一つ。嗣音は、死ぬ」

「……え？」

今、ランサーはなんて言った……？

「……もう一度、言う。嗣音は……『死ぬ』」

「どういうことよー!!」

「……アンリマユを背負って……死ぬ」

「アレを……？いや、なんで……」

何故死ぬんだ……!?

「……多分、あの村人達への贖罪……だと」

ライダーが言った。……贖罪……だからって……!

「そういえば、セイバーさんがいませんね……」

まさか……!

「……士郎、気配を探りましたがセイバーはこの屋敷にはいません」

……今度はセイバーか……!!

一体、何が起こってるんだ……!!

その後、俺と遠坂はあの村を訪れ、何があつたかを調べた。そして、その村は『死徒』によって滅ぼされかけていたことが判明した。

「そんな……！じゃあ……俺は……！！」
「……そんな……先輩は……」

『ただ村人を助けただけ』……？
それに気づかず、俺は姉さんを……殺そうとした……？

「うああああああああああああああああああ！！」
何かが、崩れるような音がした。

数日して、セイバーは帰ってきた。そして、アーチャーも。
ただ、ランスロットがそこにはいた。

「……シロウ……ツグネが……死にました」
「な……！！！！」

セイバーが、姉さんの死を告げた。

「貴方に、伝言です。『頑張れ、そしてゴメン、先に逝くね』」
「う……ああああ……！！」

何で……なんで……！なんで生きて帰ってきてくれない……
！！

あのことを、謝ろうと思ったのに……！なんで……！！

「エミヤ……シロオオオオオオオ！！！！」

ランスロットが俺に掴み掛かってきた。

「なぜ、なぜ嗣音の痛み気づいてやれなかった！！なぜ、彼女が

人の死を極端に嫌うとわかっていて、殺そうとしたかを考えなかった！！お前のせいで・・・！！私の愛した彼女は・・・！！」

・・・そうだ、俺のせいで・・・姉さんは死んだんだ・・・！！
俺は・・・なんで今ものうのうと生きている・・・？

「・・・衛宮士郎」

「アー・・・チャー・・・？」

「・・・あの事件の全貌を話そう。全員を呼んで来い」

アーチャーの言葉により、居間に皆が集められた。
そして、アーチャーが、あの事件の真実を話した。

遠坂と桜は謝りながら泣いていた。『ごめんさい、ごめんさい』と

ライダーは唇から血が出るほどに強く噛んでいた。

バゼットとランサーは、申し訳がなさそうに下を向いている。

セイバーは、自分の不甲斐なさで犯した罪で顔が真っ青だった。

俺は・・・もうどうしていいかすらわからなくなった。

あの事件、確かに姉さんは・・・人を殺した。

だが、その殺した理由が・・・俺たちの心を完全に砕いた。

『人のままでいたいから。血を啜り喜ぶ化け物になりたくないから』
その理由で、村人達は姉さんに殺されることを望んだ。

姉さんは、何度も首を横に振ったんだろう。

『殺したくない』と、『助けることができるから』と。

それでも、村人は『死』という救いを求めた。

最後の最後で、姉さんは・・・その方法で、村人を救った。

・・・姉さんは、それが許させなかった。

だから、どんな理由があっても、あのとき『私が殺した』と言ったのだらう。

だけど・・・俺たちはそれに気づかずに・・・

「・・・俺は・・・俺は・・・」

殺そうとした・・・。大師父が止めてくれなければ、俺は・・・。

・・・頼む・・・姉さんに、たった一度でいい・・・会わせてくれ・・・！

謝らせてくれ・・・！！許されないことはわかってる・・・！！
けど・・・どうしても・・・言いたいんだ・・・！！

届くはずの無い願いを、願った。

そこは、何も無い空間。

「・・・二つの世界から、願いが届いた」

「ああ。わかっている」

「彼女を・・・」

「・・・ああ、我々は一番救わなければいけなかった者を殺した。

・・・だが、これだけの願いがあれば・・・」

「・・・あの『約束された勝利の剣』^{エクスカリバー}の時と同様に、奇跡を・・・」

「・・・彼女を、生き返らせることが出来る」

第二十九話『星の奇跡』（前書き）

・・・私は・・・何をしている・・・？

・・・わからない。

一歩歩くことに思う。

歩きたびに薄れてゆく記憶を必死につむいで思い出そうとするが・・・

何も、思い出せない・・・

この広い草原は・・・なんだ・・・？

なぜ、私は歩いている・・・？

・・・ああ、そうか。

思い出せない・・・けど、大事な人たちがいた。

その人たちのところに・・・行きたいんだ・・・

目の前を、謎の光が・・・私を包んだ・・・

第二十九話 『星の奇跡』

「……どこだ……？ここ……？」

「……空が……綺麗だ……」

それしかわからない。見渡す限り自然に囲まれた場所。野鳥が綺麗な声で鳴き、森の木は風で揺れて、太陽の光できらきらと輝いている。

「……てか、私……誰だ？」

「……まさかの記憶喪失ネタ？」

馬鹿な！！私は……そんなこと……してない……はずなんだけどなあ……」

「思い出せないのに自身持って『馬鹿な！！』っていった私凄くね？」

「……返事は無しか。あつたらこわ『何一人でしゃべってるんですか？マスター』……」

「……幻聴か」

『一人で完結しないでください』

「み、右腕がしゃべった！？」

『正確には、右腕についている腕輪ですけどね』

「……え？なに？腕輪がしゃべる？……なにそれ怖い」

『……仮にも相棒だった私にそれは酷いと思いますか……？』

「相棒？しゃべる腕輪と？……まっさかぁ。私の記憶が無いから

つて、そういう刷り込みはいけないぞ？」

『・・・記憶が・・・無い・・・？』

ん？意外なところで反応したな。

『・・・マスター、私の名前を言ってみてください』

「しゃべる腕輪ちゃん」

『・・・』

「・・・ごめん。ネーミングセンス無かったね」

『流石にそれは酷いです。機械の心が痛みました』

「ごめんよお・・・えつと・・・」

『・・・マスター、記憶喪失なんですか？』

「・・・えつと、たぶん？」

てか、自分の名前が思い出せない時点でそうだよね。

『マスター、魔力反応あります。三千メートル先から近づいてきます』

・・・何言ってるんだ？こいつ

「まりよく・・・反応・・・？」

『えつと・・・魔法の力を持った人が近づいてきます』

「いやいやいやいやいや！・・・魔法でアンタ、夢見すぎやで」

『なぜ関西弁・・・？じゃあ私がなんでしゃべれてるんですか？』

「え？精密に作られた機械じゃないの？」

『・・・あつてるところが説明しづらいです』

・・・なんか悔しそうだね。

つて、うおっ！？人が空飛んでる！？

「・・・最近の科学技術は凄いな・・・。ついに人が自由に空を飛べる時代になったか・・・」

『感動している場合じゃありませんよ・・・』

「え？まじで？」

『はい、マジです』

「その人、少しお話しいいですか？」

・・・え？私か？

にしても凄いね・・・人が空を飛んでくるなんて・・・えっと・・・この飛んできた人の特徴を見ていこう。

白い服に・・・栗色の髪をツインテールだっけ？・・・まあいいや。にした女性で

それと・・・なんか白い杖を持っています。はい。

「・・・コスプレイヤー？」

「『違います!!』」

「・・・つて・・・もしかして・・・!!」

「・・・？」

なんだかコスプレさんが驚いた顔してる。

・・・まさか・・・私の知り合い・・・？

このコスプレさんが・・・？

つてなんか涙目になってますよ？この人。

「まさか・・・」

・・・まさか・・・？

「っ「なのは〜いた〜？」」

空から今度は黒い服の上に白い服を羽織った金髪女性が現れた。空気読めや、またよくわからないコスプレさん二号。ってかこの栗色のコスプレ一号は「なのは」っていうのか・・・脳内メモメモっと。

「あ、フェイトちゃん。うんいたよ」

この金髪美人は「フェイト」っと・・・

「この人が・・・って・・・」

ん？この人も私を見るなり涙目かよ・・・まさか・・・私覚えてないときになにか悪いことでもしたのか！？

『・・・マスター・・・貴女が考えてることは違う気がします』
「何故わかるんだ？腕輪君」

まさか地の文も読め『読めませんよ』

「・・・読めてるじゃん」

『マスターが考えそうなことぐらいはわかります』

・・・この子侮れない・・・

「ツグネさん・・・!!」

「へ？ってうおお!？」

ちよ、いきなり抱きつかれたんだけど!？

何!?! 一体何が貴女達をそこまで駆り立てたの!?!

「心配したんですよ……！ゆりかごからいなくなつて……！！
ずつと探してもいなくて……！！！」

「そうですね……！私達がどれだけ心配したと思つてるんですか
……！」

「……ゆりかご？何だろう……なんか引つかかる。

「ゆりかご」……ねえ……

あれか？赤ん坊があやされるためにあるというあのゆりかごか？

……私は自分がわからない。

「とりあえず、皆に報告しに行きましょう！！！」

「行きますよ！！ツグネさん！！！」

「へ？いやちよつと……つて浮いてる！？私浮いてる！？？」

『……マスター、昔はあなたも空を飛んでいたのですよ？』

「そんな恩恵受けたこと無いわ！！つて早い早い！！もっとス
ピード落としてええええええ！！！」

……人は、空を飛べないはずなのに……なんでこんなに速く飛
べるのだろう……？

まあ、ショックが強すぎて、気絶しちゃいました！

・
・
・
根性無しなんていわせないよー!!

第三十話『・・・え？なにこれ？』

・・・さて、今の状況を説明しようか。

なんかよくわからない建物につれてこられたと思ったら、中にいた人が全員驚いて私に抱きついてきました。

・・・私はどこぞの教主様か・・・？

「・・・状況が・・・呑み込めん・・・」

『お疲れ様です、マスター』

「ツグネさ～～～～ん！！心配したんですよ～～～～！！！」

・・・ええい！離れる八チマキつ娘！

そんな力で抱きつかれたら色んな物が出てしまう！！

「・・・貴女、本当にツグネさん・・・？」

オレンジ髪のツインテールの女の子が疑わしげな表情をしてくる。

「ティア、どういうこと？」

「だって・・・ツグネさんはもともと黒い瞳だったのに・・・今は紅色と金色の瞳なのよ」

「え・・・？あ、ホントだ・・・」

・・・マジで？オッドアイだったか？私はそんな色の瞳をしているのか・・・

鏡が無いから知らなかった

「・・・てか、ツグネって誰よ？」

『!?!?』

「いやさあ?いきなりすぎて理解の範疇を超えてるんだけど・・・?」

「・・・ツグネさんじゃ・・・無い・・・?」

「いやいや、それより、ここどこよ?この腕輪君も良くわかんないし・・・えらく科学技術が発達してるのはわかるんだけど」

「・・・でも、腕輪はそつくりだよ?」

『・・・そりゃ同じデバイスですから』

「え!?!?フェイルさん!?!?」

・・・フェイル?えつと・・・この腕輪のことか?

「フェ・・・イル・・・?」

『はい、マスター』

「・・・もしかして、あの『アーサー王伝説』のトリスタンが使ったフェイルノートから?」

『はい。『無駄無しの弓』の名をマスターから授かりました』

「私って、歴史マニアだったのかな・・・?」

『ある意味近いですが違いますよ?』

「あ、あの・・・?」

「『何/何でしょうか?』」

今度はピンクの髪の毛のちっちゃい女の子か・・・ここは何でもありか?

「あなたは・・・誰なんでしょうか・・・?」

「そ、そうよ!なんでツグネさんと同じデバイスを持つてるのよ!」

「!」
・・・知らんがな!?!?てか『ツグネ』って人自体を知らない私に聞かれても・・・

『この人はツグネですよ、皆さん』

フェイルが代わりに説明してくれた……って、は？

「あの……私が何だつて？」

『あなたが今話題の『ツグネ』ですよ』

「……私って、ツグネって言う名前なんだ……。やっと『自分が何者か』がわかってくるな」

「……え？自分が何者か……？」

「あ、言っただけだったね。て言えなかったんだけどね？私、記憶喪失です」

……なんで皆黙り込むの？

ちよつとした沈黙の後、

『はあああああ！？』

皆の叫び声の大合唱を聞きました。

「……嘘……！」

「いや、嘘じゃないんだよね、これが」

「だって……そんな……！」

うわ、皆泣きそうだ……。てかすでに泣いてる人いるし……

「何たわけたことを言っている（スパアアアアアン！！）」

……あ、なんていい音が頭から

「ちよっ……！頭が……！皮膚が切り裂かれたような痛みが……！！」

「ふむ、この反応はやはりツグネだな」

後ろを見ると、ハリセンを持ったポニーテールの女性が立っていた。

「いきなり何するんですか！？危うく記憶が戻るどころか逆にまた失うところだったじゃないですか！！」

「……むう、このノリでやれば何かを思い出すと思ったのだが……」

「記憶を失う前の私は一体何をしていたんだ！？」

だめだ、もう私は私に分からない！！

赤ん坊の「ゆりかご」にいたり頭をハリセンで叩かれたり、私は一体何をしていたんだ！？

「……フエイル」

『はい、シグナムさん』

「お前の記録データを見せればいいのではないか？」

『……そうすれば、あのときに戻ってしまうのが嫌なのです』

「だが、このまま過ごさせる、というわけにもいくまい」

『そうですか……』

「……私の知らない話をしないでくれない？」

「記憶喪失者は黙ってる」

「扱い酷くね！？」

……なんか、懐かしい感じがするんだよな……この扱い……

でも、一番頭にちらつくのは……

「・・・あの赤い背中は・・・誰なんだろう・・・？それに・・・」

あの白い騎士は誰なんだろうか・・・

・・・思い出せないのが歯がゆい。あと少し、というところで露がかかる。

むう・・・なんかイライラするのと同時に切ない気分になる。

・・・なんで？

「ふむ、記憶喪失とは驚きだな」

・・・目の前にいきなり黒い服が現れた。

上を見ると、すごい威つい爺さんが立っていたよ

「・・・え？これも私の知り合い？」

「ああ、そつだ。お前、『衛宮 嗣音』の知り合いだ」

「エミヤ・・・ツグネ・・・？」

・・・私の名前・・・なのか・・・？

エミヤ・・・衛宮・・・？

「・・・頭・・・痛い・・・」

「む、ちよつとあせりすぎたかの？」

頭が・・・何かで殴られるように痛い・・・

『思い出すな』って警告するみたいに・・・頭痛が強くなってくる・

・

「・・・い、つ・・・ね」

『ま・・・たー・・・！・・・す・・・たー・・・！』

何か聞こえるようで、聞こえない・・・
そこで、私は意識が無くなった。

第三十一話 『記憶？私の？』 (前書き)

・・・む？

「どうした？アーチャー？」

「・・・いや、気のせいだろう」

今、魔力が流れ込んできた感覚がした。

だが、私は契約をしていないし、パスも通っていない・・・何っ！

「パスが・・・通っている・・・だと・・・!?」

しかも、この魔力は・・・!!

「衛宮士郎・・・皆を呼べ」

「ど、どうしたんだ・・・？アーチャー・・・？」

「・・・お前の姉は・・・生きている・・・」

第三十一話 『記憶？私の？』

真つ暗な、深い深い闇の中にいた。

そして、そこには多くの光る球体が浮かんでいる。

・・・ああ、ここは・・・私の・・・

記憶の世界。だが、なぜかどれもが淡い輝きしか放っていないかった。

・・・死んだ代償だろうか？どれもが薄れてよく思い出せない。

だけど、たった一つだけ、とても輝く球体があった。

忘れないように、魂に刻んである輝き。

「・・・ああ、そうか。皆の・・・助けることが出来た人の笑顔か・・・」

十を救えたわけじゃない。一を切り捨てたときもあれば救えなかったときのほうが多い。

それでも、救えた人の笑顔が嬉しかった。だから、何時までも忘れない。

心は、救えなかった絶望に磨耗していったけど、笑顔だけは忘れていない。

全ての記憶が無くなる、なんてことは無い。

この記憶は、この記憶だけは魂に刻み込んであるのだから・・・！

私を、光が包んだ。

「・・・あ？見たことある天井だ」

『マスター！大丈夫ですか！？』

・・・机においてある腕輪がしゃべる。

「大丈夫だよ、フェイル」

『マスター・・・！記憶が・・・戻ったのですか・・・？』

「・・・うん。忘れてはいけない、罪と、救った人の・・・幸せそうな笑顔を・・・忘れるなんて、な」

『・・・マスター・・・』

「そうだ、忘れてはいけない。救えなかった人もいるけど、それでも、救った人の笑顔があるんだ。後悔ばかりはしてられない」

うん。ちゃんと思いだした。

「・・・なんだけど、なんで私生きてるんだ・・・？」

『それは私にも・・・。私も一緒に浄化されたはずなのに・・・』

確か・・・『キラエ・エレイン浄化する星々と命の光』を発動して・・・私は死んだはず・・・

「まさか、不発・・・だった・・・？」

『いえ、確かに発動していました。ただ・・・マスターの瞳が』

「ん？目がどうかしたの？」

『・・・あのと時のままなのです。紅色と、黄金の目のまま』

「・・・私が、浄化されなかった・・・？」

いや、そんなはずは無い。アレが発動すれば私は肉体ごと消滅するはずだった。

・・・だが、私は生きている・・・

「……まあ、奇跡ってやつかな？」

『生きているのに越したことは無いですからね』

「セイバーにも謝らなくてすみそっだ」

ん？セイバー……？つて

「そっだ！！宝石爺！！」

「ここにおるぞ」

私の目の前にいた……。ん、相変わらず敵つい髭だ。

「つてうおっ！？どこから沸いて出た！」

「人を蟲みたいに言いおつて……。迎えに来たぞ、同志よ」

「へ……。？……。ああ、そっい言つてたなそんなこと」

「忘れておつたのか……。？」

「……。ごめん」

いやいや、もう色々ありすぎてね？気にしてる暇が……。ね？

「……。まあ、良い傾向じゃな。それほどまでに、この世界を大切に思ってるのは」

「あはは……。？」

「……。で、どうする？嗣音。戻るか？」

「ああ。戻るよ」

「いいのか？もしかすると、戻つてこれないかも知れんぞ？」

「大丈夫。その対策は、考えてあるから」

荒業だけどね？

「・・・そうか。ならば、行くぞ。いいな？」

「あ、ちよつと待って。その人たちでできなさーい」

扉に向かって話す。

すると、扉が開き、なのは、フェイト、はやて、ティアナ、スバル、エリオ、キャロ、シグナム、ヴィータがそこにいた。

「・・・いつちやうんですか？」

「うん。大丈夫、戻っては来るから」

「絶対ですよ！？もつと、お話したいんですから・・・」

「うん。・・・あ、私の部屋片付けておいてくれない？」

「あ、はい」

よし、これでいい。

「じゃ、頼むよ。ゼルレッチ」

「ああ。行くぞ」

虹色に輝く宝石剣から光が放たれ、その光が収ると、私達はこの世界から消えた。

「なのは、わかっているな？」

「はい」

「ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、どですか？」

シグナムたちの言っていることがわからなくて、ティアナが皆を代表して尋ねる。

「あのツグネが『部屋を片付けておいて』と言うわけないだろう」「つまり、私達もついていく方法がツグネさんの部屋にあるってこと」

「なるほど・・・」

「ま、アイツのことだからな。クローゼットにでも隠してあるのだろう」

「私達もついていくよ!」

『はい!』

ツグネさんの世界に、私達も行く。

第三十二話『帰郷』

嗣音です！

帰ってきました地球に！！

ビバジャポ・ネに！と、言いたいところなのですが、帰ってきたのは『時計塔』……つまりロンドンでございます。

で、この宝石爺に『飛行機のチケットを買ってこさせるから待てる』といわれ、現在時計塔の授業参観中です。

いや、宝石魔術師がわんさかいること……金持ちどもが……！

『マスター、声に出ています』

「おっと、悪いねフェイル」

なんか……最近腹黒くなってきてる気がする。

ま、いいか。いつものことだしね。

「おい、お前」

「あ？」

……だれだこの金髪は？

「お前見ない顔だな、名前は？」

……失礼なボンボンだ

『うわ……アイツよ……』

『あの子可哀想に……』

……もとから失礼な奴のようだ。

「お前」ごときに言う必要はない」
「なっ……！お前……僕を誰だと思っている……！」
「知らん。どうでもいい。さようなら」

さつて、次の魔術の教室にでも

「さてこの白髪女……！」
「……それがどうかしたか？私は見学で忙しいんだ、じゃあな」
「さてつて言ってるんだろ……！」

ドンツという音が聞こえて、私の頬を黒い球体が掠めていった。
……なんだ、ガンドか。

「無視しやがって……！そこに直れ！」
「（無視無視つと）……」
「てめえ……！」

また放たれるガンド。……よわっちいなあ……
当たる直前に、投影したバットで打ち返した。

「ピッチャー返しっ！」
「がっ！」

おお！狙い通りに直撃した……！
私の腕もなまってるな！

「いや、すっかりすっかり」
『オニですね……マスター』

ん？周りの視線がなんか痛い・・・

『あれって・・・投影？』

『嘘・・・なんであんなことしてもまだ現界出来るの・・・？』

『かつこいい・・・』

『その意見は予想できなかったわ・・・』

・・・あ、破棄するの忘れてた・・・

そして『かつこいい』と言ってくれた女の子ありがとう！！

お姉さんはそれだけで涙が出るよ・・・

「破棄つと・・・」

硝子が砕けたような音を立て、消えるバット。

「さて・・・次に行くか・・・」

えつと・・・あ、そうだ・・・

「そこの貴女、ちよつといい？」

「わ、私ですか！？／＼／＼」

「うん。ここら辺に、グラデーション・エア『投影科』はある？」

「あ、その・・・『グラデーション・エア投影科』は受ける人がいなくて・・・」

「ありやりや・・・ま、使い勝手悪いモンね、これ」

新しく花や宝石を投影する。

ま、だいぶ魔力食うしね。

「す・・・すこい・・・！」

「ああ、でもこれ、表面だけで中身が無いんだ。この宝石、解析し

「てみて？」

「は、はい……！……あ、ほんとだ……魔力をためれる構造じゃない」

「でしょ？難しいんだよね。確かに」

投影がマイナーな理由がこれだ。

物体の中身がないと意味が無い。支えるものが無くて崩れてしまう。ま、武器の類なら私は大丈夫なんだけど……それ以外だと書庫バンクに完全接続しないといけない。

書庫とは、前になのはがいた世界で言う『無限書庫』みたいなものだ。

『星々の本棚』。通称『書庫バンク』。

そこからその物体の構造を読み込んで投影を行う。

武器の類は要らないけどね。

自分が投影したいものをすぐに投影できるから、書庫はとても私にとってありがたい。

「……じゃあ、鉱石科でも見学するか」

「時間切れですよ？」

「お、バルトメロイさん」

『バルトメロイ・ローレイ様！？』

「……行きますよ、エミヤ様」

そういつて先頭を歩くバルトメロイさん。

私はさっきの子にありがとうとお礼を言っ
てバルトメロイさんに並んだ。

歩いていくと、人がいなくなった。それを見計らって、話しかけた。

「相変わらず硬いんだね……てか、『ミスリルの聖外套』ってあった……何と戦う気だ？」

「いつものことだ」

相変わらず恐ろしい装備してんな・・・この人

「それより・・・お前、完成したのか？」

「ああ、アレね。一応・・・かな？」

「・・・なるほど、つまりお前もあの人と同じ領域に達したのだな」
「まあ、ね」

アレとは、『キラエ・エレイン浄化する星々と命の光』の事もある。

太陽や月を使い、星を結び魔法陣を形成するから、大魔術・・・つまり『魔法』の領域だ。

けど、現実世界で使うと被害の大きさがわからないから、『固有結界』の中でしか使わないけど。

「・・・しゃべりすぎたな。どうも昔馴染みと出会うと話したくなってしまう」

そんな話をしていると、宝石爺のいるところまでついた。

「そんなもんかね。・・・じゃ、また来るよ、『バルトメロイ』」

「ああ、また来いよ『嗣音』ただ、今度は人蛭と一緒に来ないようにな」

「相変わらずだね。気をつけるよ」

時計塔の門をくぐり、外に出た。

ちなみに、『人蛭』とは『死徒』をあらわす。つまり・・・宝石爺のことだ。

凄いいこと言うよね・・・使い手は五人だとか四人だとか言われている魔法使いの一人を蛭扱いだよ・・・

ま、そんなことを思ったのもつかの間。外に出て久しぶりに見るロンドンの風景は綺麗だった。

「おお・・・久しぶりだな・・・この風景」

「感傷に浸っている場合じゃないぞ、嗣音。車を用意させておる、急ぐぞ」

「りょうか〜い」

宝石爺が車に乗り込んだ。

・・・うわ、黒い長い車だな・・・リムジンってやつか・・・車のドアを、スーツを着た男の人が開けてくれてる。早く乗らないと・・・

車内に入ると、シャンデリアが車の中を照らしていた。

・・・なにこのブルジョワ感満載の車。

「・・・嗣音、お前『キリエ・エレイソン』は発動させたのか？」

「ああ・・・発動したよ。アンリマユを浄化するために」

「・・・そうか。よく、生きて帰ってきてくれた」

「ま、そう簡単に死ねないってことで」

そういうと、ゼルレッチが私の髪をかきあげた。

「瞳の色は・・・変わってしまったな」

「まあね。でも・・・それでも私はここにいる」

「・・・そうだな。お前はそのままだ。優しく、強いままで」

髪をいじくるように懐かしむように触る。

・・・けっこうくすぐりたい。

本当のおじいちゃんに触られてる感じがする。

「・・・お、着いたようじゃな」
「あ、ホントだ」

空港が見える。

「ふむ、では行くとするか」
「うん」

そして、私は飛行機に乗り込んだ。
乗り込んだのだが・・・

金属探知機にフェイルが引っかかりました。

そして、今フェイルは貨物の中にいます。

予想していたとはいえ、外すときに念話で『嫌ですマスター！』
と言っていたのは忘れない。

たぶん貨物の中で『マスター・・・』と喋ってることだろう。

ごめんよ・・・フェイル・・・
良く分からないけど心が痛んだ。

第三十二話『帰郷』（後書き）

ミスリル
聖金属の聖外套・・・

「銅のように打ち延ばせ、ガラスのように磨ける。銀のような美しさだが、黒ずみ曇ることがない。ドワーフはこれを鋼より強いが軽く鍛えることが出来た」とされる金属を使用したバルトメロイの外套で、防具としては一級品である。

金属自体が希少であり、それを加工できる人物も希少である。

死霊や不死生物を退ける性質をも持ち合わせているため、死徒などの戦闘には最高の防具といえる。

第三十四話 『冬木市到着』

おはこんばんちわ、嗣音です。

飛行機で国を越え、ついにジャポーン、日本の冬木市に到着しました！！

・・・ついた、か。

「・・・全く変わらないな・・・ここは」

離れてからどれくらい経ったのだろうか？

何もかもそのままのようで、とても懐かしい。

「久しぶりの故郷じゃ。ゆっくりしていくのじゃぞ？」

「・・・ありがとう、ゼルレッチ。また会いましょう」

「ああ。またな」

ゼルレッチはそう言うと、宝石剣を使い飛んだ。

・・・さて、ちょっと寄り道して・・・土郎の家に向かうか・・・

「・・・許されてなんて、いないんだろうな・・・」

『マスター・・・』

「・・・ここで落ち込んでなんていられないな。さて、商店街を通つてから向かうか」

『はい』

なのはside

「・・・ここがツグネさんの・・・家」

「来たか・・・」

なのはです。ツグネさんの部屋を調べていると、転送魔法陣を発見しました。

シグナムの読みどおりクローゼットの中にあっただの。

で、今私達は大きな武家屋敷のような家の前にいます。

「おつきい・・・」

「デケー・・・」

「なかなか風情がある家だな」

「「かつこいい！」」

皆が色々な感想を言っていく。

最後のはキャラにエリオね。

「・・・『衛宮』って表札に書いてあるし・・・ここだね」

「とりあえず、インターホンを押して、中に入らせてもらおうおよ」

「そうだね。ポチツと・・・」

ピンポーン

『はい、どちらさまでしょうか？』

インターホンから男性の声が聞こえた。

「あ、私はツグネさんの知り合いで高町なのはといいます」

『・・・！姉さんのお知り合いでしたか。どうぞお入りください』

インターホンの通話が切れ、赤毛の少年が出迎えてくれた。

「どうぞ、こちらです」

「あ、はい。皆々行くよ」

「へ？一人じゃない・・・って多っ!？」

「にはは・・・すいません」

そりゃこれだけの人数で来たら驚くよね・・・

「む？どうした衛宮しろ・・・!」

・・・あれ？この声・・・

「あ、アーチャーさん!!」

エリオがアーチャーさんを見つけると、玄関に出ていたアーチャーさんに抱きついた。

「え、エリオ!? どうしてここに・・・?」

「あ、えつと・・・」

「どうしたのアーチャー・・・って何？この御一行様」

今度は赤い服を着た綺麗な黒髪の女性が現れた。

「・・・まさか士郎の知り合い？この綺麗な人たち」

「い、いや・・・！姉さんの知り合い」

「っ!! そう。とりあえず、上がってもらったら?」

「ああ。えつと・・・こちらです」

「すいません・・・おじやまします」

『おじやまします』

嗣音 side

「・・・ほんと、なにも変わってないね」

商店街に入ると、昔と同じ光景が広がった。
わいわいと嬉しそうににぎわう人達。

魚屋や八百屋、肉屋が繁盛しているようだ。
スーパーはバーゲンらしく、人が多い。

・・・何も変わらない。平和の象徴ともいえるこの光景。
見ているだけで幸せになってくる。

「・・・おい・・・あれって・・・!」

『もしかして・・・!』

『嗣音・・・ちゃん・・・?』

・・・へ?

『嗣音ちゃああああああああああん!』

「にゃあああああああああ!」

いつせいに人が集まってきたよ!?

『心配かけさせやがって!!』

『いままでどこ行ってたんだよ!?!』

『よく帰ってきたな!!』

いろんな人が、私の頭を撫で回したり抱きついてきたりする。勢いに圧倒されながらも、皆の優しさが伝わってくる。

「・・・ただいま」

『お帰り！！嗣音ちゃん！！』

『さて、嗣音ちゃんが帰ってきたのでサービスタイムだ。魚を更に二割安くするぜ！』

『俺も野菜を安くするぜ！』

『ウチは肉を安くするよ！嗣音ちゃん、買って行っておくれよ』
「うん！」

この人たちは本当に優しく、温かった。

第三十五話『帰宅』

・・・しまった。ついいっぱい買ってしまった・・・!! 私の手には大きなビニール袋が二つずつ提げられてる。久しぶりすぎて買い込んでしまった・・・!!

「はぁ・・・この量どう説明しようか・・・」
「む？貴様は・・・」
「・・・は？」

この偉そうなしゃべり方は・・・

「やはりツグネだったか。久しいな」
「・・・ギルガメッシュか。久しぶり」
「うむ。ところでどうしてこんなところにいる？」
「それはこっちの台詞なんだけど・・・？」

この王様が商店街に来るのは珍しい。
まあ、「庶民よ！」とか言って来そうだけど。

「ふむ、言峰から逃げていてな。我に『奉山』の麻婆豆腐を食べさせようと躍起になっていてな」
「・・・は？言峰？なんで？」
「わからんが、いきなり現れてな。まあ何も企んでおらんしな」

・・・言峰はあの時私が殺したはず・・・
なのに何で生きている・・・？
だが・・・平和そうだし・・・な

「む、衛宮嗣音ではないか」
「言峰……綺礼……」

後ろからした声に振り返ると、死んだ魚のような目をした神父、言峰綺礼が立っていた。

「な！？言峰！！まだ我をあのお店に連れて行くつもりか！？」

「勿論だ。あの麻婆豆腐の美味しさを教えてやるっ」

「……やっぱり、言峰……？だけど……」

「ふむ……嗣音。私がここにいることが嫌か？」

「いや……そういうわけじゃないんだけど……不思議でさ」

そう。本当ならここにいるはずの無い人間が立っているのだから、疑問に思わないわけが無い。

「まあ、これも神の思し召しというものだろう。お前も食べていくか？」

「いや、お前神様信じていないだろ？そしてそのお誘いはまた今度にするよ。先に家に帰らないと」

「ま、待てツグネ！我も「お前は私と一緒にだ」離せー！ー！！」

「……」愁傷様

なぜここまでギルガメッシュが嫌がるかの補足説明だ。

中華料理店、名を『紅州宴歳館 奉山』……一見ただの店なのだが、実態はそうじゃない。

数々の激辛好きをノックアウトしていったとされる麻婆豆腐のせいで、客は寄り付かないが、この神父と私は好んでこの店の麻婆豆腐を食べる。

そして、この麻婆豆腐は今引つ張られている英雄王、ギルガメッシュですら敵わないほどに辛く、『宝具級』だそうだ。

一口食べただけで、辛さのあまり気を失う人もしばしば。まさに激辛料理店。

「……言峰風に言うと『アーメン』かな」

さよならギルガメッシュ。今度口直しに何か作りに行つてあげよう。

「……にしても言峰が生きてるとは……ま、今の生活を楽しんでいるようだしな。いいか」

士郎の家に向かないと……

「……着いた」

意外に重かった。手に提げてるスーパーの袋が……鍛えてるつもりなんだけどな……。

さて……なんて言って入ればいいのだろうか……？
うん……

「貴女、ここで何をしている」

「あ、すいません」

「・・・！ツ・・・グネ・・・！」

「あ・・・バゼット・・・？」

しまった・・・一番厄介なものに見つかった・・・

って・・・なんで泣いてるの!?

そしていきなり抱きついてくるし!?

「ツ・・・グネ・・・！ツグネ・・・！ゴメン・・・なさい・・・

！」

「ちょ、バゼットさん!? 力強すぎ!! 何か出ちゃう!!」

「あ、すいません・・・！」

ほんと・・・なにか出そうだった・・・内臓的な何かが。

「ツグネ・・・本当にすいませんでした・・・!あの時、私は何も知らずに貴女を・・・！」

「・・・へ?なんでそれ知ってるの・・・？」

「アーチャーが・・・教えてくれました」

・・・あ、アイツに全部話したんだっけ?

すっかり忘れてた・・・てか、アイツ戻ってこれたんだ・・・

「あ、そうなんだ。ま、詳しい話は後で聞くよ・・・。中に入る？」

「はい」

バゼットのおかげで中に入るいきっかけが出来た。

・・・ほんと武家屋敷みたいな家。全く変わらない。

「・・・ただいま」

「おかえりなさい。ツグネ」

皆を代表して、バゼットが笑顔で迎えてくれた。

・・・ついに、私は帰ってきた。親父と約束を交わした家へと。

第三十六話『帰宅、それから』（前書き）

ロサです。

活動報告をごらんいただけただけでしようか？

話を練り直すために何本か削除しました。

すいませんが、よろしくお願いいたします。

第三十六話 『帰宅、それから』

士郎 side

『お帰りなさい』

バゼットの声が玄関から聞こえてきた。

だが、『お帰りなさい』とは誰に言っているのだろうか？

家が上がってもらったなのはさん達は、今姉さんの話で遠坂達と盛り上がっている。

それを聞きつけた藤ねえは、なんと酒瓶を箱ごと持ってきていた。

『ツグネ』

『ただいま』

「ねえ……さん……？」

姉さんの声が、聞こえた。

玄関から、昔から聞いていた透き通るような声が頭の中に響く。

「ら、ランスロット……」

「どうしました？士郎」

「一緒に、一緒に来てくれないか？」

「？了解いたしました」

ランスロットを連れて、俺は玄関に向かった。

玄関では、バゼットと一緒にいる姉さんの姿があった。

俺たちに気づいたのか、こちらを見て笑顔になる。

「……士郎、ランスロット……!!」

「姉さん・・・!!」
「ツグネ・・・!!」

俺とランスロットは、姉さんに抱きついた。

男二人分の勢いに少しよろめいたが、バゼットが支えてくれたおかげで倒れずにすんだ。

「お帰りなさい!」
「・・・ただいま」

「と、いうわけで私は帰ってきました」

「……壮絶ですね」

「……絶句ものですね」

記憶喪失の件もちゃんと説明すると、士郎やランスロットを含めて皆が少し落ち込んだ。

いや、壮絶だとは思っよ？私も。

「帰るのが遅い（スパアアアアアン！！！！）」

「シグナム！だからハリセンはやめてえええ！！頭が！皮膚が裂けるような痛みがあー！！」

「あはは……」

さくらあ……！たすけてよお……！

「……そういえば、ツグネさんは料理が上手いんですね？」

「どしたの？フェイト」

「作ってみてくれませんか！？」

「おおー！本当にどうしたのフェイト！？あとなんでシャルとランスロットはいがみ合ってるの？」

「……私こそ湖の騎士です！！」

「私が湖の騎士だ！王に仕え、ガウエインと共に国を守りきり、この二つ名を頂いたのだ！」

「むむむ……！」

……仲の良いことで。

そういえば、シャルも湖の騎士だったね。

「ほう、主から聞いたことはあるがまさかアイツが・・・」
「うん。木の枝で敵を倒し、剣以外の武器をも自由自在に操る騎士。
ランスロット」
「一度手合わせ願いたいな」
「そう言つと思つた」

シグナムと手合わせさせて、どっちが勝つかも見てみたいしね。

「まあ、とりあえずご飯を作るか・・・」

台所に立つ。ここから私の独壇場だ。

「ふふふ、この世界は楽しそうだぞ・・・！」

「むむむ・・・！」

「ううう・・・！」

「わくわく！わくわく！」

衛宮家も、にぎやかになつたなあ・・・。

「・・・ツグネ先輩、いろんな人とお知り合いになりますね」

「ツグネはもともと知り合いが多いですからね」

「本当にいろんな人につてがあるわよね」

私は、料理人の戦場に立つた。

「美味しい・・・!!」
「魚がまたなんとも・・・」
「美味い!!!」

皆が笑顔になる。
ふっ・・・! 勝ったぞ・・・。
今日も私の勝ちだ!

「ツグネさん、生き生きしてるなあ」
「料理は戦だからね。わかる」
「ああ、料理人は食べる人の笑顔が見れた瞬間に勝利の喜びを得る。
そういうものだ」
「・・・はあ」

シャマルが感慨深そうに頷く。
はやてはその通りだとても良いたそうに腕を組んでいる。

「平和だな」

ゆっくりと、休むとしよう。

虎聖杯編 1 七夕騒動く謎の聖杯、それは・・・ポット？

さて、私がいた第五次聖杯戦争は終了した。

勝者は誰もおらず、あのときほど被害もなく、平和に。

・・・ただ、七夕がきっかけで新しい聖杯戦争が始まったと思うと、複雑な気分では無かった。

それも、なのは達も巻き込んでの聖杯戦争だったからだ。

昨日はフェイトとシヤマルに料理を教え、一日が終了した。

一言で言うと、『兵器が誕生したよ』だ。ま、私と士郎とアーチャーで頑張ってシヤマルの腕を格段に向上させたことにより、もう兵器は作り出されないだろう。・・・たぶん。

・・・ごめん。今の状況を認めたくないだけなんだ。現実逃避していただけなんだ。

だって、茶の間からいろんな部屋のもものが全てトラ柄になるなんて信じたくないじゃないか。

「ど、どうなってるの・・・？」

「ね、姉さん！！これって・・・！！！」

士郎が駆け込んできた。それと同時に、外からアナウンスらしき声が聞こえてきた。

『え、毎度おなじみ聖杯戦争でございます。ご不要になった夢希望、もう諦めた野望などがありましたら、お気軽にコロシムにおいでください』

・・・それは、この状況に全くそぐわないほど明るい声で、しかも聞いたことのある声だった。

「「藤ねえのせいだ・・・！」」

藤ねえとは、本名『藤村大河』というお隣の『藤村組』の一人娘で、私たちの穂群原学園の英語の教師である。それに、今まで寝ぼけて気づいていなかったが・・・私、背が縮んでるような・・・。

「姉さん、そういえば背が縮んでない？」

「うん・・・。そうなんだよね・・・ちょっと待ってて、ロード解析オ開始」

自分の身体に魔力を通し、解析する。

衛宮 嗣音

年齢 18歳

魔術回路 異常なし

身体状況 身長が縮んだ模様、それに連れて体重も減った。 原

因は不明 戻る可能性はきわめて低い

戦闘 問題なし だがリーチに若干の不備がある模様

投影 異常なし

固有結界発動 可能

魔法使用 異常なし

……ん？

年齢のところおかしくないかな……？

「十八歳……？」

「え……？若返ってる……？」

「……そういえばさ、昨日藤ねえがなんか良く分からないポットを掲げてさ……」

「あ、うん。七夕だからって『嗣音ちゃんを若返らせて!!』って叫んでいたような……」

「……まさかあれ？」

「いやいや、それこそなんでさ」

昨日は短冊作って、藤ねえが調達してきた笹に皆でかけて、星に祈って……宴会のように酒を飲んで……。

「……ポットを掲げて……寝て……目が覚めたら……」

「こっぴなつた」

……まあ、認めるしかないね。

それにしても……もしかしてあれが？

「ポットが聖杯か……。と、いうよりどうして藤ねえが持つてるんだらうか……」

「『虎』聖杯だから？」

「……タイガー聖杯……ギャグとしか思えない……」

納得した私はダメなのだらうか……？

……よし！とりあえず！！

「藤ねえ探し出して説教だ!!」
「そうだな!!」

全てを忘れて目の前の事態に取り組むとしよう!これが日々のストレスに負けないコツだ。

藤ねえ・・・、若返らせてくれたのは感謝だけど調子に乗らないようにしないとね!

「・・・そういえば姉さん、七夕になに祈ったの?」

「『家内安全』と『ランスロットと一緒にいられるように』『これからも、皆と一緒に』」

「姉さんらしいや。俺も似たようなものだし」

「・・・そういえば、藤ねえは一体何を願ったんだろう・・・」

「見てみるとするか・・・」

藤ねえの短冊を見る。

そこには、『虎柄はやれー』と『嗣音を若返らせて』、『皆で仲良く!』と書かれていた。

「・・・藤ねえらしいな」

「うん。さて、行くとしますか」

皆を巻き込んだのはちゅめちゅバトルロワイヤル！

F a t e t i g e r c o l o s s e a m S t r i k e r s

・・・始まります！

虎聖杯編 1 七夕騒動く謎の聖杯、それは・・・ポット？（後書き）

口「と、言うわけで新章、タイガーコロシウム編に入りました！」

嗣「いや、七夕だからってこれに結びつけるのはどうなのさ」

口「いや、繋がるかな？って思って」

嗣「それより、作者はUPPERしか持ってないんじゃない」

口「うん。だからほぼオリジナル」

嗣「いいの!？」

口「頑張るよ」

嗣「・・・あのさ、もしかしてアッパーまで持っていく気？」

口「うん。タイガーコロシウムシリーズはとりあえず全部やる」

嗣「じゃあ、あの人も出るの・・・？」

口「だすよん！ってか、それもこのお話の醍醐味の二つだから。と、

いうわけで頑張ります！」

虎聖杯編 2 虎、虎、虎！

「とりあえず町に出てみよう！」

「だな。遠坂に援助を頼んで」「つ、ツグネさん！！」「今の」

「なのはの声？」

「な、なんですかこれー！！」

なのはの声が寝室から居間にかけて響き渡る。
な、何がおきてるの！？

「士郎！行こうー！！」

「ああー！！」

廊下を走り、なのはのいる寝室に向かう。
そして、寝室のふすまを開くと

「あ、ツグネさんー！！」

「と、虎耳と」

「と、虎の水着！？／＼／」

士郎の言うとおり、何故か昔あった『うる星やら』を連想させるような虎柄の水着を着ているなのはが顔を真っ赤にしながら涙目で私たちを見上げていた。

あ、士郎鼻血出てるよ。

「し、シロウ君は見ないでー！！！！！！」

「は、はいいいいいい！！！！！！」

士郎猛ダツシユで部屋から出て行く。

うん、まあその反応はわかる。私もこののはを見てたら愛でたくなるもの。

ご丁寧に虎の足の手袋みたいなのもついるし、尻尾まで……。完全武装？

「ど、どうなって……？あれ、ツグネさん背が縮みました？」

「あ、今から説明するから機動六課のメンバー集めてくれる？」

「は、はあ……」

なのはは念話で皆に集合をかける。

すると、

『きゃああああああああああああああああああああああああああああああ……！……！』

という声が屋敷中から聞こえてきた。

「さて、このような状況になったことについて説明します！！」

「そ、それよりシロウ君！こ、こっちを見ちゃだめなの！わかった

！？」

「は、はい！！理解しています！！」

「ど、どうしてこんな格好なのよ……！！」

「ティア似合うね！。でも私はツグネさんのも見なかったな」

「せや！なんでツグネさんだけ違うん！？わ、私たちだけこんな恥

ずかしい格好はあんまりや!！」

「あー、説明しますので落ち着いて」

皆をなだめる。

ここで唯一騒いでいないのはシグナムとヴィータ。流石なんだが、シヤマルは顔を赤らめて蹲ってる。

「そ、そういえばザフィーラは？」

「呼んだか？」

「ん？」

「……………」

声のした方向を見ると、虎柄の腰巻を巻いたザフィーラが立っていた。

うわ、似合うね。

「ん？皆どうした？確かに夏だが皆そろってその格好は駄目だろう。

主も恥ずかしいのなら着替えればいいのに」

「そ、それがやね…………、脱げへんのよこれ」

「そ、そういえば…………。しかも脱ぐ気にもなれません…………!」

「上に何かを羽織る気にもなれないよ……………」

うわあ、大変だそれ。外出したらもつと大変なことになりそう。

「ツグネ、これは一体どうなっている？それにお前縮んでるとい
か、魔力の量も少なくなっているぞ」

「うん。それについても説明するから」

シグナムの鶴の一声により全員が私のほうを向く。

「昨日、一人がこの屋敷にタツクルし掛けてきたのを覚えてる？」
「え、ええ。藤村大河さんだったわよね。あのお酒を持って七夕を
宴会にした人。その人と何の関係が？」
「外に出て何か掲げてたのを覚えてる？」
「た、確かポットだったような……」
「ああ。『ツグネを若返らせて』と叫んで……まさか!？」
「うん。多分あれが今回の『聖杯』です」
『え、ええ……?』

皆が納得のいかない表情と声を出す。
私も納得いかないからわかるよ。

「で、ですがツグネさん!もしあれが聖杯ならもしかして」
「た、多分『聖杯戦争』おこるかも？」
「しかしツグネ。私たちはなんでこの格好なのだ？」
「あのね、私を若返らせる願いを言った後に多分、『虎柄よ、流行
れ……!』みたいなことを言ったんじゃないかと」
「た、確かに叫んでたぜ!しかし、願いが二回ともかなうものなの
か？」
「『魔法のランプ』いや正確には『魔法のポット』みたいなものか
と。もしかするともう一回だけかなえられるかもしれない」
「と、とりあえず!私たちはこの格好では出歩けないのでお願いし
ますツグネさん!」
「う、うん。ちょっと藤ねえを説教して直してもらってから待って
ね」
『お願いします!』

皆の思いを胸に、士郎を引っ張って外に出る。

「つ、嗣音!!」
「マスター!!」

私たちのサーバントが走りながら叫ぶ。

「セイバー!!」

「ランスロット!大丈夫?」

「わ、私は大丈夫です。しかし、他の者達が全員虎柄を愛で始めまして何が何だか」

「セイバー、問題ないか?」

「私も大丈夫です。しかし、これは一体……」

「あゝ、その。藤ねえの仕業」

「た、タイガですか?」

セイバーが驚愕する。

ま、まあ、納得はいくけどね?

「つ、ツグネ?ラインに流れる魔力の量が少ないような気がするのですが」

「あ、それなんだけど」

「……!!ツグネ、若くなっていますか?」

「さ、さすがランスロット!昨日のことでの説明もあるから聞いて

ね

~~~~説明中~~~~

「なんと、新しい聖杯ですか」

「さながら『虎聖杯』といったところですね、王よ」

「そ、そうだな。しかし、タイガはどこに……」

「そういえば、『コロシウムにおいでください』って言ってなかった？」

「あ、確かに言ってた……」

「コロシウム、ですか？しかしこの冬木市にそのような場所……」

『マスター』

フェイルから声が聞こえてきた。

「ん、フェイル？」

「おや、フェイル殿。どうかしたか？」

ちなみに、七夕の日にフェイルは説明済みです。

皆に言うところアーチャー以外『何イイイイイイ！？』と叫んでいたよ。

そしてなぜか凜ちゃんは『うう、しゃべるなんて悪い思いでしかないわ』と少し落ち込み気味で言っていた。

何があつたの？

『この辺に、凄く膨大な魔力反応があるのですが』

は、いかんいかん。フェイルの話に集中しないと。

「魔力反応？え、どこに？」

『ここから北の位置です』  
「そ、そんなものあれば見つけ……」

フェイルの指示した方向を見た瞬間、異様なものが私たちの目に入った。

一部、空間が切り取られたかのような星の背景を持つ、虎の像が置かれていた。

周りが青空に対し、その星空はさながら異空間を表すにふさわしい背景だった。

もう異様以外の言葉では表せないほどに異様な光景。

『え、ええ……？』

もう、不思議というか、呆れたかのような声しか出ない。

「と、とりあえず、あそこ目指す？」

「ま、マスターの命令とあらば……なのですが」

「ら、ランスロットの言う通りなのですが、なぜかあそこに近づいたら負けた気がします」

「お、俺も」

「い、いや。それを言うなら私もなんだけど……」

あんなあからさまに『異空間ですよー』といわんばかりの場所に飛び込むのは、なんでか気が引けるなあ。

「ま、まあ行こうよ。あからさまに罠の気配しかないけど」

「そ、そうですね。行きましよう」

「な、何も始まりませんしねー！」

「そ、そうだな！行こうか」

こうして、変なコロシムに行く気が引けるものの、行くことになった私たちだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3413q/>

---

魔法少女リリカルなのはstrikers x Fate stay night ~ 剣の祈り ~

2011年9月18日15時01分発行